
ナイトウィザード2nd 人化の剣

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトウィザード2nd 人化の剣

【Nコード】

N4243D

【作者名】

刹那

【あらすじ】

ある日奇妙な夢を見た上代刃太は、その晩”夜闇の魔法使い”に遭遇する――。姉とは思えない姉、金髪美少女、傭兵家業の青年。ヒトガタの魔剣。そして刃太は成り行きから大量行方不明事件の犯人探しを行うことになるが……？【この作品は原作未読者もわかるようになっています（前半除く）】

1：異法の者共

四肢の感覚がなかった。

身体感覚がなかった。

そもそも自分という存在を実感できなかった。

でも、こういう思考を働かせていられると言うことは、今も変わらず存在しているのだろう。

沼の中を漂っているような、粘液が纏わりつく感覚があった。感覚がないと言ったのに感覚があるのは、果たしてどういうことなのか。

それは、漂っているという感覚を除いて他の触覚機能——五感が総て失われているのだ。

目も見えず視界は不安を誘う黒、耳になんの音さえ届かないしの、意味が分からない状況。

だが、その中にいて不安を感じてはいなかった。

逆に心が落ち着き澄み渡る水面のように落ち着いていた。何故こんな状況で至上とも言える安らぎを感じているのか、それは分からない。ただ、物理法則に縛られていないこの感覚を何故か他の日常的なものより自然だと感じていた。

不自由なものから解放され、空を自由に行く猛禽になったとしたなら、きつとこんな感じなのだろう。

安らぎと高揚を感じながら、何も出来ないはずなのに何よりも自由なこの感覚にずっと身を浸していたと思った。

その願いは、甲高い金属音で遮られる。

*

ジリリリリリリリリリッ。

頭上で子供が癇癪を起こしたように騒音を発する目覚まし時計を、
上代刃太はベットから手を伸ばしてスイッチを切り黙らせた。

「ふ、んんーっ」

身体を起こすと腕を伸ばして大きく欠伸をする。カーテンの隙間から差し込む日差しが眩しかった。

一息ついて肩を落とし、寝ぼけた頭を起こすために頭を乱暴に掻いた。

数秒して脳がゆっくり動きだし始めたら、それにしても変な夢を見たなあ、と先程まで見ていたものを思い出した。

夢は、起きていた時に起こった出来事を睡眠中に整理しているために見るもの、と聞いたことはあるけれど沼に落ちたような記憶はない。

夢の記憶は移ろい易いもので、刃太はもう断片的にしか思い出せなかった。それでも、なんだかとても安らいでいられた気がする。不思議な空を舞うような感覚も。本来有り得ないはずのそれが、夢の中では当然のことのように思えた。

目覚めた今では無論、空も飛べない不自由な普通人の身体であるのだけど。

「刃太ーっ、ごはん出来てるから早く起きてきなさいっ！」

「今行くよ！」

階下からの母親の声に、刃太は思考を中断した。

ベットから降りて、ハンガーにかけてあるブレザーの制服に着替えると必要なものを制服のポケットに収め、時間割を揃えた鞆と脱いだ寝間着を手に部屋を出る。

階段を降りて洗面所の横にある洗濯機に寝間着を放り込む頃には、夢のことなど塵ほども覚えてはいなかった。

リビングに入ると制服姿の少女がテーブルに着いて朝食を口にしながら、早朝のニュース番組を見ている姿があった。

その少女がこちらに気づいてテレビから視線をこちらに移す。

「あ、おはよう、お兄ちゃん」

ひらひらと箸を持った手を振った。

幼さを残した可愛らしいショートヘアの少女に、刃太を嫌そうに顔をしかめた。

「あのさ、いい加減にやめてよ。それ」

「えー、なんで？ お兄ちゃん？」

「だーから……」

皺が寄った眉間を人差し指で揉んでから、並ぶと自分の肩より小さい位置までしか身長のない少女を改めて見た。

「姉ちゃん、俺より年上だろ。お兄ちゃんなんて言わないでくれよ。ちよつと気持ち悪いよ」

「ひどうい！ せっかく幼児体型を利用して妹属性完備のハイブリッド姉になってあげてるのにつ」

「……言ってて虚しくならないわけ？」

「うん、お姉ちゃん自分でも泣きたくなつた」

目尻を落としてうなだれる姉、上代奈々子^{かみしろななこ}を横目に溜息を吐いて、刃太も自分の朝食が置かれた奈々子の向かいの席に腰を下ろした。奈々子は童顔だ。

高校三年であるのに、二年の刃太より遥かに幼く見える。外見中学二、三年。発育も悪く、下手をすれば一年に見えなくもない。

ふたりが一緒にいるれば刃太と奈々子のことを知らない者から見れば、十中八九兄と妹に見られてしまう。それを逆手にとって姉はお兄ちゃんと刃太をからかってくるのだ。今日みたいに自爆することも多々あるが。

いただきます、と箸を持って朝食に手をつける。

ちょうどその時に台所から母親が自分の分の朝食を持って現れた。ふたりに朝の挨拶を交わして、奈々子の隣の席に座った。

朝食を食い進め、刃太が三分の二ほど胃袋に収めた頃、ニュースを見ていた奈々子が箸先を銜えながら呟いた。

「そういえばさあ、最近多いよね」

「なにが？」

「行方不明事件」

ああ、と姉の言葉に刃太は頭の隅からその記憶を引き出した。行方不明事件。

ここ最近、この周囲で頻繁に起こっている事件のことだ。被害者は必ず陽が落ちてから昇るまでの間に人知れず消えてしまうという。外の空気を吸ってくると出ていった者、買い物に出掛けた者、ペットを散歩に連れて行ってそのまま帰ってこなかった者。被害者は様々だ。男女年齢職業にも共通点もない。犯人を捕まえようと夜中に巡回していた警官までもが行方不明になった。

人から離れた隙にこつぜんといなくなることから、神隠しの異常発生と人々の話題によく上がっている。なんとも物騒な話だった。夜中に外を出歩けもしない。

「確かに多いよね。でもそれがどうかしたの？」

「うん、なんかね。関連性があるかは分からないみたいんだけど、行方不明事件と同じ状況で大怪我を負ったり、八つ裂きにされて殺されてる人がいるんだって。怖いねえー」

「俺は食事中に八つ裂きとか言える姉ちゃんの神経の方が怖いよ。まだ残ってるんだから止めてよ」

「そうよ、奈々子。まったく、食事中に変なこと言わない！」

「はい、と気の抜けた返事をして何事もなく奈々子はご飯を口に運んだ。

——行方不明に殺人、もしくは未遂事件がまったく同じ状況で現れる、か。

学生達の会話で、神隠しの異常発生が死神の魂狩りなんて少し気取った名前になるのも、時間の問題かもしれないな。刃太はぼんやりとそんな風に思った。

それにしても、夜間は本格的に家でくつろいでいた方がいいかもしれない。

バイトしてなくて良かった、と内心安堵しながら残った朝食を口に運ぶ。

グロテスクな話をした後の朝食は、お世辞にも美味しいと感じる

ことは出来なかった。

*

結果的に言えば、死神の魂狩りなんて呼ばれるわけもなく、放浪する喰人鬼と呼ばれているらしい。

行方不明は喰人鬼に喰われたから。死体は腹一杯で喰えなかったから残った。生存者は食事に飽きて放置された。

刃太の考えた名前より、納得出来そうな名前だった。

なので刃太はとつとあんな変なネーミングのことを忘れてしまうことにする。自分は名前なんて考えてはいない。以上。

チャイムの音が刃太のいる教室——輝明学園秋葉原分校高等部二年一組に鳴り響いた。昼休みの知らせに、教室の空気が弛緩した。教師が出ていくと、教室はどつと騒がしく賑わった。

さて、と刃太は席を立つ。弁当などを持ってきていない刃太は、購買部に行かないと昼飯にありつけないのだ。

一応財布の中身を確認。昼飯代には余裕で事足りる。

教室を出ていこうとすると、同じく教室から出ようとしていた少女とぶつかりそうになった。

「あつと、ごめん。花川さん」

「いえ、お構いなく」

花川、と呼ばれた少女、花川ひかりがセミロングの金髪を揺らして刃太に小さく頭を下げた。ふわりと髪から良い香りが漂ってきて、刃太の身体は緊張で硬直した。

花川ひかりは控え目に見ても美人の分類に入る少女だ。祖母が外国の人らしく——クォーターと言うやつだ——美しい金色こんじきの髪、日

本人離れた人形のような端正な顔立ちを持っていた。礼儀も正しく大和撫子と言う風情で、それはある意味で他文化との交流によって産まれた近代社会の象徴とも言えるかもしれない。

「ひかりー、早くきなよーっ！」

廊下の方からひかりを呼ぶ声があった。気付けば、ひかりの手には紺色の布に包まれた弁当がある。どうやら今から友人と食事をするようだ。

「あ、多恵ちゃん、今行きますっ。それでは、失礼します」

「あ、うん。邪魔したね」

友人の下に小走りで向かうひかりの背を目で途中まで追ってから、刃太は反対側の購買に向けて歩き出した。

*

お弁当を持って多恵ちゃんの後を追おうとしたら、刃太くんと入り口で話した。

花川ひかりは弁当の中身をつまみながら、ぼんやりと入り口でのやり取りを思い出していた。

上代刃太。

視線が彼を追ってしまうことがあるのは、一体全体何故だろう。今日のおでんは味付けが濃すぎましたね、と自分の料理の評価をしながら、刃太のことに首を傾げた。

「ねえ、ひかり」

向かいに座る中学からの友人、堺多恵さかいたえが学校にくる前、コンビニかどこかで買ってきた総菜パンをかじりながら声をかけてきた。場所は屋上。

春から夏に変わりかけの暖かい日差しが、辺りを気持ち良く照らしていた。

「ん、なに？ 多恵ちゃん」

「さっき話してたのって、上代だよね」

「うん、そうだけど」

にやっ、ひかりの返答を聞いて猫を連想させるように目を細めて、面白そうに笑った。

「へえ、でどうよ？ あいつのことは」

「どうって？」

「好きなのかってことよ」

のんびりしているようなひかりでも、それには流石に驚いた。頬を朱に染め、慌てて聞き返す。

「す、好き？」

「そう、好き」

「なんでそうなるの？」

だって、そう言っただけパンをかじり飲み込んでから。

「よくあいつのこと見てるじゃん。上代は気づいてないみたいだけ
ど」

これには言葉を詰まらせた。凶星。確かに刃太をよく見ているのは、自覚していた。ちょうどそれについて悩んでいた所でもある。

——私は刃太くんのが好きなのかな？

改めて考えてみると恥ずかしい気持ちになつて頭に血が上り出す。でも、何か違うような気がする。

そついうのではなく、何か引き付けられている感じ。例えば自分と似ているものだったりに。

刃太と自分は似ているだろうか、と考えてもあまりそうではない気がする。衣服や持ち物全般にもこれといった共通点はない。

なら、なんだろう。

敢えて言うなら、”同族”。

”同族”だけなら、”この学校”には結構な人数がいる。その”同族”だけで上げる入学式と言つのもあるくらいだ。しかし、その場に刃太はいなかったように思う。

なら、いったいなにが？

もしかしたら本当に好意を持っているのかもしれない。

「で、どうなの？」

「……うーん、何か違う気がする。確かに刃太くんはよく見てるけど、好き、とかは分からない」

数秒の間多恵がひかりの目を見て、無理やり隠しているわけでないのを読み取ったのか、そっかあと溜息に呟いた。

「ひかりにも男っ気が出来たのかと思ったのになあ」

「男っ気って……」

「だってそうじゃない。ひかり美人なのに全然彼氏作るうとしないし。告白とかされてるでしょ？」

「こ、告白だなんて……確かにされたことはあるけど」

「ほーら、あるんじゃない！」

あたしにはまったく来ないのに、と臍を曲げて総菜パンに被りつく。一気にパンの面積がなくなってしまった。

「もう、なんでオーケーしないわけ？」

「その、何というか、作ろうって思えなくて。告白とか、嬉しいんだけど」

抑え目な声のひかりに、多恵がまったく呆れた様子で両手を軽く上げて肩を落とした。

「……まあ、ひかりと多くいられるし、いいか。ひかりならその気になれば、彼氏だってすぐ出来るだろうから」

「もう、多恵ちゃんったら」

ひかりは不服気に、けれど楽しそうに笑いながらまた昼食を口に運んでいった。

とある一室。

そこは床やデスクなどが黒を基調としてしており、光があっても暗いイメージがあった。

飾り気も少なく、簡素。デスクワークの為に必要な物一式がひとり分置いてある。サラリーマンが使っているようなものとは違う、広めで少々高価そうなデスク。その上に書類の束が積まれていた。部屋の隅には一応観葉植物がひとつ置かれている以外、もう特筆すべき点はなかった。

必要以上のものをおかず最低限、必要あるものはデスクから総て手の届く位置にある。とても洗練されていた。

その一室にふたりの人間が存在する。

ひとりには、キャスターが付いた椅子に腰掛け男性は両肘をデスクに付けて手を合わせて組む。

もうひとりには、二十代半ばに差し掛かるかどうか程の青年。壁に腰をかけて腕を組み、目を物騒に光らせてデスクの男を見ていた。たったそれだけのことで、青年がまともな生き方をしていないと分かった。

ここは絶滅社と言う傭兵斡旋企業。青年はその傭兵のひとりだった。デスクにいるのはその上司である。

——傭兵斡旋企業と言っても、派遣する人間も場所も埒外なものだが。

「……で、今日はなんの依頼だ？」

無愛想に青年が尋ねた。明らかに上司へとるべき態度ではないが、肝心の男が気にした様子はない。一々こんなことで怒っているのは器

量が知れると言うものだ。

それに任務がこなせる有能な人間ならば、無礼を不問に伏すくらいやぶさかではない。

「私立輝明学園は……知っているか？」

低い声で告げられたものは、この場の状況にそぐわない日常的なもの。

だが、それに場の空気が和らぐことはない。

青年は数秒の間をあけて首肯した。

「ああ、知っている。色々と有名だからな。……確か秋葉原の分校には、昔あの男が在籍していたな。で、それがどうした？」

「なら、話が早い。任務はその秋葉原分校からだ。校内に封印された魔剣を”^{エミュレーター}侵魔”から護り抜け。もしくは狙う対象を殲滅しろ」

「封印された、魔剣？」

なんでまたそんなものが、と思ったがあそこならありそうだなとすぐ納得した。前にも輝明学園に封じられたものを解放しようとかの有名な魔王”が現れたと聞いたこともある。

「そうだ。最近あの学園周辺で紫稻妻^{しでん}と俗称されるエミュレーターが頻繁に確認されている。それでどうやら、学園内の魔剣の存在に気付いたらしく、内包されたプラーナを奪おうとしている」

「待て。なら何故こちらに任務が来る。エミュレーター一体なら、輝明学園側でなんとかなるはずだ」

「それがそうもいかんだ」

束になった書類を手に取り、ページをめくる。

「紫稻妻は強力なエミュレイターでな。その力は低級な”魔王”にまで匹敵する。並の”ウィザード”ではまるっきり話にならん」

「……なるほど、それは依頼が来るはずだ」

小物の魔王レベルと言えども、油断出来る相手ではない。ウィザードと魔王では力の基準からして違うのだ。同じ初心者ウィザードと低級魔王を比べたら、そこには愕然としたくなるほどの差がある。月とすっぽんとはまさにこのこと。

背景は理解できた。しかし、まだ釈然としないものが青年にはあった。

「……だが、何故低級の魔王レベルもあるエミュレイターが何故俗称なんだ？ 自分で名乗らないのか？」

「名乗らない、な。いや、もしかしたら個体名がないのかもしれない」

「なに？」

「このエミュレイターはアモルフアスだ」

アモルフアス。

エミュレイターは、アモルフアスとシェイプドライブの二種類に分類される。

アモルフアスは人間や動物の精神に寄生し、意のままに操ること

ができるタイプのエミュレーターだ。

精神に寄生された人間は物理を無視した運動能力を有し、厄介な存在となる。

強い衝撃を宿主に与えればエミュレーターを引き剥がすことが出来るが、時間が経過するにつれて不可能になってしまい、最悪寄生元を殺すことになってしまう。

「……定形すら保てないエミュレーターが、魔王レベルの力を持っているのか？」

エミュレーターと言うのは、簡単に説明すれば世界の侵略者。この地球とは違う世界——裏界りかいと呼ばれている——からこちら側に侵入してくる。

その際、力を持つものは形を持って侵入してくる。が、アモルフアスと言うのはその力さえない脆弱なエミュレーターのことだ。

頻繁に侵入してはくるが、そこまで急激な力を蓄えていることはない。何かに寄生しなければ、こちらで生存出来ない弱い存在。それがアモルフアス。

第一、魔王レベルの力があれば実体を持って侵入してくるものではないか。その場合は、シェイプドライブに分類されることになるが。

「幾度と人間のプラナを吸収することで成長したのかもしれない。だが完全に寄生して、肉体から離れられない。或いは使い勝手がよくて離れない。そんなところだろう」

では、と上司は青年に向き直った。指を組み、ふたつの眼球で青年を見る。状況説明が終わった今、何を言おうとしているのかは目が雄弁に物語っていた。

「——行ってくれるな、トレイター」

「了解、その任務引き受けた」

青年、トレイターは確かに任務を受託した。

向かうは、私立輝明学園秋葉原分校。

*

そこには剣があつた。

素人が見ても恐れおののき畏怖を抱くだろう、目に見えない力を持っていた。覇気と言つても良い。

刀身は女性の裸身のように美しく、かつ精練された兵士のように力強い。この刃は鉄をも断ち、岩さえ砕くであろう言われれば、万人が頷いてしまう。

そのバスタードソードは、暗室に安置されていた。

これほどの業物が誰の目にも付かず、ただ忍んでいる。

魔剣と呼ばれるそれは、待っていた。

我を扱い、我を振るい、我を使いこなす。そんな担い手を。我と共に闘い、歩む半身とも言える存在になつてくれる主を。

たった一振りで待っていた。

唐突に、永らく開かれることがなかった扉が開かれた。

打ちつばなしのコンクリートで囲まれた部屋に足音を反響させて、誰かがそこに到達した。

魔剣の前に立つそれは、女だった。

バイオレットの膝裏まで届く流るる水のような長髪。顔は暗がりで窺えないが、素晴らしい造形であるのは分かった。

身体は裸身と言ってもいい。豊満な胸にバランスのとれた手足の肉付き。グラビアアイドルでも驚愕するような黄金比。

その艶めかしい肉体の胸元や下部は、辛うじてキチン質によって隠されていた。

女性は部屋の中を見回す。

至る所の壁や床には無数の不可思議な紋様が刻まれていた。魔剣を封印し、縛り付ける刻印。

「……消、えろ」

だがそれは、外部からの干渉には脆かった。いや、外的要因にもある程度の防御能力はあっただろう。しかし、”魔王レベル”の力は想定されていなかった。

女性の髪が縦横無尽に伸びた。

天井、壁、床など部屋中に突き刺さり、縦に、横に、斜めに髪が駆けた。

たった一瞬で、部屋中の内装に猛獣が暴れまわったのかと思うほどの数え切れない斬線が刻まれる。

各自を分断された陣は完全に効力を失う。

エミュレイター——紫稻妻は魔剣を手にとった。

*

「ん……あれ？」

上代刃太は自室で首を傾げていた。

陽も落ちた時間。

学校から帰宅して家族との夕食を済ませた刃太は、鞆の中を何度も探す。

なかった。

明日が提出期限の宿題が鞆の中になかった。

一応部屋の中も組まなく探してみたが、見つかる気配はない。となると、学校に忘れて来たと言うことになる。

時計に目をやる。もう遅い。学校だって閉まっているだろう。それに最近は何かと物騒である。あまり外に出たくはない。でも、

「あの先生、宿題忘れると面倒なんだよなあ」

宿題を出した教師を思い出す。あの教師は授業も分かり易く、丁寧な性格なのだが、いかんせん提出物の扱いは厳しい。忘れたら色々と厄介だ。

なら、今から取りに行くべきだろうか。

刃太は夕食前に気付けば良かったのにと肩を落とした。

しかも間の悪いことに、シャーペンの芯も切れかけてしまっている。ついでに買いに行かなくてはならない。

「行かなきゃ、駄目だよなあ……」

陰鬱に溜息を吐いた。せめて物騒な事件に遭遇しないように祈るしかないだろう。まあ、早々危険なことに巻き込まれることはないと思っではいるが、やっぱり少し怖かった。

財布をポケットに入れて部屋を出る。

自室から階下に行くと、リビングを覗いた。一応行き先は告げておこう。

「ちょっと買い物の言ってくるーっ」

「気をつけて行ってらっしゃいよー」

返事が返ってきたが、それは母親だけのものだった。

「あれ、姉ちゃんは？」

「さあ？ 部屋に行つたんじゃないの」

それはそうだ。

でもこの時間は姉が好きな番組がやってるはずなんだけど、と刃太は小首を傾げた。

何か特別番組でもやっているのかもしれない。

さほど気にせず、刃太は靴を履き、玄関を開けて外に出ていった。

*

花川ひかりがそれを感じたのは、単なる偶然だった。

放課後、多恵に誘われて街で遊びに勤しみ、親に連絡は入れたものの少々遅くなってしまい、心配してるかなと慌てて帰宅しようとしていた。

そんな時、

「この力は……？」

何かが解き放たれ、力を漏らす感じがした。

その発信源は思いの外、近くにあった。

輝明学園。

幸いと言っているのか、現在地から輝明学園まで対した距離は開いていない。

数瞬だけ逡巡するが、答えは決まっているように思えた。

「行ってみますか……」

スカートの裾を翻して、ひかりは上品な見た目からは考えられない機敏さで闇夜の中を走り出した。

ひかりの”ウィザード”としての感覚が、警鐘を鳴らしていた。危険なことが起ころうとしていると。

輝明学園の正門はすぐに見えてきた。門の左右には、阿吽の仁王像が厳格な顔をして立っている。見慣れているとは言え、夜に見ると怖いものがあつた。

正門を潜ると現れる大鳥居を抜ける。神道や密教など伝統的なものを教えていた学園だけあつて和の風情を醸し出す品々も、今ではただ不気味なだけだ。不思議な頼もしさも感じたけれど。

鍵が破壊されている玄関から校内に入り、土足で入ってごめんなさいと清掃するであろう人に頭を下げて、感じた力の発生源に向かって行く。それへと近づくに連れ、さらにひかりは奇妙な感覚を覚えた。

「移動している？」

こんな力を持って移動している。解き放たれたような力の流失。不穏な気配。ここから導き出される答えはひとつ。

「エミュレーター……っ！」

ひかりは絞り出すようにその名を口にして、

窓から見える外の風景が、変化した。

世界を紅が照らした。月明かりでも電灯でもなく、紅が。

否、確かに月明かりではある。それが違う色に置き換わり、地球

から見える月とは変わってしまったただけ。

ひかりは頭上を見上げ、目を見開いた。

「紅い月……月匣が張られたっ？」

月匣げっこうとは、一種の結界である。

世界からその空間を切り離し、人間を閉じ込めてしまう。ただし一般人はこの空間には取り込まれず、月衣カクヤと言う特殊な個人結界を纏った——つまりウィザード、エミュレーターと言う非現実の産物のみを取り込むもの。もし一般人の前にウィザードがいて月匣が張られた場合、取り込まれない普通の人間はウィザードが突然姿を消したように見えるだろう。

そしてこの中では、あらゆる事象が不思議ではなくなる。

だが何故いきなり月匣を展開したのか。ひかりが接近したからか？違う。どうせ月匣を張るなら、もう少し近付いてからでもいいし、逃げ出すと言う手もある。先程ひかりが感じた感覚は、封印を紐解くようだった。このエミュレーターは何かの封印を解放したのだろう。なら、何故抗戦の構えをとるのか。大事な物がどうかは分からないが、普通は逃げ出しはしないか。

それをしない、或いは出来ないと言うことは、無闇に背を向けられない状況。

——誰かが戦っている。

それなら、急いで加勢しなければならない。

ひかりは宙空に手を差し入れた。見えない物に遮られるかのように、手首から先が消えた。中で何かを掴み、引き抜く。

ひかりの手には、機械仕掛けの杖が握られていた。

個人結界、月衣カクヤは不可視の空間にウィザードの所有物をしまえる便利な機能を持っている。そこから現れたのは、魔力増強、防護機構を組み込まれた科学と”魔法”の融合品した筈、ウィザーズワンド。

それを宙空に”浮かせる”と腰をかけた。 ひかりの足が地面から
浮き上がり空中で静止。

直後、ひかりを乗せた箒が校内を駆けた。

1：異法の者共（後書き）

どうも刹那です。

ここでは初のファンフィクション作品なので緊張してます。おかげで月衣の説明とか中途半端に行ったりして、もうグダグダ感が最初からあります（爆）失態。

今作は原作を知らない人間にも読める構成にしております。まあ、元はTRPGですから、原作キャラは出ていませんがwでも原作小ネタは所々に。

細かい説明は次回に回します。この作品はもうほとんど完成しているので、すぐ終わりますので。

……その被害を受けたのは俺の連載小説だったりしますw

それでは。

2：紫の稲妻

「待てッ！……くっ、一足遅かったか。だが、もう逃がさん。そいつを返して貰おう」

トレイターはバイオレットの髪を持つ瘦躯の女性の前に立ちふさがっていた。

彼は任務で輝明学園に来て早々、この女性の容姿を持ったエミューレイター、紫稲妻と接触していた。が、途中でまんまと出し抜かれた。月匣も張らずに攻撃を仕掛けてきたのだ。

無数に打ち出された髪を月衣が取り出した愛用の機械箒、フォーリンエンパイアで斬り落とした時には、校内に侵入されていた。急いで追ったが、相手は稲妻と呼称されるエミューレイター。その速度は尋常なものではなかった。人の摂理を超越した力を持ち、”さらに越えた”トレイターでさえ追いつくのがやっとのほど。

ようやく紫稲妻に接触出来た頃には、奴の手に魔剣が握られていた。

それを奪い返そうと愛箒フォーリンエンパイアを構えた時、紫稲妻が月匣を展開したのだ。この状況では月匣から抜け出すには、創り出したものが死ぬ、自らの意志で解かない限りなくなることはない。

「……………」

自分の領域である月匣が展開した紫稲妻は、無言で手を翳す。すると地面が黒ずみ、中から異形の化け物が姿を表した。

体長一メートルほどの紫稲妻とは対極の位置にある醜い容姿を持った——ゴブリン。闇から出てきた数はおよそ六体。

これでトレイターを斃す気か。

「舐めるなよッ」

剣として使ったフォールンエンパイアを水平にして先を敵に向ける。黒いオーラのようなものを纏った機械仕掛けの筈、これに備え付けられたトリガーを引き絞った。

——ドンッ。

前面に魔法陣のようなものが展開、爆音。

ニメートルはあるフォールンエンパイアから射出された弾丸はゴブリンの一団に着弾。数体を吹き飛ばした。

月衣から取り出した弾丸を再装填し、目を細める。

「さつきは到着早々不意を突かれたが、次はない。覚悟しろ」

白兵、射撃戦仕様の試作型筈フォールンエンパイア。

一般的にこの手の戦闘用筈は、白兵戦用のウィッチブレードか射撃戦用のガンナースブルームのふたつに別れている。フォールンエンパイアはこのふたつの特性を持った、試作型の筈だ。

世界にまだ三三機しかなく、傭兵として名の知れていて、なおかつ”貴重なサンプルデータとなる能力”を持ったトレイターに支給されていた。

ゴ布林がその威力に怯み、僅かに後退した。先手で相手の戦意を多少なりとも削げれば、戦闘は有利に進行する。

これをチャンスと見て、トレイターは一気に駆け出した。

地を疾走しトレイターはゴ布林に肉薄する。ゴ布林は反応してこちらを迎撃しようとするが、怯んでいたために反応が皆遅れた。ゴブリンの攻撃が到達する前に、剣と化したフォールンエンパイアがその場のエミュレイターを薙ぎ払った。

廊下では壁が邪魔になり振り切れなさそうに見えたが、トレイターとフォールンエンパイアの力は現実的な物には捕らわれない。壁に刃が入ってもスピードが劣らない剣は、その切れ味と質量を持つてすべてのゴブリンを両断した。

死したエミューレイターは風に吹かれて消え去る。後の名残のように紅い結晶が数個廊下に転がっていた。

紫稲妻はその場から動いていない。後一步踏み込めば、ブレードの間合いだ。

もらった――そう足を踏み出そうとして、悪寒を感じた。死線にくぐり抜けたウィザードの勘と言うやつだろう。トレイターはリノリウムの床を蹴って背後に飛び退いた。

それとほぼ同時、紫稲妻の後方から新たに二体のゴブリンが現れた。手に持った鈍器を振りかざし、トレイターに迫る。

「く……っ」

判断は正しかった。フォールンエンパイアで二体の攻撃を受け止めようとした時、トレイター側の廊下の端から少女の声が聞こえた。

「――フォース、ブレイドッ！」

掛け声と共に何かが放たれた。

それは音速を超えて迫ると、ゴブリンに接触した。闇を押し固めて刃の形へ凝固させたような”魔法”は、片方のゴブリンを切り裂いた。もう片方のゴブリンには当たらなかったが、風圧などのとばっちりを受けたのか、一、二メートル弾き飛ばされる。

トレイターが紫稲妻から距離をとってから後ろを振り返ると、機械仕掛けの杖のような機械箒に乗って飛ぶ少女の姿があった。現実的な光景からはかけ離れているものの、トレイターに動揺はない。

”空を飛ぶくらいウィザードなら造作もない”ことだから。

金髪を揺らす少女はトレイターの真横でブレーキを掛けると、廊下に飛び降りて乗り物にしていた筈を構えた。

「誰だか分かりませんが、エミュレーターと敵対するなら支援します」

「邪魔だ、と言いたい所だが助かった。……ここの生徒か。もう少し下がっている。生徒を傷つけるわけにはいけないからな」

フォールンエンパイアを腰元で構え、トレイターは少女、花川ひかりをもう少し下がらせた。依頼主の生徒を傷つけるなんて、任務を受けたものとしてさせるわけにはいかない。

「やはり、紫稲妻……」

ひかりが残ったゴブリンを一体使役する紫稲妻を見て、小さくつぶやいた。

「知っているのか？」

「ええ、この界限で有名ですから。私もやりあったことがあります。……とても、強かった。私が月匣を張っていなければ……」

「……そうだろうな」

何せ低級ながら魔王クラスの力量の持ち主だ。並のウィザードが単独で勝てるわけがない。むしろ今少女がこうしていられたことに敬意を表したい。

「行くぞ。援護は、任せた」

「はい」

トレイターがまず先制に弾丸を打ち込んで白兵戦を仕掛けるために、トリガーに指をかけた。

引き金を引く、ことはできなかった。

「——っ、馬鹿なッ」

紫稲妻の背後の廊下にいる人間を見つけてしまったから。

*

輝明学園の目印とも言える仁王像と大鳥居を抜けると、上代刃太は奇妙な違和感を感じた。具体的に何が、と言うのはわからないが、何か懐かしい感じもする。

——ああ、あの夢の中と同じだ。

今朝方に見た夢を唐突に思い出した。あれで感じたものとこれは非常に酷似している。

なんだろう？ そう疑問に思ったが、理由も分からないので答えが導き出せるわけもない。小骨が喉につつかえているような気持ち悪さを覚えながら、自分の教室に宿題を探しに行くことにした。それがここに来た目的なのだから。

刃太が玄関に手を掛けると、すんなり扉は開いた。

「あれ……？」

あまりの簡単さに拍子抜けしてしまう。普通、夜が更けたら鍵を掛けるものだと思うが。今も念の為に触ってみただけだった。

本当は裏口やどこか開いている窓でも探して中に入ろうと思って

いたが、開いているのなら好都合でもある。釈然としないものを感じながらも、校内に足を踏み入れた。

夜ともなり中は暗く、外から差し込む月光だけが頼りだった。

げた箱で上履きに履き替えて、廊下を小走りに行く。

階段を駆け上がり、しばらくして教室にたどり着く。

刃太が自分の机を探ると簡単に宿題のプリントは見つかった。プリントを折り畳んでポケットに入れると、ここでの用事は終わる。

無事滞りなく宿題を見つけ出すことが出来たので、安堵に胸を撫で下ろして教室を出て行こうとした。

その時、急に違和感が膨れ上がった。

紅い。

教室内が血に染まったように紅い。ここだけではない。外の風景

――それを照らす光自体が紅かった。

慌てて窓に走り寄って空を見上げた。

そこには、紅い満月が光輝いていた。

「なんだ、あれ……？」

さっきまでは普通の月だったはずなのに、鮮血で染め上げられたような色になっているのだろう。いやそれ以前に、今日は満月だったろうか？

得体の知れない不安感が這い上がってくる。心臓が驚掴みにされたようだった。なんだ、なにが起こった。

――ドンッ。

窓や刃太の鼓膜が、榴弾砲を発射したような轟音に揺らされた。

銃声は、意外に近い。すぐ真下辺りだ。

こんな状況下で、刃太の中に好奇心が生まれた。夜中の学校で突然の銃声。天空に昇る紅い月。変な違和感。

——行ってみよう。

結局、押される好奇心には勝てなかった。蜜に誘われる蝶のように、刃太は教室から飛び出した。

銃声を境に、剣戟音や奇声が聞こえて来て場所が分からないと言
うことはなかった。

そして、発生源に到達する。

恐る恐る顔を覗かせようとして、見慣れた声を耳にした。それは
少女の綺麗なソプラノ。

なんだ、と急に気分が弛緩した。この声は花川ひかりのものだ。
ならこれは何らかの仕掛けか。夏間近でもあるし、一足先に肝試し
でも始めたのだろう。

勝手に納得して、刃太は無防備に身体を晒してしまった。
身体が意味のわからなさに硬直する。

ひかりが機械で出来た棒状の物を手に持ち、隣にいる知らない男
は二メートルはある砲芯だか大剣だか分からない物体を水平に構え
ていた。

「何故イノセントがここに……！」

青年が驚愕を絞り出した。

それを耳に入れながら、刃太はもうふたつの姿を目に入れた。こ
ちらに背を向けて諸刃の剣を持つ女性と、背の低い異形を見た。

ふ——っ、女性が刃太に振り返る。ひかりとは違う、妖艶な美し
さを持つ女性に見つめられ、刃太は息を詰まらせた。

誰、だ？

金縛りにあってしまったのか、女性、紫稲妻の冷たい無機質な瞳
から逃れられない。

「いけないッ、刃太くん逃げて――」

「え？」

気づいた時、小さな異形が刃太に肉薄していた。

「キイイイイイッ！」

異形、ゴブリンが腕を振り上げた。刃太の背中が粟立つ。

形ある死がすぐ目前まで迫っていた。

ヤバイ、そう認識した時には既にゴブリンの腕から逃れることは出来ず、

――ミツケタ。

紫稲妻の握った魔剣がドクンと脈動した。意志を持つように鼓動し、淡い光を放つ。

紫稲妻の手から魔剣が抜け出した。一本の線を描き、刃太に向けて飛翔。

途中閃光が放たれ、魔剣の姿が変貌していく。

魔剣が刃太とゴブリンの間に割り込むまでは、まさに刹那。

そして、振り下ろされたゴブリンの腕を”魔剣だった者”が受け止めた。

「……え？」

目を開いて、刃太は眼前の光景を直視する。
目の前には紫稲妻とは違う”女性”がいた。

ガラス細工のごとく繊細、それでいて精練された力強い美しさを兼ね備えている。

銀系のような髪を靡かせて、西洋衣装を羽織ったその女性。本来細い腕と五指を備えるはずの右腕は、右肘から先が銀色に紅き光を反射する刃になっていた。

刀身でゴブリンの凶手を受け止めた女性は、右腕を無造作に払った。

ゴブリンが体制を崩し、がら空きになった胸部に容赦なく右腕を付き込み、切り裂く。

耳をつんざく断末魔を上げてゴブリンは消滅した。

皆、啞然と女性を見ていた。

魔剣だった女性が刃太に振り返り、優雅にかしづく。

「あなたは、わたしに相応しい。あなたを我が主とさせていただきます
たい」

女性は、凜と張った弦^{こえ}を鳴らす。

「わたしの名はドウリンダナ。リンと及びください。わたしはあなたが剣にして戦の刃。立ちふさがりし敵は悉く我が刃を持って粉碎しましょう。——受け取りください」

ドウリンダナと名乗った女性の身体は眩く発光した。身体の面積は徐々に縮小され長物、剣となる。

一目で業物と分かるそれは、次々と未知の事態に遭遇して混乱する刃太の手に収まった。

鉄の塊のはずだが、刃太にはやけに軽く感じた。まるで自分の身体の一部であるかのように。腕が延長された気分だった。

「魔剣が主を選んだ……と、言うことか？」

「刃太くんが、ウィザードに？」

ふたりが混乱するなか、紫稲妻だけは平然としていた。単純に感情を表に出せないのかもしれない。

ただ紫稲妻は刃太が魔剣を持っているのを確認すると、廊下を蹴って刃太に向けて疾駆した。

「しまったッ！」

混乱で気の分散したこの瞬間は致命的な隙だった。トレイターが照準を紫稲妻に合わせるが、このまま撃つては刃太に当たってしまう。

名が如く紫の稲妻を思わせる速度で接近、五指を硬質化させ刃と成し、刃太の喉笛目掛けて無表情に突き出した。

「うわぁッ」

明確な狙いで放たれた貫手は、跳ね上がった魔剣によって防がれる。刃と五指が鈍い音を立てた。

『マスター、聞こえますか？』

「は、あっ！？」

突然脳内に響くドウリンダナの美声に、刃太はたまげて悲鳴を上げてしまう。

『聞こえているようですね。これからわたしの言うことをよく聞いてください』

「ちょ、ちよつと待って！」

『残念ながら、待てません。まずは目の前の障害を退けてください。方法はわたしが教えます』

刃太の異論を問答無用で排除、一方的に言葉を投げかけてくる。しかしそれは確かに正論だった。こんな時に議論を交わしている暇は存在しない。

『剣、わたしに精神を集中させてください。掌に意識を集中させるようにです。そうすれば、わたしに記録された剣技をあなたは断片的に行えるようになります。それでなんとか対応出来るはずです』

そんなことを言っている間に、紫稻妻の一房の髪が凝固。風切り音をひき槍の如く刃太へと突き出された。

とつさに意識を掌に集中。すると刃太の脳内に知らないはずの剣技が流れ込んできた。コンピューターに例えるなら、ソフトウェアを使いハードに情報をインストールするように。

新たに刻まれた知識から、身体が必要な動きを選択する。

剣を捻って紫稻妻の手を弾き、後ろに飛び退く。槍となった髪が眉間を皮一枚突き刺した。

「くつ、こんのオツ！」

やけくそに怒声を上げ、身を屈めて紫稻妻に向け突っ込む。

右足に力を込めて魔剣ドゥリンダナを振り抜いた。

胸を薙ぐ一撃を、紫稻妻は長髪を硬質化させて防いだ。髪が鋼より強力な盾となり、刃金と打ち合い金属質な音を立てる。

その隙に残像が網膜で捉えられないほどの速度で紫稻妻が膝を跳

ね上げた。

「うあつ！」

状態からしても人間なら反応出来なさそうな膝蹴りに、刃太は魔剣の石突を振り下ろし迎撃した。ふたつの個体がぶつかり合い、鈍い音が耳を打つ。

——トンと刃太の肩に体重が乗った。

紫稻妻が刃太の肩に手を置き、軽業師のように宙へと身体を浮かせていた。

紫稻妻が刃太の背後に着地。背中をとられたことに冷や汗が吹き出し、

「伏せろ！」

「伏せて！」

ふたつの声に、刃太は膝を折って身を伏せた。
直後、

「射ッ」

「ニードルシュートッ」

トレイターによる簞、フォールンパイアによる遠距離射撃。
ひかりの簞、ウィザーズワンドから打ち出される射撃魔法。
このふたつが刃太の頭上を抜け、紫稻妻に直撃した。

「……………ッ!!」

弾丸と魔法を受けた紫稲妻は、数メートルの距離を吹き飛ばされた。

リノリウムの床を二転三転と転がり、地面に斃れ伏す。

「やりましたか……………」

ひかりの言葉に新たな弾丸を装填したトレイターが首を振った。

「いや……………まだまだ」

それを合図に紫稲妻が起き上がった。幽鬼のように揺らめきながら立ち上がった紫稲妻は、まだ致命打を受けていなかった。

だが、弾丸と魔法を受けた部位は黒ずみ、足下がふらついていることから効いていないわけではない。

身構える三人を一瞥して、紫稲妻は踵を返して駆け出した。

「あ、待ちなさい……………」

「待て。行かせろ。このまま戦ってはこちらも危ない」

トレイターが力を抜くと同時、紫稲妻による月匣が解除された。空に映る紅い月が消滅し、通常空間に舞い戻る。

違和感もなくなり元に戻った校内と手にある魔剣を見て、刃太が疲れと共に吐き出した。

「……………いつたい、なんなんだ？」

ヘドロのような脱力感だけが、強く身体に纏わりついていた。

2：紫の稲妻（後書き）

すぐさま二話を投稿。

前回はTRPGで言う所のオープニングミドルだとしたら、今回はクライマックスフェイズ終了と言った所でしょうか。エンディングフェイズは次回。

このあとがきでは原作のナイトウィザード2ndについて簡単に解説。

原作のナイトウィザード2ndはTRPGです。TRPGとはまあ3、4人でやるMMORPGラグナロクオンラインとかみたいなものでしょうか。スゴ録+RPGですね。

GMと言うゲーム進行役、PLと言うゲームプレイヤー数人で行います。

PLは自作キャラクターを持ち入り、GMの用意したシナリオでゲームを楽しみます。

詳しくは調べてみてください。

TRPGはマイナージャンルです。というか俺も最近某氏に教えられ（もとい洗脳され）て知りましたw

ナイトウィザード2ndの雰囲気を把握するには、リプレイと言う文庫本を読めばわかります。2ndのはまだ出てないので、前作のものをどうぞ。

- - -

それにしてもこの作品、読んで思ったけどキャラクターとか展開がFateっぽいです（爆）

3：反逆者

「つまる所、私とこの人——それに刃太くんは魔法使いなんです」

通常空間に帰還した夜の輝明学園大鳥居の前で刃太が言われたものは、おおよそこういうものだった。

隣に立つトレイターに掌を向けながら——指をささないのは彼女らしい——の台詞に、刃太は頭上にクエッションマークを浮かべた。

「……はい？ ま、魔法使い？」

「はい。正しくはウィザードですが……って、刃太くん聞いてますか？」

花川ひかりが可愛らしく頭を傾げた。

聞いているかと問われれば、刃太はちゃんとひかりの話を耳に入れていた。ただそれが必ずしも理解に直結するわけではない。

「ウィザードって、ゲームとかアニメに出てくる……あれ？」

「はい、あれです」

ステッキを振って魔法がばーんと出る。身振りを加えて肯定する様子は、端から見れば和むものがあつた。眉目秀麗なひかりの子供っぽい動作を意外に思いながらも、ちょっとした親近感を抱いた。完璧な見た目だからか、刃太は今まで取っ付きにくさを感じていたのだ。

それが少し和らいだ気がするも、現状の意味不明さはまったく解決してはいない。

「それですね、私達ウィザードはエミュレーターと言う異界の侵入者……さつき出会ったモノ達と日夜戦いを繰り広げているのです。彼らは裏界と呼ばれている場所から現れている異形のモノ達で人間のプラーナは彼らにとって極上のご馳走で、それを喰らうために人を襲っています。彼らが現れる時は必ず紅い月が昇りますが、これは実際の月ではありません。紅い月はこの世界とは違う別世界の代物で、これが昇る時は月匣と言う結界が張られている時でして……」

「ス、ストップストップ！ そんないつぺんに言われてもわからないよ……」

頭が本格的にこんがらがってきた。異世界からやってきたという異形の化け物に、よくわからない力。紅い月に結界。わけがわからない。まるつきり未知の領域だ。イマイチ現実味も感じられず、ひかりの言葉をすんなり受け入れることが出来なかった。

「困りました……。私は他の方にウィザードの常識を教えたことがあります」

眉尻を下げてひかりが伏し目がちに洩らした。

こんな娘に困った顔をさせるのは男として非常に申し訳ないのだが、それでもわからないものはわからなかった。

「なら、代わりに俺が説明してやろう」

と、トレイターがフォローにまわった。

漆黒の外套に身を包んだ青年は、刃太が感じたことのない空気を発している。殺伐としているゆうか、人間身を感じづらい、でもなく——自分とは違う場所を渡り歩いていた戦士の貫禄とでも言うの

だろう。

「ウィザードとは、普通人^{イノセント}とは違う力、魔法を操れるようになった人類のことだ。魔法はお前の想像しているものでおおよそ合っているだろう。あの化け物はエミュレイター、と呼称されている。奴らは別世界、と言っても分かんないだろうが、そのままことは違う世界とでも認識しておけ。それで充分だ。その別世界は裏界と呼ばれており、化け物は人間などに宿るプラナー——魂の結晶か精神力とでも思えばいい。それを奪おうとこちら側に入ってくる化け物を俺達は狩っている。……背景はこんなところか。ここまではいいか？」

刃太は頷く。ひかりと言ってる内容に大差はないが、なんとなく理解は出来てきた。時間が経って頭も少しは落ち着きを取り戻したようだ。

「よし、ならば次は簡単に必要な用語を教えておこう。紅い月を見たな？ あれは月匣という結界が張られた時に発生する目印だ。こいつは大抵、エミュレイターが展開しているから紅い月が浮かび上がれば近くに奴らがいて、なおかつ自分が月匣に巻き込まれてしまった状況だと考える。この中ではイノセントは行動出来ず、月衣を持ったものだけが活動できる」

それと月衣^{カグヤ}のことだが、とトレイターは中空に手を翳して、どこからともなく巨大な物体を取り出した。

サイズは二メートルを超えた、細長い筒状のもの。巨大な銃身に見えなくもない。

当然こんなものを隠すスペースはなかった。呼んで字のごとく忽然と現れた。

「これはウィザードに覚醒した者なら持っている、個人結界と言うものだ。この地球は、世界結界と呼ばれる巨大な結界に護られている。これは”世界には魔法など存在しない”、”科学で解明出来ないことはない””と言ういわば常識の壁だな。この中では人間が信じる物理法則から反した行動をとることはできない。だが、月衣があれば話は違う。この結界を個人で纏うことにより、ウィザードは世界結界から解き放たれ、即ち物理法則に支配されることはなくなる。月衣があるからウィザードは魔法が使用できるし、イノセントの物理的な攻撃もまったく利かなくなる。宇宙でも生身で活動出来るし、中には人工衛星が落下してきても無傷な奴もいるくらいだ」

エミューレイターもこれを纏っているから、地球上で活動できると備考した。

「さらに月衣は自分の所有物を閉まっておくことができる。武器なんかは普段堂々も持ち歩けないからな。これに収納している」

そう言ってトレイターは手に持った長物を月衣に収めた。現れた時と同様、溶けるように消え去る。まるで初めからすべて幻影だったかのような気分だった。

月衣についても、断片的にながら把握した。一般人からの科学系統などの物理的な攻撃では一切傷を負わず、通常の方法で死ぬことはないらしいと言うこと。物理法則を超越して収納機能まで完備の便利なモノ。

そんなたいそうなモノを作り出してる自覚も纏っている実感もないが、言われる限りはそうなのだろう。

ウィザードについては、なんとか理解出来た。それでもまだ分からないことは山ほどあるが、その筆頭のうち一つを尋ねてみる。

「あの……さつきから出たり消えたりしてる銃みたいのはなんです

か？」

「ああ、これか。これはな、」

「箒です」

ひかりがようやく何とかかなりそうだと、笑顔で引き継いだ。

中空に手を伸ばすと、彼女の手には機械的な杖状の物体が顕現する。

「……杖？」

「箒ですっ」

「箒って、あの掃除をする？」

「魔女の箒なんです」

「いや、魔女の箒も掃除用と同じだよな？　少なくとも見た目は」

どう見てもひかりが持っているのは、杖にしか見えない。しかも機械の杖だ。こんなの杖としても見たことがない。ましてや箒でだなんてあるわけはなかった。

トレイターのとも形は違うし、いったいなんなのか。杖を機械構成にしても用途はあまり思い付かないが。

結局また説明を詰まらせたひかりの横で、再度トレイターが長物を取り出した。重量のありそうな長物をトレイターは軽々と持っていた。

「昔はその箒を使っていたらしいが——今はこれがウィザードの間では”箒”と呼ばれている。無論掃除するための物ではない。ウィ

ガードを支援する兵器だ。例えば俺のこれは、フォールンエンパイアと呼ばれている白兵戦兼射撃戦用の箒。そいつのはウィザースワンドと言う魔法の増幅や補助を行う杖状の箒、というわけだな」

魔法使いが使うから”箒”と、そういうわけなのだろう。隠語に近いものと思っておこう。

箒の謎は解けた。これで粗方不明な点はなくなった。でも、まだ分からないことがある。

それは、

「……で、この人はいったい何なんでしょうか？」

刃太は隣に突っ立っている女性を示した。

「わたしですか？」

女性、リンことドウリンダナが目を瞬かせる。

「わたしは貴方の剣ですが」

「いや、それが分からないんだって」

平然と応える西洋衣装の女性の存在に、刃太は悩んでいた。

ウィザードと言うものの話を聞いても、剣になったり人になったりするモノのことが分かる記述はない。ちなみに今は両手共に人間のそれになっている。どこをどう見ても剣になったりするとは思えない。

トレイターが一瞬考える素振りをしたが、もう驚いたりすることはなかった。

「それは、人化する能力を備えた魔剣なのだろう。人と化す力を持つ魔剣の話は聞いたことがあるしな。魔剣は資質がある主を選びウィザードに覚醒させると言う。つまりお前は魔剣使いと言うウィザードになったと言うことだ。……愛刀を精々可愛がってやることだな」

「そ、そんな無責任なあ……っ！」

「俺はお前に対する責任を負った覚えはないからな」

嘆く刃太に、リンは僅かに柳眉を顰めた。

「主よ、わたしの存在は邪魔だろうか？」

「邪魔、というか……」

とつさの答えに窮した。

リンは、どこからどう見ても美人に分類される顔立ちである。容姿も良く、刃太が今まで見てきた女性で間違いなく三指に入るほどに美しい。

そんな女性が不安そうな顔をすれば、刃太でなくても言葉を詰まらせてしまおう。

「強引ではありませんが、私は貴方を主と決めてしまった。もう貴方以外に私を振るうことは出来ない。私の喜びは主の剣となり敵を屠殺することです。……この矮小な剣を使ってはくれませんか？」

切実な願いに、刃太の心が揺らぐ。

ウィザードとなったからには、何かしら武器が必要でもある。し

かし生憎と刃太にはひかりや 트레이ターのような筈はない。

なら、彼女が武器となってくれるなら万事解決ではないか。そもそもこの女性のお陰でウィザードになったようだし、こんなに懇願されたのだから使わない方がおかしい。

「えっと、うん。……良いけど、さ」

「ありがとうございます、主よ」

ドウリンダナは深々と頭を下げたが、刃太は焦ってそれを上げさせた。見るからに年上の女性に頭を下げられてもしたら、普通落ち着けはしないものだ。それにこんな人格のある女性を武器と思うことが、後ろめたくもあった。

そんな二人、いや一人と一振りを不満気に見ている人間が一人。

「むう」

ひかりだった。

何故か二人の姿を見て、無性に腹が立った。理由は本人にも分からない。普段は温厚な彼女がこんなことを思うのさえ珍しい。

おかしいとは思ったけれど、ひかりの曲がったへそはなかなか戻らなかった。

「それより、皆さんちゃんと自己紹介しません？ 知らない人もいますから」

なので、刃太とドウリンダナの会話に無理やり割り込んだ。

ああそうだったな、と刃太達はそのことに気づく。今までそれどころではなかったせいかな、すっかり忘れていた。

「あつと……輝明学園秋葉原分校高等部二年の上代刃太です」

どうもと刃太が頭を下げれば、ドウリンダナとひかりが追隨する。

「人類一般には魔剣と称されています。銘はドウリンダナ。リンと及びください」

「私は刃太くんと同級生の花川ひかりです。お見知り置きを」

そうなると、最後は青年だけになった。

面倒くさそうな表情をしてから、仕方ないと言わんばかりに名乗る。

「……トレイターだ。本名は言わなくても良いだろう。絶滅社所属の傭兵だ」

「絶滅社って？」

ひかりが驚いて声を上げた。

一方、刃太はその単語が分からずに首をひねる。

「絶滅社って？」

「傭兵斡旋企業の名前です。依頼を受けてウィザードの傭兵などを派遣している……」

不信感を抱きながら見つめてくるひかりを見て、トレイターは気の抜けたように首を左右に振った。

「安心しろ。お前らの不利益になることはしないさ。……俺を雇っ

たのは輝明学園だ。あのエミュレイターから、その魔剣を護れと言われてな」

ドウリンダナを見てトレイターはどうしたものかと思案顔になる。

「しかし魔剣が主を選んだとなると……どうしたものか。これは任務失敗になるのか？ それとも護る必要はなくなったか……」

難しい線引きだった。

一人難しく唸るトレイターに、ひかりが呟いた。

「それなら……任務は続行中なのではないですか？」

「……続行中？」

はい、とひかりが金髪を揺らした。

「魔剣を護る、と言うことは狙ってくるエミュレイターを撃退することと同意です。魔剣……えー、リンさんを狙っているのはあの紫稲妻なんですよね？」

「ああ、そうだが」

「なら、リンさんが主を見つけたとしても襲い来る驚異を払拭出来たわけではありません。トレイターさんが受けた任務は紫稲妻からリンさんを護ることですから、敵を殲滅すれば任務は成功ではないでしょうか？ どんな理由でリンさんが輝明学園に封印されていたかは知りませんが、魔剣は主を定めるものです。その選んだ主が封印されていた輝明学園の生徒なら、弁明も効くはずではありませんか？ 封印されていた地から離れるわけでもありませんし、依頼主

も許してくれると思います」

「重要なのは敵を撃破すること、か」

ひかりの言葉にトレイターが関心を示した。

「……手ぶらで帰るのも後味が悪いからな。しばらく滞在して紫稲妻が動くのを待つのも良いだろう」

そう納得した。人を寄せ付けない冷徹な雰囲気があったが、他人の意見を素直に肯定する辺り悪い人間ではないのだろう。

なんだか自分に関係することも話されている気がするのだが、蚊帳の外に置かれてる刃太は不安そうに視線をひかりとトレイターの間を行ったり来たりさせた。

「あ、大丈夫ですよ。別に刃太くんがどうこうされるわけじゃありませんから」

「ああ、俺が紫稲妻を斃そうと言う話だからな。お前に益はあれ不利益はない」

「……なら、良いですけど」

ドゥリンダナ

魔剣を紫稲妻と呼ばれるエミュレーターが狙っていると言う話だったから、その主である刃太も狙われる可能性がある。

トレイターが紫稲妻を斃そうとしてくれるなら、刃太にも危険は及ばない。そういうことが。

「主よ、心配しないでもらおう。いかな敵が現れようと、わたしが貴方を護ります。巻き込んだ責任はきちんと果たしましょう」

「あ、ありがとう」

勇ましくドウリンダナに宣言されるが、女性に護ろうと言われるのはちょっと情けなかった。本来狙われているのはドウリンダナのだから、刃太が護ると宣言しなければいけない立場だと思うのだが。

ひかりが腕に巻いた時計に目を落とす。

「もうこんな時間ですか……。今日のところは解散しましょう」

刃太も携帯に備え付けられたデジタル時計に目をやると、結構な時間が経っていた。家を出てから一時間以上経過している。そろそろ帰らねば不味い。

「それなら、俺も消えよう」

最初にトレイターが外套を靡かせると背を向けて歩き出した。

「あ、待ってください。貴方はどんなウィザードなんですか？」

それをひかりが引き止めた。

ウィザードにも、細かい分類がある。刃太は魔剣使いと言うものに当てはまり、ひかりも”魔術師”と言うクラスに区分されている。でも、トレイターは一見ではどのようなウィザードか分からなかった。接近戦をしていたことから、前衛タイプのウィザードだとは思うが。

トレイターは一度足を止め、またブーツの踵を慣らしながら歩き出した。

「——落とし子、と言つやつさ」

風にも消されそうな声で呟き、 트레이ターは闇夜に消えていった。去り際の言葉を聞いて、ひかりはしばらく放心したように立ち尽くす。

「落とし子……^{トレーター} 反逆者……？」

「……花川さん？」

そんな彼女に刃太が心配そうに声をかけると、遅れて彼女が反応した。

「ああ、はい。すみません、ぼーっとしてました。行きましょう、送っていきます」

「え、あ、ありがとう……」

無理やり作ったような笑顔を浮かべたひかりに急かされて、刃太は自宅への道を辿り始める。二人の後を無言でドウリンダナが続いた。

輝明学園の校舎が徐々に離れていく中、刃太が控え目に尋ねた。

「あの、まだ聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「はい、わたしに答えられる範囲でなら。……下手でも気にしないなら、ですけど」

トレーターにフォローされていたことをまだ気にしていたらしい。ひかりの顔に哀愁漂う影が差した。

ううつ、とそれに怯みつつ口を開いた。

「トレイターが言ってた落とし子って、何？」

一瞬だけ、ひかりの動きが止まった。
足を止めたひかりに刃太が振り返る。

「どうかした……？」

気遣う視線を向けると、ひかりは誤魔化すように刃太から視線を逸らして歩を進めた。ひかりは刃太の家を知らないので、慌てて彼女の前に出て先導した。

聞いてはいけないことだったかと不安になりつつ、重たい沈黙に刃太が肝を冷やしていると、ひかりが答えを返した。

「……裏界には、魔王と言うものがいます」

「魔王？」

裏界とは、エミュレーターがやってくる世界のことだったか。

「魔王は何十人と存在していて、エミュレーターを支配しています。分類的に言えば彼らもエミュレーターですが……」

ひかりの説明にはマイペースなところがあるので、刃太は理解しようと思死に耳を澄ました。今のところはまだなんとか理解出来た。刃太がウィザードなどについて基礎知識を得たがらだろう。

「私達はエミュレーターや魔王と戦っています。最近力を求めたウィザードが魔王に組することがあるのです。魔王と契約を結めば

強い力が得られますから。……私達から見れば、裏切り者ですね。それが落とし子と言われる人達です」

力を求める理由は単純に破壊欲が強かったり、復讐のためや魔王に就いた方が利益があると考えたウィザードなど様々だとひかりは説明された。

「最近は事情があつてウィザードに協力してくれる魔王もいるので一概には言えませんが、一般には嫌われています」

そして、あのトレイターと言う人はその中でも特殊ですとひかりが俯きがちに話す。

「あの人は名も知られていない低級魔王と契約を結び——その場で契約相手を斬り殺しました」

いきなりの不穏な言葉に、刃太は驚いてひかりに振り返った。

「契約を結び油断した魔王を増加した力を使い、背後からバツサリと。こうして彼は、契約に縛られない特殊な落とし子になった。一度ウィザードを裏切り、今度は魔王を裏切る。だから、反逆者^{トレイター}」

ひかりの口から語られた事に刃太は圧倒されていた。先程まで会話を交わしていた人間が、そんなに特殊な人物だったとは。ウィザードと言う非日常的な存在の中でも常軌を逸していると刃太でも理解は出来た。

「契約相手を無くして力は衰えたようですが、普通のウィザードとは段違いの強さを持つベテランウィザードです。……トレイターと呼ばれてはいますが、彼がウィザードに危害を加えたと言う話は聞

きませんから、そこは安心して良いと思いますよ」

「う、うん……ありがとう」

そう答えるのが、刃太には精一杯だった。

3：反逆者（後書き）

同日連続更新三話目。

TRPGで言う所のエンディングフェイズ。エンディングでもまだ続きますがw

今回はいらない子、トレイターに喋らしました。こいつは散々強そうな雰囲気醸し出してたクセに速攻護衛対象を奪取されてますね。まあ、現場に到着したら既に手遅れだっただけなのですが。

それでは。

4：突撃アナタの一軒家

「それで、です」

溜息を吐いたひかりが眉間を抑えながらドウリンダナを見やった。

「……いつになったら魔剣に戻るのですか？」

現在上代家前。

夜間の出来事。

ひかりにそう問われたドウリンダナは即座に一音も狂いなく返答する。

「ですから、無理です」

「無理ですじやないでしょう無理ですじや!？」

「何度も説明したように、無理な物は無理なのです」

人差し指を立てて先程と同じことを口にする。

「わたしは長年地下に封印されていました。それが問題でしょう。剣で状態を固定され結界に絡めとられていたわたしは、一度人化してしまつたら本来あるべきの魔剣状態に戻ることが出来なくなってしまう。人間の扱う物に例えるなら……そう、誤作動と言うものです」

「でも学園では一度魔剣に戻ったじゃないですか」

「魔剣に戻ることで自体は当たり前です。わたしが本来あるべき姿はアレですから。今でも人化を解くことは出来ます」

何か言いたそうなひかりを遮って、ドウリンダナは続ける。

「出来ませんが、それには多大な労力を必要とします。戦闘を行う程度の間なら問題はありませんが、月衣にずっと収まっている、と言うのはできかねます」

「ならどうしろって言うんですか、もうっ！」

綺麗な髪を些か乱して声を上げるひかりを、なんだかキャラが変わったなあ、と刃太は暢気に眺めていた。

ひかりがキャラを変わらせてドウリンダナと言い争いをしているのには、勿論分けがある。

刃太が自宅に入ろうとした時、問題が生じた。

ドウリンダナである。

彼女は刃太の”魔剣”と言う立派な武器であり、一緒にいなければ意味がない。ウィザードは武器を月衣に収納するのが常識。なのでドウリンダナを月衣に入れようとしていた。

だけ、だったはずなのだけど。

「でも、困りますよこれじゃあ。リンさんが家に入れないだったら、刃太くんはウィザードでありながら丸腰ってことになります。……何かあったら危険です」

肝心のドウリンダナを月衣に収めることが出来なかった。

これではドウリンダナが上代家の敷居を跨ぐ羽目になってしまう。ヤバイ。それは刃太的にもヤバイ。実にヤバイ。

いきなり家に銀髪の麗人を招いたら家族がどんな反応をするか。考えただけで恐ろしい。変な目で見られること請け合いである。

刃太がひとり暮らしなら良かったのだが、生憎と両親姉健在でひとつ屋根の下で元気に生活中だ。

「うーん……刃太くんの部屋って二階ですか？」

「え、うん、そうだけど」

「刃太くんが二階に上がったならリンさんを二階に跳ばせる、なんてどうでしょう？ リンさんの身体能力なら可能でしょうし、なんならわたしが箒で運びますけど」

顔に似合わずなんとも無茶な発案であった。

当たり前前に刃太は顔を横に振る。

「む、無理だよ！ 部屋って言ったってたかが知れてるし……。そもそも女の人とふたりでいるなんて、その……」

ちらちらと自分の方を見てくる刃太をドウリンダナは不思議そうに見た。

「なんででしょう？」

「い、いやなんでもっ」

口元を覆って顔を背けた。意識したら急に顔を見るのが恥ずかしくなってきた。

その可能性を今更ながらに思い出して、ひかりはむっと顔をしかめた。

「確かに……それは何というか駄目ですね。倫理的に常識的に私的に駄目です」

最後は完璧に私情であるが刃太が気付く素振りはない。
というかそれどころではなかった。

「主、刃太。顔が紅い。体調が悪いのですか？」

労^{いたわ}るように目を細めてドウリンダナが刃太に顔を近付けていた。

「大丈夫だよ大丈夫！ ちょっと熱いだけで……」

たじろいぐ刃太にドウリンダナはさらに詰め寄る。

「大丈夫ではありません。今の夜風は涼しいと人化して生まれた私の疑似神経が訴えている。熱いなどとは触覚がおかしい。熱でもあるのではないですか」

ドウリンダナが額に伸ばしてくる細く美しい工芸品のような手から刃太は驚いて後ずさった。

「何故逃げるのですか？」

無論羞恥心からですとは言えなかった。

「い、いや別になんでもないから……っ」

「なんでもなくはありません。先程にも増して顔が紅い。危険だ」

手を伸ばしては逃げられるとドウリンダナの身体が迫った。腕を掴まれると、抵抗しようにも綺麗な腕を傷つけてしまいそうであることができない。まるで芸術品のような扱いだ。

柔らかい身体が刃太に触れた。元は剣なのになんで柔らかいんだとか良い香りがするんだとか、ツツコミ所は数あれど脳の処理能力が限界を超過してオーバーヒート状態のせいで呂律がまわらなかった。

こんなに女性耐性が弱いとは刃太自身も思わなかったが、原因はきつとドウリンダナにある。異国の顔立ちに立ち姿、それにこちらを信頼していると訴える瞳。美しさならひかりも引けをとらないが、初対面なのと上記諸々のせいでこの密着状態は天国地獄なヘルアンドヘブンの状況なのだ。

ふたりの様子によろやく気づいたひかりがあつと目を見開いた。

「何くつ付いてるんですか！ ふたり共離れてくださいーっ！」

急いで刃太とドウリンダナを引き剥がそうとひかりがふたりの元まで走り寄り、

ガチャリと。

上代家玄関が開けられた。

「……刃太？」

「……姉ちゃん？」

玄関から出て来た姉、上代奈々子と刃太の視線が合った。その場の人間から血の気が失せ、固まる。

北極で凍結している氷と同じ位空気が凍っていた。

そんなタイムストップ、静止画の中で一人だけが色を持って動いている。

ドウリンダナが動きを止めた刃太の額に手を当てた。

「熱は、ないようですね」

*

あんなに騒いでいて誰も気づいていないと思っっている方が、おかしいと言っわけ。

上代家リビング。

いつもは食事を取りソファで寛^{くつろ}ぎながらテレビを見たりお菓子をばくついたりする怠惰空間は、今現在変な空気で包まれていた。

上代母、上代父、奈々子、机を挟んで向かいにドウリンダナ、ひかり、刃太とソファに腰を下ろしていた。

異国の女性に金髪のクォーターの少女、しかもいずれも容姿は美麗。そのふたりと夜中に玄関で言い争う——ように見えた——息子^{の図}。

家族会議が勃発しても当然だった。

刃太は顔を引きつらせながら内心で嘆いていた。なんでこんな状況になってしまったのかと。なんだこの針のむしろは。安心してください私情のもつれとかではないですから大体あなた方の息子ですよそんな甲斐性があると思いますか、そう訴えたかったが余計に場を変な方向へと導いてしまいそうで口に出れなかった。

こんな時都合の良い方向に持っていけない魔法は大したことないのではなかるうか。

背を冷や汗でびっしょりと濡らしながら視線を移すと、上代父の荒れた口が開かれようとしていた。

なにかくるか――。

「刃太……この、彼女達はどのどなただね？」

第一声。当たり前障りのないこと。

オーケー、まだなんとかなる。なんとかかごまかしてここから脱出しなければと刃太は慎重に言葉を選んでいく。

「えーと……左側の人がドウリンダナさんで、金髪の人がクラスメイトの花川ひかりさん」

「……ドウ、ドウリンダナさんとはどういう関係だ？」

難しい。

ドウリンダナとの関係を言葉にするのは非常に難しい。そもそも馬鹿正直に話せるものではない。何か言い訳を考えなければいけない。

だが言葉を詰まらせていたら、嘘だと悟られてしまう。早急に都合の良い嘘をと思いをフル回転させる。

「主従関係です」

言い訳探しは、もう必要なくなっていた。

「ちょ、ちょっとリンさん！ な、ななな何を言ってるんですか！ こんな時にご冗談を！」

「む、わたしは冗談など……モガ」

何か伝えようとするドウリンダナの口をひかりが背後から塞いだ。

沈黙。

ああ、終わったー！。

いつそ清々しいほどに終わった。刃太は慌てることなく無我の境地にでも到達したような心境でいた。

ちゃんと普通に育てた嫡男の側に主従関係ですと言い出す美人さんが現れたら、両親精神的に大ダメージ姉からは軽蔑され家族内の地位は失墜ジ・エンド。

これからは部屋に引きこもって過ごすしかあるまいていちくしよめ、と訳の分からないことを脳内で乱舞させている刃太の正面で姉の奈々子見た目中学生がドウリンダナへ遠慮がちに声をかける。

「あの一、主従って刃太が下？」

それですか。

「いえ、刃太が主でわたしが従僕……モガモガっ」

ひかりが引きつった笑いを浮かべながら、もうこの人は何口走ってしまってるのですかねおほほほほ——ドウリンダナの口を必死になって抑えつけた。

その言葉で場が晴れることはない。

刃太が奴隷としてあれやこれやとされているわけでないのは、あの意味面子が保たれたかもしれないが上として見られるのも果たしてどうだろうか。

——というか姉ちゃん俺がこき使われてる方だと思ってたんだね。奈々子の中で自分がどんな評価なのか想像して悲しくなる刃太だった。

どんどん取り返しのつかない方向に進んでいくので、慌ててひ

かりがフォローに入る。

「その、ですね。わたしは元からこちらに住んでいるのですが、この人は最近日本に来たばかりでこっちの言葉がよく分からないんですよ。主従関係とは彼女の国では友達と言っ意味でして……ねえ、そうですよねリンさん!？」

「は？ わたしは日本語の理解は出来て……」

「そうですよねーっ!？」

「……え、ええ。そうです。誤解を招いてしまい申し訳ありません」

ひかりの笑顔の圧力に魔剣が折れた。可愛い顔で迫られると逆に怖いものがあつた。

ぎこちないそれでも誤解はなんとかならしい。両親の強張った表情が少しずつ安堵のものに変わっていく。

ただ姉だけは釈然としない顔で首を傾げていたが、童顔ではイマイチ締まらなかった。

ひとまずはこれで安心だ。ひかりの機転に感謝しつつ、刃太がほっと胸をなで下ろし。

「ああ、そうでした。物は相談なのですが、御夫妻、姉上、わたしをここに住まわせてはくれないだろうか」

秋位まで回復していた室温が真冬のシベリア辺りまで低下した瞬間だった。

「リ、リンさん……?」

「ドウリンダナ……？」

「はい？ なんでしょう」

「なんでしょうじゃないでしょう！」

ひかりがドウリンダナの頭を引き寄せ、正面に背を向けると顔を近付けて小さく囁いた。

「な、なに言い出すんですかあなたは！ せつかくなんとかなりそうだったのに……っ」

「はあ、ですがそれでは当初の問題が解決しませんが……」

当初の問題？ とひかりがこの状況に陥ってしまった原因を思い出し、手を刃太にも伸ばしてぐいと引き寄せた。

「え、なに？」

いきなり顔を近づけられて刃太が硬直する。普段は名前通り高嶺の花であるひかりがこんなに接近したら、いくら見慣れてはいると言っても緊張してしまう。

そんな刃太の様子に気付きもせず、ひかりは本題に入っていく。

「そうです、私達は忘れていました……。リンさんをどうやって刃太くんの周辺に待機させておくか」

「……ああ、そういえば」

月衣にも入らないしでどうすればいいか悩んでいたのだった。で

もそれとドウリンダナの言葉に何の繋がりがあるのだろう。

「そこです。私的に非常に不本意ではありますがまあ同室に二人きりとかはないでしょうしいかと苦渋の決断をしましてですね？……しばらくリンさんをここに住まわせて頂こうと」

「……………え、えええええええっ！？」

突然大声を上げた刃太の口をひかりが柔らかい手で塞いだ。

「しーっ！ 静かに。いきなり大声出さないでください」

「ちょ、ちょっと待ってよ！ それ…………」

「もうリンさんが切り出しちゃいましたから、もう乗り切りましょう。私に任せてください」

何を任せると言っんですか花川さん、そんな困惑が刃太の中で渦を巻いていた。

くるりとひかりが両親と姉に向き直り、にこやかな笑みを浮かべた。万人の心に訴えかけ、所見の人間の懐へ容易に潜り込めるような、そんな笑顔。

そのまま一度頭を下げた。

「すみません、リンさんは最近日本語を覚えたばかりでした」

「あ、ああ、いえそうでしたか」

ははははは、と父親が照れて後頭部を掻いた。が、次の瞬間には左右から母と奈々子の肘打ちを脇腹に挟り込まれて悶絶した。

……情けないよ父さん。

内心で刃太が涙を流したのは言うまでもない。

目の前の光景を無情なのか慈悲なのか、ひかりは笑顔でスルーした。あ、口元が少し笑いそうになってる。

「実は彼女、日本文化を肌に触れて感じようとするこの国に訪れたのですが、寝泊まりする場所に困っていました」

私の実家に泊めようと思っていたのですが、とある事情で駄目になってしまって、と困った風に表情を曇らせる。

「しかも私の家の生活用具を使って本格的に日本文化を体験しようとしていたので、荷物もなくて……。ですから、不躰ではあるのですが、彼女をここにホームステイさせて貰えないでしょうか？」

真摯に訴えかけるひかりの言葉に一同は声を詰まらせ、刃太達のように顔を近づけて何事か相談し始める。

辛うじて聴こえるものの何を言ってるか分からない会話に緊張している、目の前の三人は揃って姿勢を正した。

父親が一家を代表して——先程の失態で代表として危ぶまれているけど——咳払いをひとつ。

「まあ……部屋は二階にひとつ余っているし、しばらくはいいですよ」

「ありがとうございます」

ひかりとドウリンダナが頭を下げて、刃太も釣られてそれに倣う。こうして、四人家族の家にひとり——一振り——の同居人が加わることになった。

＊

時間も時間だから送っていつてあげなさい、と言われて刃太はひかりと一緒に外へ出ていた。

刃太の家の前で、ひかりはふふつと笑った。

「これじゃあ逆ですね。私が送っていたはずなんですが」

「……ああ、そうだね」

少し忘れていたけど、彼女はウィザードなのだ。自分が送る必要などなく、ひかりは安全だろう。彼女が言うに送った後、ドウリンダナもない状態でひとり帰宅する刃太の方が危ないらしい。

「だから良いですよ、ここまでで」

「そう？」

「はい。今の刃太くんが一〇人いても私は負けませんから」

冗談の積もりだろうけど、そう言われると案外傷つくもんである。

「そ、そっか……そうだね。なら、ここで見送るよ」

「はい、ではまた明日」

お辞儀をして立ち去ろうとするひかりに、刃太はあつと声をかけた。

「待つて、花川さん。どうしてあんな簡単にもっともらしい嘘が浮かんだの？」

正直何も知らなかったら刃太もあっさり騙されていただろう。そこまで見事な演技力と言葉だった。

不思議そうにする刃太を振り返り、ひかりは悪戯な笑みを浮かべた。

「——女の子は、意外と嘘が得意なんですよ？」

5：定まらない現実

翌日の上代家食卓。

父親は今日も早く仕事に出ていたので、食卓は三人——ではなく四人が座っていた。

昨日と同じく母、奈々子、刃太、そしてドウリンダナ。

異邦人を招いた家の食卓はギスギスときこちない様相を呈している。

——のが普通だと刃太は呆れながら思った。

予想外なことに、ドウリンダナは一日も経たず上代家に順応していた。

「リンさんお醤油取ってくれる？」

「はい、お母様。……ああ、お姉様、そちらのソースを取ってくださいか？」

「ん、どーぞ」

「ありがとうございます」

慣れすぎじゃないだろうか、これは。

家族も簡単に受け入れてしまっているが、もっと気にするべきだろうとぼやく。アットホームにも程がある。むしろこちらがおかしいのかと思いきや。

いや、確かに受け入れてくれた方が有り難いだけだ。

そもそもこの家族は人懐っこいと言うか、他人と打ち解けるのが

早い家庭だったか。

でも常識外れだよなあ、と思い、ふとある考えに至る。まさかこれも”世界結界”と言う物の作用だろうか。

世界結界は”常識の壁”。人間の”そんなことは有り得ない”と言う想いで構築された物。なら、刃太の”他人がホームステイ先にすぐ馴染むのは有り得ない”と言う物も”常識”の一つなんじゃないか。

刃太は”月衣”と言う世界結界の干渉を受けない個人結界を持っているし、ドウリンダナ自体は非常識の塊である。なので世界結界の常識は通用せず、こうして打ち解けているんだと。

……なんでもいいか。

上代家が人と仲良くなる能力に特化してるのは事実だし、世界結界がどうたら考えても現状は変わ^{いま}らない。

どうにも新しい”常識”みたいな物を知ってしまうと、物事を詮索してしまう癖が自分にはあるらしい。

「それにしてもリンさんは日本のことよく分かってるわねえ」

「ええ、最低限学んで来ましたから。日常面でこれ以上迷惑を掛ける訳にはいけませんから」

「リンちゃん偉い！ 偉いよ！ あ、あたしより年上っぱいけどちやんでOK？」

「はい、お構いなく。お姉様」

ミニマム少女を外国美人さんがお姉様と言うのは、不気味を通り越してシュールだった。

——姉ちゃん、もっと遠慮つてものを学んでくれ……。
自称ハイブリッドの姉に、弟は痛む眉間を抑えた。

*

「——と言う感じ。見事なまでに順応してたよ」

学校でひかりにそう伝えれば、良かったと胸を撫で下ろした。

「たった一日で慣れちゃうとは思いませんでしたけど、それならしばらくは安心ですね。力技みたいなものだったから、どうなるか分からなかったんですけど」

時は昼休み。

時間的猶予があるこの今、刃太は家の状況を事細かく伝えていた。やっぱりひかりも心配だったようで、肩の力が抜けた様子だ。

「学校に連れてくることは出来ませんから、結局常時一緒……と言っわけには行かないのが心許ないですが」

「あー、そうだね」

頷き相槌を打った。ひかりが悩むくらいだから、やはり月衣に武器を収納しておかないウィザードは異常なのだろう。刃太もドウリンダナがまともな剣——魔剣がまともかは知らないが——だったらもっと話は簡単だったろうと思う。無論、ドウリンダナの人格性を否定するつもりはないのだけだ。

「目下の問題は紫稲妻の撃退ですね。そうすれば刃太くんは襲撃の危険性から遠ざけられますし、ドウリンダナさんを剣にして月衣に

戻す方法も見つかるかもしれません」

「……うん、そうだね」

いまいち覇気のない刃太の様子に、ひかりが金髪を揺らした。

「どうかしましたか？」

「え？ ああいや、なんでもない」

笑顔を繕って頭を左右に振った。

本当に、なんでもなかった。

ただ、未だに現実感が持てないだけで。

「そうですか？ では、今後の予定を話しますね。とりあえずこれから紫稻妻を何とかするまで、私が刃太くんを家に送りますね」

「はい？」

「だから、これからは一緒に下校するんですよ。登校する位の時間は襲ってこないと思うので、帰りだけですけど」

ひかりの言い分は分かった。刃太の身の安全を考慮したものだ。そこに異論はない。

ない、けど少々それは居心地が悪いと言っかなんというか。

本人に自覚があるかは分からないが、彼女はクラスでなかなか人気が高い人物である。そんなひかりと一緒に帰ると、別の意味で視線が気になると言うか。

ひかりを困らせることになるので言葉にはしないが。

「紫稲妻について大した手掛かりもないですから、しばらくはこのままですね。残念ながら後手に回るしかありません」

相手がアクションを起こさない限り何も出来ない現状に、ひかりは溜め息を吐いた。

間接的にでも自分のせいで気苦労を背負っている様子のひかりを見て、刃太は慌てて話題を変えた。

「そういえば！ 花川さんって昨日友達と一緒に弁当食べてたよね。今日はいいの？」

はっと気付いて、ひかりは教室にある時計を見上げた。

「そ、そうでした。屋上に多恵ちゃんを待たせて……。ごめんなさい、もう行きますね」

「うん、いつてらっしゃい」

自分の席にある弁当の包みを持って教室を出ていくひかりを見送り、姿が見えなくなると途端に肩から力が抜ける。

「紫稲妻、か……」

ぼんやりと窓の外に目をやりながら、現実味のない名前を呟いた。

*

予定なら、護衛も兼ねて今日はひかりと一緒に帰宅することになっていた。

が、予定は未定である。

そういうわけで刃太はひとりで帰宅路を進んでいた。ひかりは刃太と何とか帰ろうとしていたのだが、なんでも入部している部活の顧問に呼び出されてしまつて時間が合わなかったのだ。少し位なら待とうと思つたが、時間が遅くなつたらひかりにも悪いと刃太は先に帰ることにした。

本来なら、あまりに警戒心がない行動だと叱咤されるだろう。それは国の重役がSPを連れずにスラム街を歩くのと同義である。直接狙われているのはドウリンダナなのかもしれないが、その所有者も襲われる可能性は極めて高い。

分かつていて、それでも刃太は緊張感が持てない。

昨日の夢のような光景が終わつてすぐなら、あつた。しかし、時間が経てば今までの”常識”が否定される出来事を現実と認識できなくなつていた。今でも鮮明に残っている場面は、夢だったのではないかと疑いそうになるほど。

いや、疑いはしまい。月衣で持つて常識外のことを行えるようになり、ウィザードとして覚醒した刃太にはあれが紛れもない現実と理解出来ている。あれこそが真なる世界の法則であり、自分の住むべき世界であると。

心の深層からの言葉をそれでも刃太は信じられない。否、信じたくないのだ。今まで自分が生きてきた世界とは違う法則を。それはきつと恐怖から来たものなんだろう。

一般人としての刃太とウィザードとしての刃太。

その二つが噛み合わずに不協和音を上げていた。

正直な話、紫稻妻にたいしても敵愾心を持てずにいる。

自分をいつ襲うともされない驚異は確かに怖い。怖いけど、もう来ないんじゃないかと言う期待がある。人はそれを現実逃避と言うのかもしれないけれど。

そんな夕暮れの街の中、ある公園でその人を見つけた。ベンチに座つた男性を見て、一瞬見間違ひかなと目を擦つたが、

多分本人だろう。黒い外套ではないから分かりづらいが。

「 트레이ター、さん？」

口にし慣れない名詞を読んでもれば、その男は反応した。

「ん……ああ、お前か上代」

初めて見た私服姿のトレーターは、存外に普通の青年だった。服飾におかしい所もないし、異様な迫力を醸し出しているわけでもない。常人より切れ目で、落ち着いた雰囲気一般人と見間違えそう。しかし、こんな人がウィザードで落とし子とか言う異端児だなんてとてもじゃないが信じられない。

やっぱウィザードなんて絵空事なんじゃないかと疑いがかけるが、目の前の人物は自分が否定したい部分で出逢った人間である。彼がこちらを知っていると云うことでウィザードやエミュレーター、紫稲妻は間接的に肯定される。

「……こんな所で何をしてるんですか？」

「紫稲妻の手掛かりを探してな、この辺りを探っていた。それでも成果はゼロだ。物探しは俺の領分ではないな……慣れないことはするもんじゃない」

それで今は遅い昼飯中だ、と嘆息した。良く見れば彼の手にはコンビン弁当がある。いやに現実的であった。

刃太が相槌を打ち、会話が終わる。

この後どうしようかと刃太は内心困っていた。もう立ち去るべきか、それとも何か他に言うべきか。前者は淡白過ぎて嫌だし、後者は何を言いたいのか定まらない。

選択に右往左往していると、トレイターが刃太の心を見透かしたように。

「何か、悩んでるな？」

「……え、」

「やはり、ウィザードについてのことが」

凶星を突かれて刃太は閉口した。

しばらくの無言の後、トレイターが刃太から目を外して弁当のおかずを咀嚼するとベンチの隣を叩いた。

「相談にくらいなら乗ってやる」

それだけ伝えると側に置いていたお茶を嚥下し、また箸を進める。一瞬躊躇したが、刃太はトレイターの進めに従って少し離れてベンチに座った。

「で、なにに悩んでいる」

相変わらず弁当を食べているトレイターを横目で見ると、視線を地面に落とした。

「なんというか、現実感が持てないんです」

同じウィザードでもあるひかりにも打ち明けられなかったことを、刃太はゆっくりと吐露し始める。

「ウィザードとか、エミュレーターとか、紫稻妻とか……。今まで

に見たことも聴いたこともないモノを目の当たりにして。頭が混乱してます」

「あんなのにいきなり襲われたら、混乱するのは当たり前だろうなでも、それが現実なのはもう分かってるんだろ」

「はい、理解はしてます。……ウィザードとしての自分に理解させられたというか」

それがウィザードと言うものと、トレイターは頷く。相変わらず食事を止めないが、その気楽な姿勢に刃太は饒舌じょうぜつになっていた。

「でも、ウィザードを否定する自分もいて……頭がごちゃごちゃになっちゃって……。紫稻妻に狙われているかもしれないのに、危機感を持ってない。斃ふかんそうとも思えない。周りの出来事を物語の外の人物みたいに俯瞰ふかんして見てしまふんです。夢物語の中にいるみたいで」

例えば、物語を読んでいて突然出て来てすぐに消え去った敵役に明確な不快感などの負の感情を抱けないように、紫稻妻を自分の“敵”であると認識出来ていない。これならまだ子供の喧嘩の方が敵意も怒りも殺意もある。

要するに、現在の自分に感情移入が出来ていないのかもしれない。自分に感情移入というものが、刃太にはよく分からないが。普段自然と意識せずに行っているものだからだろう。

トレイターがやっと箸を止めた。気づけば、弁当の中身は前菜から主食まですべて完食されていた。

「難しいな」

お茶の蓋を外しながら、トレイターが呟く。

「俺の場合、最初から敵意も殺意も怒りも戦いに必要なおよそすべての感情をエミューレクターに向けていたからな。それが抱けないという問いには、正直答えかねるが……」

残った僅かなお茶を喉仏を上下に揺らして食道に流し込む。

「……明確な殺意や敵意だけで、戦うべきでもないのだろうな。この世を救った英雄は、皆何かの為に戦っただろう。なら、何かのために戦おうと思えばいい。自分の命を守るため、と言うのでもな。そうすれば、戦おうと思う気も起きるかもしれないぞ。……別にお前がやらなくとも、奴に限っては依頼で俺が斃そうとするからな。紫稻妻がどうかなら気にしないでもいいさ」

空っぽになったペットボトルと弁当のトレイをビニール袋に突っ込んで、話は終わりだとトレイターは立ち上がる。公園のゴミ箱にそれらを捨てると、そのままさよならも告げずに刃太の目の前から去っていった。

一人になった公園で、刃太は未だにはっきりと出ない答えに天を仰いだ。

*

刃太が自宅の扉を開けると、玄関には銀糸を纏った美しい女性が立っていた。

「ドウ、ドウリンダナか……」

駄目だ、家にこんな美人な女性がいたら分かってはいても驚いてしまう。元は剣だと意識しても見事な立ち振る舞いに圧倒される。

そんな心情を知らずに、ドウリンダナは恭しく頭こぶしを垂れた。

「お帰りなさいませ、主」

「う、うん、ただいま……」

なんで成り行き上とはいえ主と呼ばれている人間が礼一つで此処までたじろがなくてはならないのだろうか。些細な動作ひとつひとつが完璧過ぎる。しかも洗練され過ぎていて嫌みにも感じない。礼儀作法のコンテストに出たならば、満場一致で文句なしにトップの座に居座れるだろう。

「あれ、ドウリンダナ良く俺が帰ってくるってわかったね」

事前に帰宅する時間が分かっていたいなければ、待っていることなど出来まい。

……まさか、ずっとここで待っていたと言うのではあるまいな。

正直、一日に満たないとは言えドウリンダナを知った刃太にはそれが冗談には聞こえなかった。本当に実行しそうな愚直とも言えるほどの実直さを彼女が持っていることを知っている。

「いえ、刃太とわたしの距離が近付くと感覚的に分かるのです。契約を結んだモノ同士のラインとでも申しましょるか」

「ああ、そうだったんだ」

直前に来たと言うことで一安心した。また入らぬ誤解を家族に招くところだった。

誤解、と言う所で思い出したことがある。

「そうだ……ねえ、ドウリンダナ。ひとつお願いがあるんだけどいいかな？」

「はい。わたしが可能なことならば主の手となり足となり、尽力致しますよう」

「いや、そんな改まることではないんだけど……」

ぼりぼりとこめかみを人差し指で掻いて。

「その主、って言う呼び方止めて貰えないかな？」

「何故です？」

「家族の前で主、なんて呼ばれると困るんだ。最初の内は誤魔化せるだろうけど、何度はさすがに難しいだろうし。せめて家族の前では別のを頼めないかな？」

ふむ、と一度考え込み、ドウリンダナは刃太の願いを承諾した。

「なるほど、わかりました。主に不利益が及ぶのであれば……そうですね——刃太様、でよろしいですか？」

それはそれで非常にむずがゆいが、他もお母様やお姉様としている辺り、これが一番妥当か。ひとり敬称が違うのも不自然だ。

「わかった、それでいいよ」

そう刃太が同調すればドウリンダナは満足気に微笑みを浮かべる。ときりとして思わず視線を逸らした。と、母親がドウリンダナを呼

ぶ声がする。料理を手伝って欲しいと言う母に、ドウリンダナはよく通る声で返事をする、刃太に小さく頭を下げるとリビングに向かっていた。

刃太も家にとがろうと靴を脱いだ時、ふと視界にあるものが見当たらないのに気づく。

「あれ……？」

姉の小さな靴がなかった。刃太は寄り道もしてきたし、いつもならもう帰っている時間だと思うのだが。

まあ、あんな幼児体型でも姉は現役女子高生である。友達と寄り道することだって多々ある、気にすることはないだろう。

簡単に結論付けて刃太は階段に足を掛けて二階に昇っていった。

6：忍び寄るかの如く

——違和感を感じたのは、晩御飯の場だった。

夕飯がちょうど出来上がった頃に父親が帰宅した。よれよれで疲れを姿ににじませた父親がリビングを覗くと、相好を崩して声を上げる。

母がキッチンから夕餉を運んでいて、その濃厚な香りに感激したのだ。階下に降りてきた刃太もそれに胃袋を刺激されて、腹の虫が歓声を上げた。

「リンちゃんが出来て一目だからね、今日は豪勢にしたのよ」

リンちゃんも料理が上手いから助かったわあ、と母親は朗らかに笑った。ドウリンダナがそんなに料理が得意だったとは、刃太も少々意外である。元は剣だからそういう物には音痴だと思っていたのだが。疑似神経がどうか言っていたから、食べ物の味も人並みに体感できるのだろう。どっちにしても、刃太は食材を切るのが一番上手かったに違いないと思っていた。

前菜、副菜、主菜と四人分の料理が食卓に並べられていく。どれも唾液が口内に溜まるのを誘発する香りを有していた。

私服に着替えた父親がリビングに戻って来ると、両親と刃太、ドウリンダナが席に着いた。

ちらりと刃太が時計を確認する。父親が帰宅する時間なだけはある、だいぶ遅くなっていた。

こんなに時間が経っても、奈々子はまだ帰って来ていない。いくらなんでも遅すぎではないだろうか、とさすがに刃太も姉のことが心配になってくる。ただでさえ最近行方不明事件——原因は紫稲妻と聴かされた——が多発していて危険だと言うのに。

犯人のことまで知ってしまった刃太は、前よりは事件を親身に考えていた。紫稲妻の存在を未だ信じ切れていないから、所詮毛が生えた程度ではあるが。

まったく、こんなに美味そうな食事がある日に限って帰りが遅いなんて……姉ちゃん悔しがるだろうな。そんな風に苦笑しておいた。

「それじゃあ全員揃ったことだし、いただきますようか」

皮肉を効かせた母親の台詞に刃太は肩を透かした。

「全員つても、姉ちゃんはいないけどね」

困っちゃうよね、と刃太は笑い、

「なに言ってるの？」　「あなたに姉なんていないじゃない」

母親が不思議そうな顔をしてそう言った。

「——え？」

思わず母親を見返した。

「今、なんて……？」

「だから、刃太には」　「姉なんていない」　「って言ったんだけど……」

一瞬、嘘をついているのだと思った。こんな日に帰りが遅い奈々子への不満から意地悪な事を口に出しているのだと。

しかし、母の目を見てぞっとした。

そこにはわざとらしさが微塵も存在していなかった。息子の言葉

が本当にわからないと、母の目が語っていた。
父親が母親に続いて眉を顰める。

「そうだぞ、お前に姉なんていないじゃないか。家の子供はお前ひとりだぞ。昨日リンさんを連れて来て四人になって……。まったくゲームのし過ぎじゃないか？」

困った息子だと父親が笑った。そこに嘘の色は見えなかったし、そもそも父はこんな質の悪い嘘は言わない。

——え？

どういう、ことだ。

有り得ない。姉が、菜々子がいらないだなと有り得ない。

「じよ、冗談にしては悪質だよ……ふたりとも」

顔が強張って、自分が今どんな表情をしているのか分からなかった。

だって、今朝は一緒に朝食を食べていたじゃないか。

その前の日も、また前の日も、生まれからずっと数十年間一緒に過ごしていただろう。

「い、いくら帰りが、遅いつて言っただって……」

気付けば、身体が震えていた。机の上にあった刃太の指が食器に辺り耳障りな不協和音を発した。

「そ、その言い方は……酷い、よ……」

いつの間にか、両親の視線が変わっていた。軽い冗談をいなす物から、引きつった表情で異物を見る恐れを含んだ物へと。

——いたい、何をおかしなことを言い出すんだ？

そう両親が思っていることを察するのはさほど難しくはなかった。そういえば、

母親の料理の手伝いをするのはいつも姉ではなかったか。

そもそも、

連絡もなしに帰宅がこんなにも遅くなったことがあっただろうか。いや、それ以前に、

——リビングに置いてあるはずの姉の私物が根こそぎなくなっているのは何故なのだ。

玄関には姉の靴がなかった。でも姉は複数の靴を持っていて、靴棚にはなく玄関に並べていた。

それら総て、なくなっただけではなかっただろうか。

得体の知れない恐怖が足下から這い上がってきた。それが通った箇所から熱が奪われ凍えていく。身体の震えが収まらない。現状が理解出来ない。姉の存在を確認出来ないのが、恐ろしい。

「……ご両親、刃太様は少々疲れているようです。わたしが部屋に連れて行って休ませます」

こんな時にでも冷静な対応をとって、刃太の肩に手をかけ一緒に立ち上がった。

「ドウリンダナ……！」

目を見開いてドウリンダナを見るが、彼女は視線を合わせずに二階へと刃太を連れて行った。二階の廊下まで連れていかれて、刃太

はドウリンダナの腕を乱暴に振りほどいた。

「おい、ドウリンダナ！ まさか、お前まで姉ちゃんのこと……」

まさか人外の彼女も家族共々姉を忘れてしまったのではないかと声を荒げるが、ドウリンダナは静かに首を振った。

「いえ、わたしは存じております。上代奈々子、主のお姉様です」

他人から出た名前に、刃太は心の底から安堵した。良かった、ドウリンダナは忘れはいない。つまり上代奈々子と言う人物は確実にここで存在していたのだ。

「でも、いつたいなんで……？」

いきなりなんで両親は奈々子のことを忘れてしまったのか。何故奈々子が所有していたものが消え去ったのか、まったくわからない。苦悶する刃太を見て、ドウリンダナは沈痛な顔をしていた。

「ドウリンダナ、何か知ってるの？」

主に問われてドウリンダナは口を開きかけ、頭を払ってそれを止めた。

「わたしには難しい問題です。……ひかりや、他のウィザードに聴いてください」

と、言い辛そうに彼女は口を閉ざした。

それは、ウィザードならこの状況について何か分かれると言ったことだ。

刃太は反射的に自室の部屋に飛び込み、電気の消えた中を見回した。焦っていて電気を点けると言うことさえ脳内から忘却されていた。

廊下から差し込む明かりで、ベットのの上に置かれた携帯電話を見つける。刃太はそれを引っ付かんでアドレス帳を呼び出した。

は行には昨日教えて貰ったばかりのひかりの電話番号が記録されていて、刃太はダイヤルを押すと携帯を耳に押し当てた。ぷるるる、と言う呼び出し音さえもどかしい。

数回のコール音の後、単調な電子の音が途切れた。

『はい、花川です。刃太くん、何かご用ですか？』

「花川さん！？ 聞きたいことがあるんだけどッ」

少しのんびりとした少女の声が聴こえてくるなり、刃太は声を上げていた。

今まで聴いたことのない刃太の声に、携帯越しに相手が驚いているのが分かったが、それを気にする余裕はなかった。

『刃太くん？ どうかしましたか？ まさか紫稲妻が――』

「違う、紫稲妻じゃない。そんなんじゃないんだ。姉ちゃんが、姉ちゃんが……ッ！」

『落ち着いてください刃太くん！ いったい何があったんですか？』

落ち着かせるように尋ねてくるひかりに、刃太は混乱して上手く動かない頭を必死に使って訥々と語った。

姉が突然消えたことから、姉のことを家族は忘れてしまっていること、姉の所有物が総て消えたなどをなんとか伝えることができた。

自分で口頭にしてみれば、状況がより詳しく脳内に入り込んでくる。同時に寒気が襲ってきた。

——これじゃあまるで、姉ちゃんが最初からいなかったみたいじゃないか。

そんなわけではない。刃太もドウリンダナもちゃんと覚えている。なのに、そう思ってしまうと胸をかきむしりたくなる衝動に駆られてしまう。

爪が掌に食い込むほど強く握りしめて不安に耐えていると、しばし思案するよう唸ったひかりが問いに答えを出した。

『それは……奈々子さんはプラーナを奪われたのでしょ』

「プラーナ？」

人間やその他万物に宿っている魂の塊、とトレイターに聴かされた記憶していた。後からひかりに聴いた話では、ウィザードならばこのプラーナを力に変換出来るらしい。確かエミュレイターはこれを狙って裏界からこちら側にやってきて——

——エミュレイター？

『はい。プラーナとは前に説明されました通り、魂の塊です。エミュレイターはこれを食そうとこちらにやってきていますが……』

「それって、まさか姉ちゃんは……っ！」

「多分、刃太くんの予想通りです」

ひかりは一拍の間を置いて、

「——上代奈々子は紫稲妻に襲われた」

最悪の事実を口にした。

頭の中が真っ白になった。その言葉が爆弾であったかのように脳内で乱舞していた不安も恐怖も総ての思考が消し飛び、あるいは爆風で吹き飛び、消えた。

後には、ただひかりの言葉だけが残っていた。

白の中に黒い言葉だけが浮かんでいる。実にシンプル。シンプル故に刃太は拒否も拒絶も目を背けることさえ出来ずに、それだけを直視させられた。

紫稲妻に、襲われた。

姉が件の行方不明者？

実感を持てていなかったモノが現実的な輪郭を刃太の中で形成していく。

——曰わく、被害者は腹の中。

——曰わく、八つ裂きに解体。

——生存の可能性は満に一つ。

ガクツと足から力が抜けて床に尻餅をついた。半身が倒れてベツトの縁に寄りかかる。

左胸の中で動物が大暴れしているように鼓動する心臓を知らず抑えて、刃太は思いついた僅かな可能性にすがりつこうとした。

「でも、なんで姉ちゃんのことを誰も覚えてないんだ？ 紫稲妻に襲われたなら殺人事件として警察が死体を……」

死体と言って、吐き気が込み上げてきそうになる。一瞬、物言わぬ肉塊になった姉の姿を想像してしまった。

だが、奈々子の死体は見つかっていない。なら違うのではないか？ そんな甘い考えは、ひかりの次の言葉で消え失せた。

「プラーナは、魂の塊——その存在する力です。エミュレイター

によりこれが奪われてしまったものは、かなりの損害を受けます。人なら自力で生命活動を行うけれど目覚めない特殊な植物状態に陥るか、事故扱いで死んでしまうか。……でも一番ポピュラーなのは”最初からそんなモノは存在しない”と言うことになり世界から抹消されるパターンです」

抹消。

その言葉がやまびこと同様、脳内で反響していた。

プラーナを失えば万物は死に絶える。この場合人間の場合はなんらかの事故で死亡となることもあるが、ほとんどの場合は存在自体が消えてなくなる――。

だから両親は奈々子のことを覚えていなかった。所有物も無くなっていた。

月衣を展開してるウィザード達と魔剣であるドウリンダナだけが存在の消失した奈々子のことを記憶できていた。

紫稲妻に襲われ死体として処理された人間は運が良かっただけで、実際は”存在すら忘却され”葬儀すら行われなかった人間が大量にいるのだ。

つまり、

上代奈々子は紫稲妻に消こされたと。

そういうことか。

「姉ちゃんが、紫稲妻に……殺された？」

刃太の口から零したものを、ひかりは苦しげに肯定した。

はっきりと胸に穴が開いたような喪失感だけが刃太の中にあった。続いて、そこから湧き上がってくるどす黒い感情は、

憤怒と憎悪。

怨みと憎しみ。

抑えきれない怒りの奔流。

握りしめていた拳から血が滴り落ちた。力を入れすぎて爪が肉を裂いていた。傷口が痺れるような感覚があつたが、それを痛みと感じられるほど刃太の頭に過剰な容量は残ってはいなかった。

自分の中で、非日常だったものが鮮明に描き出されリアリティを獲得するのが実感出来た。

ウィザード。エミュレーター。月衣。世界結界。魔王に裏界。

そして、紫稲妻。

認めた。

もう迷う必要はなかった。

認めた。

それら総ては存在するものと認識した。その上で、刃太は行動を選択する。

「――殺してやる」

この手で、必ず。

「紫稲妻を殺してやる」

あの殺戮者の息の根を止めてやる。

電話越しに、ひかりは静かに息を飲んだ。

「花川さん、紫稲妻は俺を、ドウリンダナを狙ってるんだよね」

『は、はい。多分、そうだと思いますけど』

「なら、俺とドウリンダナが不用心に外を出歩いていたら紫稲妻は食いついてくるよね」

『……っ、それは、』

ひかりが戸惑ったように声を詰まらせる。すぐさまひかりは刃太の言葉を否定した。

『危険です！ 刃太くんはウィザードになったばかりなんですよ？ 紫稲妻に狙われたら確実にやられます！ そんなことは絶対にしないでくださいっ！』

「でもッ！ そうでもしないと紫稲妻は……！」

昼間、トレイターは紫稲妻の足跡を探っていたが見つからないと言った。こちらから探すことは困難を極めるはずだ。なら、自分が囷になれば向こうから出向いてくるかもしれない。

早く、速く、疾くと速く、紫稲妻にこの憎しみをぶつきたい。単純な思考だけが刃太の中を支配していた。

頭が白熱して冷静な判断をする余裕を失った刃太の肩に、柔らかい手が乗せられた。

反射的に振り返れば、そこにはドウリンダナが膝をついて労るように刃太を見つめていた。

「主、落ち着いてください。ここで貴方が慌ててもどうにもなりません。ひかりも困っています」

「でも……ッ」

「慌てた所でお姉様は帰って来ません。本当に紫稲妻を斃したいと思うなら、後日改めて策を練りましょう。ですから今は落ち着いてください。急いて事を仕損じては元も子ありません」

冷静に紡がれる言葉に、震えていた心が徐々に平静を取り戻して

いく。気付けば、息が荒くなっていた。こんなに動揺していたなんて思わなかった。

脳裏に昨日の戦闘が思い起こされる。無我夢中でドウリンダナに言われるまま戦っていたが、もしひかり達がいなければ後ろをとられた時にバツサリと斬られていただろう。

ひとりで挑めば、間違いなく死ぬ。仇も討てずに死ねば、それは間違いなく無駄死にだ。

肺に溜まった酸素を吐き出して高ぶった神経をなんとか抑制する。そうした後、電話先の少女に謝罪した。

「……ごめん。取り乱して」

『いえ……そんなことがあれば当然ですから。……ひとまず今日は休んでください。明日学校で話合いましょう』

「うん……」

それじゃあ、と電話を切った。

ふつと身体から力を抜いてベットのの上に身を横たえた。高揚していた精神が落ち着いたので、身体が空腹を訴え始める。結局一口も夕食を食べることが出来なかったからだろう。身体は実に正直だった。

「後でわたしが下から夕食をお持ちします。しばらくはお休みください」

「……ありがとう。そうする」

お辞儀をして階下に向かうドウリンダナを見送って、刃太は瞼を下げた。

7：駆け巡り、漫透

昨晚の行方不明者事件は、報道されることなく終わった。
被害者は、この世に存在しないことになったから。

刃太がいつもより半時以上早く学校に向かうと、教室はがらんとしていた。こんな朝早くに登校するのはグラウンドで張り切って朝練あそびを行っている運動部員くらいなものである。

それでも、教室には刃太の他にひとりの生徒がいた。

「おはようございます、刃太くん」

柔らかく伸びる金髪が目を引く少女、花川ひかり。

昨日あの後、メールで朝早くに学校で話合うことに決まったのだ。両親と顔を合わせたくなかったこともあり、刃太はその提案を承諾してこの教室に来ていた。

「……おはよう」

正直言って学校に来て授業を受けるような気分ではなかったが、日頃染み付いた行動パターンというやつだろう、意識しなくても足が学校に向いていた。それに平日の待ち合わせ場所ですれほど都合の良い待ち合わせ場所も他にない。

結果的にいつも通り登校する羽目になったのである。それにひかりが言うには、輝明学園にいた方が安全らしい。ドウリンダナと引き離される状況のどこが安全なのかはよく分からなかった。

刃太は自分の机に鞆を置くと、ひかりの隣にある席に腰をかけた。

「これから、どうするの」

「それを今から話し合いましょう」

人が教室に来て会話が出来なくなるまで、ふたりは相談を続けた。そうして話し込んでいると時間は瞬く間に過ぎてしまい、もつと早く来ればよかったと刃太は後悔した。喋る時間は充分に合ったはずだが、それでも五分程度に感じてしまった。

その長くも短い間に、刃太は新たな情報を知ることができた。まず、ひとつ目。

ひかりの両親もウィザードであると言うこと。エミュレーターとの戦場で出会ってそれがきっかけで結婚することになったらしいが、今はどうでもいい話である。

ふたつ目、この輝明学園にはウィザードが数多く在籍していると言うこと。

数多くとは言っても数は一般^{インサント}人よりは少ないようだが、この学校にそんな人間がひかりや自分以外に、しかも結構な数がいると言うことには刃太も驚きを隠すことは出来なかった。安全と言うのはこういうことか。

紫稲妻の打倒には自分達だけでは心許ない。万全を期すためには、他のウィザードに助力を乞うべきではないかと刃太が素人らしからぬことを言えば、ひかりは首を振った。

「紫稲妻を相手に出来るようなウィザードは私の知る限りでは……」

ひかりの友人にもウィザードは数人いるが、紫稲妻を相手に出来るほどの実力は備えていなかった。過去には魔王と何度も渡り合った猛者もいたようだが、噂では卒業したらしい。噂と卒業に共通点を見いだせず、刃太は首を傾げるものの、いつまでも気にしている余裕はないのですぐに忘れ去る。

両親に頼るうにも、母は既に前線を退き専業主婦、父はエミュレ

イターの集団との戦いがあるようで今は出張中。両方宛にできない。唯一協力してくれてなおかつ強力なウィザードでトレイターがいるものの、彼の連絡先を知らされていないので足並みを揃えることは難しい。

結局当面の間、紫稲妻に関してはふたりでなんとかするしかなかった。

「紫稲妻からこちらにアクションを起こさない限りは、身を守ることに専念してみてもどうでしょう。私達だけで紫稲妻を何とかするのは少々荷が重いです。もしかしたらトレイターさんの絶滅社から増援が来るかもしれませんが、それまで待てばなんとかかります」

と言うのもひかりから提案されたが、刃太は一息の間も置かずには却下した。

「駄目だ。その間に被害者が増える可能性があるじゃないか」

そう言えば、ひかりも口を噤むしかない。ただでさえ紫稲妻によってもたらされた被害は計り知れないのだ。これ以上増やすわけにはいかなかった。

なにより、刃太の姉はこれのせいで亡くなってしまった。だからこんな真似を刃太ができるはずないとは分かっていた。ただこういう選択肢もあるのだと口にしてみただけで。

——それに、もしかしたら……。

ひかりの友人である多恵も狙われてしまうかもしれない。

自分の目的遂行を妨害したひかりのことを紫稲妻が覚えている可能性がある。その報復としてひかりと関わりの深い人間を調べて、多恵や家族を狙うかもしれない。

わざわざエミュレーターがそんな周りくどいことをしてくるとは思えなかったが、ないと断じることのできるものではない。普段な

らば深刻に悩まない問題であろう。しかし刃太の姉が襲われた今、明日は我が身とばかりにひかりも不安になっていた。いや、もしかしたら奈々子はこの理由で亡くなったのかも知れない、と自分の考えに恐怖した。

それに後押しされて、ひかりは自分達だけで紫稲妻に対する策を立案する。

概要は、昨日刃太が言ったものとおおよそ同じものであった。刃太とドウリンダナが囷になり、紫稲妻をおびき寄せるというもの。目標が現れれば、ひかりがもしものために月匣を張って戦闘を開始する。

新米ウィザードの刃太の身かなりの危険が及ぶことになる作戦。こんな策を提示したくはなかったが、皮肉にもこれが一番可能性のあるものでもあった。

話し合いの結果、善は急げと早速今晚紫稲妻をおびき寄せることに決定した。

クラスメイトが登校してきて、この話は切り上げるようになった。

*

学校が終わり刃太が自宅に帰ってくるなり二階の廊下でドウリンダナにひかりとの話を伝えると、彼女は反対せずに頷いた。

「把握しました。つまり今夜、主とわたしが囷となって紫稲妻を誘き出すわけですね」

「うん、そういうこと。……反対はしないの？」

自分の預かり知らぬ所で囷の役割をあてがわれたら普通は怒りだすかと思っていたが、ドウリンダナの反応は従順に承諾する同意だけだった。

意外そうにする刃太に、ドウリンダナは静かに告げる。

「わたしは主の決定に従います。この身は貴方の剣であり、行く手を阻む有象無象を切り捨て道を切り開くモノ。主が危地に赴くならば、わたしも同行するのが使命と言うものです。これくらいで動じはしません」

「そっか……ありがとう」

刃太は感謝で頭が上がない思いだった。ドウリンダナが反対していれば、この作戦は始まらずして頓挫してしまうところだったのだ。

懸念材料が減って気を緩めた刃太にただし、とドウリンダナは付け加えた。

「わたしのこれは条件付き賛成です。今の主の実力では囷、紫稻妻との戦闘は推奨できません。わたしは主がどんな危機に陥ろうと傍らに居続けます。しかし、始める前から勝ち目が決定的に薄いと分かった戦場へ何も対抗策を練らずに往かせる気は毛頭ありません」

ドウリンダナの言葉は『刃太では紫稻妻と戦うには決定的に力不足だ』と断言しているようなものだった。紫稻妻と一回戦闘して辛くも生き残った程度、しかもドウリンダナの力を借りてやっと自分^{しゅうしん}が刃太は強いとは思ってもいなかったけれど、やっぱり傷付く。

傷心に胸を痛ませながらも、ドウリンダナの言葉に反応した。

「対抗策？ そんなのあるの？」

「はい、あります。主の剣技を数刻で向上させるための秘策です。主がわたしを更に使いこなせるようになれば、生存率、勝率が共に

跳ね上がります」

「それはどうすれば？」

ドウリンダナの言葉通りに刃太の力が上昇すれば、この作戦、ひいては紫稻妻が現れた場合の戦闘勝率、成功率も上がるだろう。刃太もそれを悩んでいた。紫稻妻はかなりの強者であると、ひかりに何度も念を押されていたのだ。ウィザードとして活動経験が皆無な刃太には理解し辛かったが、ひかりがあれば言うからにはかなりの強敵なのだろう。

それに自分とひかりだけで戦いを挑もうと言うのだから、少しでも力を付けて勝率を上げなければならない。それでも一朝一夕で力が付くはずがなかった。かと言って作戦の開始を遅らせるわけにはいかない。だからこのまま挑もうと思っていたのだが、ドウリンダナが言うにそれは可能らしい。これに食いつかない訳がない。

その秘策をドウリンダナは淡々と語り出した。

「わたしと主が初めて紫稻妻と戦った時のことを覚えていますね？ あの時、剣であるわたしに意識を集中して、断片的な剣技を引き出したはずです。それはもう身体に馴染んでいるでしょう？」

刃太はドウリンダナに頷いて一瞬だけ自分の手に視線を落とした。確かに覚えている。頭だけで記憶している訳ではなく、身体に剣技が染み込まれていた。まるで昔から剣技に精通していているようにあれ以降試してはいないが、今もドウリンダナをもう一度手ひとたひにすれば手足のように使いこなせるはずだ。そんな確信が刃太にはあった。

「あの時は緊急事態で断片的な剣技しか覚えられませんでした、静かな場所で今一度行えばもっと十分な知識が伝わってくるはずで

す。それはもちろん主の経験したものととして蓄積され、今よりも格段に戦闘能力が秀でることになるでしょう。どうしますか？」

「願ってもない。始められるなら今すぐにでも」

「承知しました。では、そうですね。今わたしがお借りしている部屋がうつつつけでしょう。家具の類もなく、黙思するにはちょうど良い」

鞆を自室に置いた刃太は、制服を着替えることもせず隣にある現在ドウリンダナへ貸している部屋へ足を踏み入れた。

——あれ？

扉を開けて部屋の中を見ると、刃太はしばし瞠目して動けなかった。別になんら変わった所のない一室だ。夕陽に照らされた室内にある物が、床に敷かれた布団以外に何も無い簡素なことを除いて、いや、ドウリンダナを泊める余った部屋なら当然なのだけど。

「どうかなされましたか？」

ドウリンダナの声で我に返って、刃太は誤魔化すような笑みを浮かべた。

「うっん、なんでもない。それより早く始めよう」

「……？ 分かりました。……では」

と、ドウリンダナの台詞を契機に彼女の肉体が眩い光まばゆを発した。眼前に小型の太陽でもあるかのような光量に刃太は目を細める。

その光も、変化さえも数瞬とかけずに終了した。

発光があつた部分には、既にドウリンダナの姿はなかった。視点

を下げて見ると、床に頑強にして繊細な美しい剣が横たわっていた。刃太が身を屈めて剣を掴めば、あの時と同じで頭に直接ドウリンダナの声が響いた。

『——後はこの間と同様です。掌に、わたしに精神を集中させてみてください。この剣に宿った剣技が流れ込んでくるはずです』

言われた通り、膝を突いたまま剣を正眼に構えて目を閉じる。暗闇に閉ざされた世界の中でゆっくりと肺に溜まった二酸化炭素を吐き出しつつ、力を掌に集めるようイメージする。

イメージが実感として身体に帰ってくるのが分かった。両手を始点になり神経が拡張されていくような感覚。掌が熱く火照り、ドウリンダナの記憶に接続された。

魔剣が自分の腕と同化している風に錯覚する。

繋がったドウリンダナから、腕を伝いそれが這い上がってきた。今まで微かに聴こえていた雑音が意識から排除される。様々な今現在必要でない感覚を無意識の内に選択し、封鎖する。後には自分の精神を落착ける自らの息遣い、心臓の鼓動、そして体内にじわりじわりと染み込んでゆくウィザードとしての戦闘技術だけが残っていた。

剣を使用した人外に対する時の有効な切り込み方。及び捌き方。

その中には四足歩行の大型生物の形を取ったエミュレイターに対するものから、人型のエミュレイターとの戦闘を考慮したものまであった。その総てを知り、研鑽し、修得しようとしたら何十年と掛かりそうな剣技を刃太はスポンジのように汲み取っていく。

紫稻妻と初めて対峙した時に得たものよりもさらに濃密な戦闘技法。それを我が物にしていく課程で、あの日得たものは本当に断片であったのだと理解した。

それからどれほどの時間が経ったのか。

『主、もう良いでしょう。これ以上精神を集中させて疲弊させれば、後に差し支えることになります』

頭に響くドウリンダナの言葉で、刃太は精神統一を止めて瞼を開けた。

いったいどれほどの時間が経過していたのだろう。窓の外にあった夕陽は西の空に沈み、部屋の中は真っ暗闇と化していた。

時間を確認しようにもここには時計がなく、携帯を確認するのも面倒だったので刃太は確認するのをすぐに放棄する。

「——っ、はあ……」

疲れて刃太は身を床に投げて天を仰いだ。

同時に投げ出された掌にある魔剣が、暗闇の中星のように瞬き人化を遂げる。

月明かりに照らされながら、西洋衣装のドウリンダナは刃太を見下ろして緩やかに笑った。

「お疲れ様です、主。気分はどうですか？」

今まで堅目の表情しか見たことがなかったドウリンダナの笑いで、頭に血が上っていくのが分かった。幸いに月明かりから刃太は死角なので紅くした顔を見られずに済んだ。

照れくさい感情を払拭するために、慌てて口を開いた。

「ま、まあ少し疲れたかな。でも、それと引き換えに沢山の知識が得られた。……全部って言うのは、無理だったけど」

ドウリンダナと繋がっていた間に身につけた剣技は結構な量であり、数時間前の自分より遥かに強くなったと断言できる。それでも

まだドウリンダナの内にある剣技を総て身につけられた訳ではない。その証拠に、刃太はドウリンダナに止められるまで接続し続けていたのだ。

最初はドウリンダナの内にある剣技を総て引き出すのかと勝手に思い込んでいたが、今となってはそんなことを考えていた自分がいかに愚かで身の程知らずだったか伺い知れる。

底が知れない。

ドウリンダナの中の情報には底が知れなかった。潜れど潜れど底は一瞬足りとも姿を現さない。むしろないとさえ思うほどに、それは膨大であった。

何せ今日修得した剣技の数々でさえ、総てを正確に覚えていられなかったりする。ほとんどは知識を持つて実行するものではなく、身体に染み付いているらしいので気にする必要はないようだ。それに身体が総てを記憶しているので、実質覚えていないことはない。ただ、それだけの量を覚えて尚ドウリンダナの戦闘術には余りあると言ふことだ。その内容量に改めて驚愕した。

「当たり前です。限定的な部分だけとは言え、知性ある者の記憶は膨大なのです。それを総てを得ようとするには相当の時間が必要です」

真剣な顔になったドウリンダナから諭す風に言われて、刃太は苦笑した。

「そつだよね……ちょっと甘く見てた」

外の暗さが何よりの証拠だった。

「それに、覚えただけでは剣術を扱い切れません。わたしから送られた情報は身体に何百何千とそれを行ったような経験則と共に定着

します。が、無論身体は実際にそれを行ったことはないのです。今は玄人が如き記憶などがあるだけで、身体は追隨出来る限りで動きます。だから主自身も修練しなければ完全に使いこなすことは出来ません」

中身が詰まっけていても、外は継ぎ接ぎだらけなのだとドウリンダナは言った。やはり、人生甘くはない。何もしないで剣術の極みを修得することは不可能なのだ。

それでも――

これで事を起こさなければならない。

時間はない。一刻の猶予も作ってやるわけにはいけない。猶予を作れば自分も楽になるが、それは相手も同じことなのだから。

そう内心決意を固める刃太の頭上で、ドウリンダナは真剣な顔を解いた。

「でも、今の主は間違いなく強くなっています。わたしが保証します。ですから、今のうちに気を緩めていてください。いざと言うときに困ります」

「うん……そうだね。少し休むよ」

お言葉に甘えて、自室のベットに横たわりに行こうと床から身体を起こす。

起こし、そんな暇などないことを悟った。

窓の向こうに広がる、深紅の空の存在で。

8：撃ち破る弾丸

「月、匣……っ!？」

刃太は身体に纏わりつく倦怠感をも忘れ飛び起きた。

「なんで――」

「主ッ!」

呆然とする刃太の前へドウリンダナが躍り出た。彼女の右肘から先が変質し硬質な刃になると、窓硝子を砕いて部屋にゴブリンが侵入するのは同時だった。

「キュイイイイイイッ!」

割れる硝子よりも甲高い鳴き声を発しながら、ゴブリンは手に持った棍棒を振るった。

小柄な身体からは想像できない速度いりよくを持つそれは、風切り音を上げて刃太を庇うドウリンダナへ迫る。正氣に戻った刃太が何か言う暇すらない瞬間、

「シッ」

ドウリンダナが右腕を振るい、眼前の敵を薙ぎ払った。刃は速度を乗せられた棍棒をバターのよう^にに容易く切り落とし、そのままゴブリンの身体を一刀の下に切り捨てた。

断末魔を上げることもなく異形の身体は地に接地することさえできずに消え去り、エミュレーターが死ぬと残すという紅い魔石だけ

がフローリングの上に転がった。

ドウリンダナは緊迫した表情を浮かべる顔だけで刃太を振り返る。

「怪我はありませんか、主」

「う、うん、平気……。ただなんでいきなり月匣が？」

「おそらく、長時間主と繋がっていたからでしょう。その時わたし達が発していた微細な魔力を感知して紫稲妻がここへ……」

抜かりました、とドウリンダナは吐き捨てた。よほど自分の失態が許せないのだろう。奥歯を強く噛み締めていた。

紫稲妻が現れたと言うことは匣をする手間が省けたことになる。

飛んで火に入る夏の虫だと言いたいのは山々だったが、今は待ち伏せの用意すらしていない。ひかりもトレイターさえもない現状は、完全に不意を突かれた形になる。

「どうすれば……！？」

新米ウィザード一人と魔剣一振りで魔王級とやり合うなど無茶にも程がある。しかも相手はゴブリンを召喚することができる。ゴブリン自体は対したことがないとはいえ、こちらはただでさえ紫稲妻に劣っている。戦力差は絶望的だ。

今すぐにも紫稲妻を斃せと訴えてくる自分をなんとか制して、どうやって逃げ出すか刃太は思考を巡らせる。

させる、が有効な手段は思い浮かばない。そもそも紫稲妻が展開した月匣からどうやって脱出するのか。何をしても、時間稼ぎが関の山と言ったところだろう。

いや、時間稼ぎをしていれば異常に気づいた他のウィザード達がなんとかしてくれるかもしれない。そのためには、なんとしても逃

げ続けなければ。

「ドウリンダナ逃げよう、時間稼ぎだ！ そうすれば助けが来るかもしれない。それまでなんとか逃げ続けて……」

「いえ」

残念そうにドウリンダナは首を横に振った。

「もう、来られてしまったようです」

刃太が驚く間もなく、納めていた物がなくなった窓枠が嵌った壁が無数の”髪の毛”に貫かれた。壁が剣山になったと思った次の瞬間、髪の毛が左右に疾った。シュレッダーに掛けられたように無数の残骸となって切り飛ばされた。

かつて壁だったものがバラバラと外に降り注ぎ、それと入れ替わりに巨大な入り口となったそこから人の形を持った魔物が室内に足を踏み入れた。

人の目を引き寄せる紫の長髪。魅惑的な肢体を覆うキチン質。身体中から漂う人ならざる者の風格とも言うべき威圧感。

忘れはしまい。

忘れもしない。

刃太をドウリンダナに引き合わせた元凶。刃太がウィザードになることになった原因。そして刃太の戦意を殺意を掻き立てる張本人。

——紫稲妻。

「な……っ」

刃太は絶句した。もう絶望の二乗だ。目の前に紫稲妻が現れた。

この状況で彼奴の速度から逃げる術はない。背中を見せたら次の瞬間には物言わぬ屍に成り下がる――。

「プラー、ナ……寄越せ」

プラーナ。奈々子が失ってしまった魂片^{こんぺん}。

ドウリンダナを狙っているのは、彼女に詰まった大量のプラーナが欲しいからだろう。エミユレイターはそれを得たいが為にこちら側に侵入するのだから。

ウィザードとなつてゐる刃太にも、人より少し多くプラーナは内包されている。そこらにいる人間を襲つて奪うより、刃太を狙った方が効率は良いだろう。

なのに、

なんで、奈々子を狙つたのか。

なにも、関係なんてなかった。ただの人間だった。ウィザードでもなんでもない。ちょっと童顔なだけの女子高生だった。

理不尽だと、不条理だと刃太の怒りが訴える。

怖かった。言葉を失つてしまうほど恐ろしいと思っていた。目の前の人外は戦つてはならないものだとなつていた。それでも抑えていた憤りは、諸悪を直視した瞬間に炸裂した。

「ドウリンダナ、魔剣に戻れ！ そっちの方が有利だ！」

声を張り上げる。

眼前の女性は一刹那だけ迷いを見せて、しかし刃太の命令に従つた。人間の姿より本来の姿の方が発揮できる力は増すからだ。

ストロボをたいたような閃光と共にドウリンダナは質量保存の法則という”常識”を無視して魔剣の形に回帰した。

本日二度目の柄の感触に気を引き締めて、刃太は紫稲妻を睨みつけた。

紫稻妻は感情を写さない硝子玉のような瞳で刃太を見ていた。何もしないのは警戒しているのか、もしくは余裕の現れか。まるで能面かと思う無表情からでは何も読み取れなかった。

だが仕掛けてこないのなら、

「はアツ！」

先手必勝と刃太は打ち込んだ。紫稻妻との距離を埋めるには一足あれば充分。

今現在刃太がこのタイミングで放てるもつとも効果的な斬撃を繰り出した。その一撃は数日前のものより数段上をいく鋭さ。

今まで動かなかった紫稻妻が、硬質化させた頭髮で魔剣を受け止める。金属質な音色を奏でるだけで刃先は髪の本さえも切り裂けない。

剣を振るった体勢の刃太に、予備動作も無く紫稻妻は拳を突き出す。溜めもない空拳は、それでも鉄を砕きかねない威力を孕んでいた。

くつと声を洩らして刃太は横に跳び間一髪で躲す。遅れて拳に触れた箇所が裂けた。拳の一部も硬くなっているのか。運悪く急所に一発でも当たれば必殺になる可能性がある。知らず冷や汗が流れた。

「まだまだ——ッ！」

魔剣を中段で薙ぎ払うが、紫稻妻はそれも紫色の髪で防いでしま

う。
悉く攻撃が防御され通らない事で刃太の心に焦りが生まれた。その僅かな隙を紫稻妻は見逃さず、刃太に強烈な蹴りを放った。

それに気づいて刃太は飛び退こうとするが、遅い。か細い女性的な足から想像も出来ない破壊力が身体に叩き込まれた。

刃太は勢い良く吹き飛び反対側の壁を粉碎して廊下に弾き出された。

衝撃に肺の酸素が強制的に吐き出される。

身体が痛みに悲鳴を発するが、魔剣を床に突き立てどうにか起き上がった。無様にのた打ち回っていたら、二度と立ち上がれない状況になってしまったことに本能で気づいてしまっていた。

予想を裏付けるように、紫稲妻は雷が如く速さで刃太に迫ってきた。

このままでは一方的な状況に持ち込まれると刃太は手すりを飛び越え、一気に階下へと飛び降りる。一瞬前まで刃太がいた空間は紫稲妻の髪先で貫かれていた。あそこに止まっていたら刃太は蜂の巣になっていたことだろう。

一階に降りても家内に人気はない。月匣は月衣を持つ者だけが存在できる、現実とは別にある虚像の世界だからだ。

刃太は廊下を駆けて玄関へ。鍵を開ける暇などなく魔剣を振るい鉄扉を切り裂いた。本来の用途を失った扉を蹴り飛ばし、外に飛び出す。

見慣れた風景なのに紅い月に照らされたそれらからは、異世界に迷い込んだような錯覚を持たせられる。

背後で落ちるような異音を聴くと、身体に鞭を打って家の敷地から跳び出て月下の街を全速力で走り出した。

——目的は時間稼ぎなんだ。

もう見失うなと自分に言い聞かせた。一度は炸裂した思考も逃げられる状況になったことで冷静さを幾分か取り戻す。まともに戦って勝てる相手ではないことを再認識した、と言うこともあるだろう。

「はあ、はあ……っ！ ドウリンダナ、ウィザードが来そうとか分かる！？」

『いえ、残念ながら月匣の外の事は分かりかねます』

頭に響くドウリンダナの言葉に刃太は落胆すると携帯で連絡をとれるか試してみたが、圏外になっていた。相変わらず事態は好転しない。孤立したままだ。もしかしたら無援かもしれない。

「畜生……！」

仇を前にして逃げることに出来ない無力な自分と、事が良い方向に転がる兆しも見えないことに苛立ちから弱音がこぼれ落ちた。刃太の倍以上の速さで、稲妻は背中に向かって疾走している。

*

上代家を中心に月匣が展開したことにひかりは気づいたのは、陽が既に落ち刃太との予定の時刻まで一時間を切った時のことだった。事前の打ち合わせなどもあるし、迎えに行こうとしていた矢先のことである。

「月匣……それに、これは紫稲妻！？ 予定時間はまだ……っ」

刃太が先走ってしまったのかとも考えたが、上代家の敷地内かその周辺の辺りから月匣は展開していた。いくらなんでも近すぎる。圀になって紫稲妻をおびき寄せるなら、家からもっと離れるものではないか。

ここから推測すると、予期せぬ襲撃を受けたと考えるのが妥当なところだろう。

「毎回後手に回りますね、私は……！」

そう呟いて、ひかりは月匣に向かって足を動かした。不幸中の幸

いと言っべきか、月匣の発生地点まで余り離れていなかった。

そのため、ものの数分で月匣の外周部に到着した。ただ、そこは紅く染まってもいなければエミューレイターがいるわけでもない。なんの変哲もない住宅が建ち並ぶ街の一角だ。

でも”それは確かにここにあった”。

目に見える異常すら見あたらないが、ワイザードならばここに違和感を感じ、月匣があることを辛うじて知覚できた。

知覚は出来たが、それだけだった。

月匣は結界であり、隔離された空間である。感じる事が限界で、中に入ることも外へ脱け出すこともできない。

駆けつけてはみたが、月匣に干渉することはひかりには出来なかった。もしかしたら一部のワイザードならば月匣を破れるかもしれないが、残念ながらひかりはその類に含まれていない。

「歯痒いですね……」

何かが起こっていることは分かるのに、こちらから手出しをすることが出来ない状況はひかりの心を不安定に揺らした。

どうする。

どうにかして月匣内に入り込む余地はないか。

外部から刃太を援護することは可能だろうか。

幾つもの案が浮かぶが、すぐに無理だと頭を振る。そうやって次々と策を考え続けて分かったことと言えば、自分では月匣内に入ることはどうやっても出来ないと言ったことだった。

こうしている間にも刻一刻と刃太に危機が迫っているだろう。刃太とドウリンダナでは善戦しても、そう長くは持たない。

ひかりが途方に暮れていると、背後から独り言のような声がした。

「まったく……厄介なことになっているな」

「あなたは……トレイター」

振り返ると、漆黒の外套を羽織っていない私服姿——ひかりは初めて見る——のトレイターがそこにいた。

「月匣か……中にはあいつと紫稻妻が？」

「……はい。多分その通りです」

ひかりは肩を落とす。トレイターが現れてくれたのは心強かったが、落胆せざる終えなかった。例えば凄腕だと言っても、落とし子に分類されるトレイターには月匣をどうこうすることはできない。

もうひかりに出来ることは、刃太が紫稻妻に破れるのをみすみす待っているだけとなる。

そう諦めを滲ませて、ひかりは月匣があるはずの空間を見つめていた。

「——備えあれば憂いなし、か」

トレイターは腕を月衣に突っ込むと、虚空から彼のトレードマークとも言える黒の外套を引き出した。

ぶわりと裾を広げて自らの姿を覆い隠しながら、トレイターは外套を羽織った。気づけば外套の下は数瞬前まで着ていた私服ではなく、戦闘用の特殊な物になっていた。前の戦闘時にも着用していた記憶がある。

戦闘スタイルに移行したトレイターはさらに月衣から箒、フォーリンエンパイアを取り出した。

「今更、なにを……」

もしかしたら月匣を解除して紫稻妻が現れた時に、すぐさま攻撃を加えられるようにとの準備だろうか。その時、紫稻妻は刃太を始末して手に入れたドウリンダナを手に行っているはずだ。刃太の返り血を浴びて彼の魔剣であるドウリンダナを持つ紫稻妻を想像して、ひかりは身震いをした。

「おい、お前も箒を出しておけ」

「……はい」

トレイターがフォールンエンパイアに弾丸を込めている横で、ひかりは暗い表情のままウィザーズワンドを月衣から抜き出した。ぐつとひかりが杖を握り締めると、トレイターは前方に銃身に向けて引き金に指を掛け発射態勢に入り――

「え？　トレイターさ――」

弾丸が打ち出された。

本来なら遙か先に着弾するはずの弾丸は、されど予想を裏切り空中に激突した。

その不可思議な現象にひかりは目を見開く。

何もないはずの空と弾丸がバチバチと電光を放った。

そして、競り負けた空間が弾丸に撃ち抜かれる。

弾ける音と共にさっきまでは只の道であり空白だったそこが、軟体動物のように歪んだ。その歪みは徐々に開いていき、人一人分のサイズにまで拡張される。

あまりの出来事にひかりはしばらく立ち尽くしてしまった。なんだろう、この歪みは。こんなものは聴いたことがない。トレイターはといったい何をしたというのか。

何もないはずの空間を撃ち抜くなんて、と思ったと同時に、そこは

あるものの外周部であることに思い至った。

歪みの中に紅い風景を見つけて、今度こそひかりは声を上げた。

「月匣の中!？」

驚くひかりを余所にトレイターは次弾をフォーリンエンパイアに装填する。

「これはすぐに消える。とっとと乗り込むぞ」

「ま、待ってください! これはいったいなんなんですか?」

困惑の様子を浮かべるひかりを一瞥して、トレイターは適当に答えを見繕う。

「――結界徹甲弾。絶滅社製の特殊弾丸だ。……最近出来た完成品を無理やりパクって来たんだが、無理した甲斐はあったな」

何気なく凄いことを言わなかったと思った時には、もう説明は済んだとばかりにトレイターは歪みに飛び込んでいた。注視すれば、歪みが少しずつ縮小していることが分かった。

「わ、私も……っ!」

異様な歪みに僅かばかり躊躇しながらも、ひかりはそこに飛び込んだ。

8：撃ち破る弾丸（後書き）

結界徹甲弾は、原作知らない人にはなんだこの便利弾丸とか言われそうw刹那です。なんだ便利弾丸って。

一応言っておくと、結界徹甲弾はナイトウィザードリプレイ紅き月の巫女で静かなる緋の娘が使ってる物です。これには三発登場しましたね。内一発はふはt（ry

あれの完成版をトレイターがパクってきたわけですね。

完結まで後僅か。最低でも来月には終わりそうです。というかもうクライマックス間近なので。

9：辿り着く魔術師

ひかりが遅れて歪みに飛び込んだ先、そこは紅い月が昇る真正正銘の月匣の中だった。

本当に入れた、とひかりは感嘆する。しかし、そんな悠長に耽つていられる状況ではないと否応無しに見せつけるものがあつた。それを見つけた時、ひかりはあまりの”量”に顔をひきつらせた。

「は、ははは……」

一言で表すなら、敵。

一目見ただけで数えるのを投げ出したくなるほどの、大量に^{ひし}轟めくゴブリンの群れ。

ひかりより先に入ったトレイターがフォールンエンパイアを構えていた。

「どうやっても俺達を行かせたくないらしい。……とつと切り抜けるぞ」

背後で歪みが消える。月匣からの逃げ場はなくなった。もうここを突破する以外に選択肢はない。

「——はいっ」

自分に活を入れるように声を上げて、ひかりは箒を敵に突きつける。

先頭のゴ布林が甲高い声で咆吼を上げ、戦鐘^{ゴンゲ}は打ち鳴らされた。そのゴ布林が戦陣を切つて棍棒を揺らしながら突撃する。雪崩のように他のゴ布林も後を追隨した。

質量を持つて威圧してくる数に怯まず、ひかりは魔法を放つ。

「ニードルシュートツ！」

針状に凝固した光がゴブリンの一団を撃ち抜く。先頭の数体は斃れるが集団が怯えて軍団が瓦解する様子は微塵もない。

真横からひかりにゴブリンが迫った。叩きつけようとしてくる棍棒はたかが鈍器と侮れるものではない。

ひかりは片手をゴブリンに向けて突き出す。月衣から現れた籠手のような物体がひかりの腕に装着された。

「アクレイルツ」

瞬間、掌に空気中から集められた水分が収縮され、弾丸さながら撃ち放たれる。

水弾はゴブリンの身体に命中すると軽々吹き飛ばした。

魔装。

魔法を唱えて撃ち出すより速く、瞬時に攻撃出来る優れものだ。常に装着者の身体へ干渉してくるせいで僅かな副作用があるものの、それを差し引いても有用である。

トレイターもフォーレンエンパイアから放たれる強力な弾丸で地面ごとゴブリンを穿ち、接近してきた個体は剣としての機能で斬り捨てた。

多少の攻撃はモノともせず敵を屠る姿は頼もしく、畏怖の感情をひかりに抱かせた。伊達に魔王を斃してはいない。

流石に数で押してはいても諸ともしないトレイターにゴブリンの士気が削がれたのか、徐々に勢いは衰えてきている。

ひかりは一時も^{いつとき}気を抜かずに魔法を放ち続けた。

闇の刃で敵を薙ぎ払い、光の針が身体を貫き、水の凶弾で撃ち抜く。

誤って接近されたゴブリンは箒で払いのけ近距離でアクレイルを放ち息の根を止める。

そんな戦闘を続けても膨大なゴブリンは一向に数を減らす予兆を見せない。まったく大した数だった。最初より確実に減っているはずなのに、それを頭が理解出来ないほどのゴブリンがいた。

きつとこの数日で今まで溜めたプラーナなども使って、生み出し続けていたのだろう。上代家襲撃は紫稻妻がドウリンダナ回収に失敗した時から考えていた作戦のようだ。なら奈々子のプラーナを喰らったのは、こいつらを産み出すための肥料とするためか。

奈々子と面識がさほどあるわけではないひかりでも、それには怒りを覚えた。

——その感情に気を取られたのが命取り。

ただでさえ今まで同時に相手にしたことがない程の数のゴブリンと戦闘していて疲労が身体に溜まっていると言うのに、そんな危険の真っ只中で余計な思考に気を向けたら隙が生まれるのは必然と言うものだった。

ゴブリンがひかりに肉薄した。はっとそれに気づいて魔法撃とうとするが、棍棒を振るわれる方が速かった。

ウィザースワンドに棍棒が打ち付けられ、箒が宙を舞う。衝撃で回転しながら、ひかりの後ろに突き刺さる。

「しま——っ」

殺られる、と寒気を覚えた。

「世話が焼ける！」

ひかりを突き飛ばし、トレイターがカバリングに入った。

しかしひかりを突き飛ばしたせいでフォールンエンパイアを使う余裕がなかったのか、まともにゴブリンの棍棒がトレイターの身体

に打ち込まれた。

「グウ……」

鈍い打撃音が響きトレイターの身体が揺れる。斃れる、と思いきや踏みとどまり、フォールンエンパイアでゴブリンを切り裂いた。

「トレイターさん！」

「いいから速く箒を拾え！　これ位では倒れんッ」

慌てて箒を引き抜くとひかりは津波のように押し寄せるゴブリンに応戦するトレイターに駆け寄った。

「今回復を……ヒール！」

癒しの力がトレイターの患部に働き、傷を癒やした。それでも完治には至らない。ひかりは魔術師でも、回復魔法はどちらかと言うと得意な方ではないからだ。回復魔法が得意なら、この位の傷は完治させられただろう。

もう一度回復魔法を掛けようとするひかりを、トレイターは片手を振って遮った。

「もういい。楽になった。お前も攻撃に専念しろ」

でも、と食い下がろうとしたがゴブリンは物凄い勢いで迫ってくる。好機とも思っているのだろう。いくら強いと言っても一介のウィザードであるトレイターが、しかも手負いで一人相手にするのは荷が重いかもしれない。

回復魔法を発動する手を止めて、ひかりも攻撃するために魔法を

唱えた。

ゴブリンはトレイターの奮戦もあり続々と減っていく。そろそろ数にも限界が見えてきた。が、こちらでも消耗が激しい。このままではどちらが先に力尽きるか分からない。

それに結構なタイムロスだ。まだ保たせているようだったが、これ以上は刃太も危ない。

なのに未だ終わらない戦闘にひかりは焦燥を募らせた。

「このままでは……！」

悲鳴にも聴こえるそれに、トレイターは戦いの手を止めずにこう言った。

「……なら、俺がこの場を受け持とう。お前は先に行け」

抑揚なく言われた言葉に、しばしひかりは我が耳を疑った。

「先に……って、無理ですよ！　トレイターさん一人じゃ！　それにこれだけの数のゴブリンから抜け出すなんて……」

「活路は俺が開いてやる。それなら良いだろう」

「そんな！」

「一人の方が戦い易いんだよ！　邪魔だ、つべこべ言わずにとつとと言ってこいッ！」

トレイターに怒鳴りつけられて、ひかりは首をすくめた。冷静そうな青年が怒るのは少し意外だった。

「いいか、今から俺がゴブリンの気を引いてやる。その際に頭上から奴らを飛び越える。いいな!？」

「……ッ、分かり、ました!」

「よし。カウント……三、二、一……」

フォールンエンパイアを振りかぶり、カウントは零を刻む。

「——惑乱しろッ!」

振るった。

眼前のゴブリンをフォールンエンパイアは一刀両断にした。斬られたのはそれ一体だけだった。

だが、

——惑乱は伝播する。

フォールンエンパイアから闇が如き漆黒がゴブリンを覆い、襲った。視覚できるそれは、ただし物理的ではなく精神的に作用する。トレイターの魂を締め付けていた侵魔の気配がゴブリンに干渉していた。奴らも闇の住民である。並大抵の闇ではたじろがない。しかし、これは高位の落とし子が発するとびきり濃密な気配だった。びしりと集団で金縛りにあったかのように、ゴブリンは皆一様に動きを止めた。

その頭上を合図と同時に飛び出したひかりは通過していく。阻むものは何もない。

一〇にも満たない時間、ひかりの孤影が遠くなった頃、ゴブリンを拘束していたモノは消滅した。今まで停止していたエミュレイターは自由を取り戻すなり、トレイターを睨みつける。

大量の視線を受けて、トレイターはなお平然としていた。

「……お前ら全員、俺が相手をしてやる。時間を掛けるのは面倒だからな。手早く片を付けるぞ――」

血が流れる口の端を吊り上げて、トレイターは笑みを浮かべた。
ゴブリンは容赦なく、トレイターに殺到する。

*

ヒュウと空を裂き、無数の髪が突き出され、あるいは斬るために薙がれる。

それらをギリギリで捌き切ると、ガードの甘い部分に手刀や蹴りが打たれた。幾つかかすり、もしくは魔剣を受けて吹き飛ばされながらも戦闘は続いていた。

紫稲妻は髪や体術などを使い多彩なバリエーションで刃太を襲い、追い詰める。刃太はなんとか防戦一方に陥りながらも、捌いて生き長らえていた。

「くそ……うわあっ！」

一度追いつかれたら紫稲妻から逃れる術はない。速さが違う。もう意表を突いて逃げると言うことも無理だ。必然的に刃太は紫稲妻と切り結ぶことになる。

切り結ぶ、と言ってもそれは反撃を許さない一方通行の暴力。下手に攻撃しようものなら、紫稲妻の一撃受けて大打撃を被ることになる。故にこれは戦いではなく、リンチと言っても良かった。

無言で無表情に機械と錯覚する無慈悲さで紫稲妻は攻撃の手を緩めない。

何合も魔剣と紫稲妻は交錯し、火花を散らす。

髪が一房、防御の間を縫って刃太の顔に突き出される。頭を傾けて辛うじて避けると、頬に鮮血の文字が刻まれた。

バックステップで距離を広げるが、瞬き一つの間を埋めるのが精々で再度距離を詰められ魔手が襲いくる。

『主、持ちこたえてください！ 何度も攻撃していれば油断で紫稲妻も隙を見せることがあるかもしれません。そうならば逆転の可能性も無きにしも非ずですッ』

ドウリンダナも焦っているのだろう、少し言葉が荒かった。

「分かつてる！」

そうは言ったものの、刃太はこの精密機械のようなエミュレイターが油断なんて俗な感情を抱くのか甚だ疑問であつた。はなはそんな巨大隕石が摩擦熱で燃え尽きず地表に激突するほど微かな可能性を目にするより、刃太が疲れて隙を作る方が遥かに速く思えた。力を込めて魔剣を振るい、硬化した腕を弾き飛ばす。

「——つと！？」

疲労が身体に蓄積していたせいだろう。今まで手足のように扱っていた魔剣を振った拍子、重さに引きずられて身体が傾いた。

「なあ——ッ！？」

言ったそばからの失態。背中が瞬時に粟立つ。

傾いた視界で紫稲妻を見れば、腰に引いた手刀を突き出さんとしている真つ最中だった。

身体を捻って躲そうとするが、腕も目も正確に刃太を捉えていた。手が霞むほどの速さで手刀が突き出される。

刃太到達まで時間にして小数点以下になった瞬間、

——スパアアン。

上空から飛来した水弾に撃たれ、紫稲妻はバランスを崩した。だがすぐに体勢を立て直して紫稲妻は刃太と距離をとる。同じく立て直した刃太は、水弾の主を見上げた。

「花川さんッ！」

箒から降りて、ひかりはスカートを押さえながら刃太の横に着地した。

「すみせんつ、遅れました。……良かった、刃太くんが無事で」

安堵でほうとひかりは息を吐いた。

「う、うん、危なかったけど——オッ!？」

話に紫稲妻が割り込み、手刀を突き出してきた。ひかりと合流出来て安心していたが、安穩と話している暇など紫稲妻が目の前にいる限らないのだ。

魔剣で腕を払おうとする刃太の腕を掴み、ひかりは再び飛翔した。高度はみるみる上がり、五、六階建てのマンションと同じ位置まで到達する。紫稲妻も地面も遙か眼下だ。

「ここまで来れば、少しは時間稼ぎになるでしょう」

一先ずの危機からは遠ざかれたからか、今度こそ二人は緊張から解かれた。

刃太は脱力して筋肉を弛緩させる。

「助かったあ」

長時間緊張の糸を張っていたせいか、それを緩めると途端に疲れが押し寄せてくる。そうやって安全を甘受していると、ドウリンダナが控えめに――控えめと言っても脳に直接語りかけてくるので、控えめも何もないが――呼び掛けてきた。

『……主』

「んん、何、ドウリンダナ？」

吹き付ける爽やかな風に髪を揺らしながら答え――

――風？

『その、ちゃんと掴まってないと落ちますよ？』

恐る恐る、刃太は下を見た。無防備に垂れた足は当たり前と地面に着かない。刃太は今、腕をひかりに掴まれてぶら下がっているだけだった。

数瞬の沈黙。

「――っわあああああああ！」

驚いて悲鳴を上げて足をジタバタとタイミングの合わない振り子かと思う動作で振るった。

「ちょ、刃太くん危ないです動かないで！ 早く箒に掴まって！」

バランスを崩して危うく落ちそうになりながら、ひかりは刃太に箒を掴ませて上半身を引き上げる。

刃太は心臓を高ぶらせて息を切らした。月衣を展開してる限りこ

の高さから落ちても死ぬことはないと分かっている、やはり怖いものは怖い。それに下には紫稻妻がいるのだ。落ちたら一巻の終わりである。

眼下にいる紫稻妻を確認すると、相手は刃太を見上げていた。どうやら空を飛べないらしい。

「飛べない、みたいですね？」

紫稻妻を見下ろしながら意外そうに言った。

「うん。まあ飛べなくて助かったよ。……ところで花川さん、どうやって月匣の中に来たの？」

「ああ、それはですね——」

ひかりがこの月匣に入るまでのことを掻い摘んで教えてもらった。外でトレイターと鉢合わせて、空間に穴を空けて月匣に入ったこと。そこで無数のゴブリンと遭遇し戦闘になり、トレイターがなんとか先に行かせてくれたこと、など。

それを言い終わって、ひかりは目を伏せた。釣られて刃太も沈痛な面持ちになる。

「それは……心配、だよな」

「はい……。でも、お陰で刃太くんを助けられました。後は紫稻妻をなんとかして——」

ここから逃げ出せば、と続くはずだったのだらう。箒に乗る二人の頭上に陰が差した。紅い月明かりを何かが遮っていた。

それを自覚して、強烈な悪寒が全身に駆け巡った。

『主ッ!』

ドウリンダナの声に、刃太が空を見上げた。

そこには、長髪を靡かせながら足を振り上げた紫稻妻の姿があった。

「——花川さんッ!」

脳内でスイッチが切り替わり、緩んでいた頭が引き締まった。とつさに刃太はひかりの服を掴み、下に思いつきり引いた。

「きゃっ」

姿勢を崩したひかりは箒ごと高度を落とす。しかし、掴まっていただけの刃太は宙に放り出された。

「喰らうか!」

身を捻り、無理な体勢で魔剣を振るう。

紫稻妻の回し蹴りと魔剣が激突した。

迎撃出来たと安心も束の間、刃太はもう一方の足で腹部を蹴り抜かれる。

「グッ——」

蹴りの力と重力で隕石のように落下し、刃太は地面に叩きつけられた。コンクリートに罅が入り、クレーター状に陥没する。身体に激痛が走り抜け、意識が飛びそうになる。

「くう、はアッ……」

酸素と血塊を吐き出して、刃太は痛みにも悶えた。

『無事ですか、主！？』

ドウリンダナにすぐ返事をする力は、刃太にはなかった。

空にいる紫稲妻が自由落下を始める。刃太にトドメを刺そうと手刀を構えていた。

ヤバいと危機感が最高潮に高まる。血反吐を吐きながら地面を転がった。

入れ替わりに紫稲妻の手刀が地面にたたき込まれた。

粉塵が舞い、クレーターがさらに深く穿たれる。

細めた視界で、刃太は六階建てのマンションを見つけた。先程まで刃太達がいた位置に近い。壁が等間隔に砕けていて、それが紫稲妻の駆け上がった跡だと言うことが分かった。舞い上がる粉塵の中心へ光の針が降り注ぐ。

「刃太くん！」

頭上からひかりの聲がして、反射的に手を伸ばした。その手をひかりが掴んで、低空飛行に入った。

「凄い傷……今治癒を——キュアウォーター」

清流で洗われるような清々しい感覚が刃太の中を通り抜けた。苦しかった痛みも規模を小さくしていく。

「はあっ、ありがとう……助かった」

痛みが退いて魔剣を強く握り直し、粉塵を見た。

舞っていた煙が晴れたそこには、ほぼ無傷の紫稲妻が無表情で存在した。

油断し過ぎたと刃太は自分を罵った。相手はそんな甘い相手じゃないと分かっていたいなかったのかと。空に上がっても安心などせず、気を引き締めていなければならなかったのだ。

紫稲妻がふたりに目を向け、刃太と目があつた。

何故か心臓を鷲掴みにされたような気持ち悪さが胸に込み上げてくる。

紫稲妻はそんな様子に目を細めて、

「……フォートレス」

月匣が、変質した。

今までの街の風景が消え去り、紅い月の下で違うものに置き換わっていく。

それは雑然と物が放置されたような、落ち着きのないもの。統一性のない、まるで鞆をひっくり返して出て来たものを放り投げていたら出来たと言えは納得するような、そんな場所。

「なんだ、これ……」

刃太は茫然と月匣の変質を見つめていた。

「フォートレスです」

飛行を止めて刃太を地面に下ろし、ひかりも地に足を着けウィザーズワンドを構える。

「月匣と同じですよ。ただ、使用者の心象風景を投影して迷路のよ

うになったものです。……相手も、どうやら本気みたいです」

奇妙な想いにとられながら、刃太も改めて魔剣^{ドゥリンダナ}を構えた。

紫稻妻はゆつくりと地を踏みしめてふたりに歩みよっていく。だが突如速度を上げ、稲妻が如く疾駆した。

生唾を飲み込み、^{ラストバトル}最終決戦を前に声を張り上げる。

「行くぞ、ドゥリンダナッ」

『了解です、主！』

自らを鼓舞して、刃太も紫稻妻に向け疾走した。

10：切り開く魔剣使い

魔剣と紫稻妻が交差する。

耳朵を鋭く刺激する激突音が連鎖的に生まれ刹那の紅い花を宙に咲かせた。

前と変わらぬ剣戟に、既視観を覚えさせられる。唯一違うことと言えば、“一対一”の時と違い応戦することも出来ていると言った。

それに今は、もう一人頼もしい魔術師がいた。

刃太が後ろに跳ぶと、それを紫稻妻が追う。

「フォース、ブレイド！」

僅かな間を狙って漆黒の刃が打ち出された。

刃の接近に気づき紫稻妻は腕を振るい、漆黒を叩き落とす。攻撃を払うと言うワンアクションに必要な行動を起こした紫稻妻の懐へ刃太がすかさず飛び込む。

「せいアッ」

逆袈裟に剣を振るった。相手が常識外存在でなければ間違いない直撃コース。

風を切る刃を、紫稻妻は鋼より硬く変化した髪で受け止めた。すかさずカウンターで顎を狙い足を跳ね上げる。

刃太が身を捻って間一髪爪先から逃れると、その頭上で大鎌のように返す刀で首を刈ろうと足を引き戻した。

そこでひかりが介入する。掌から発射された水弾が紫稻妻の足に命中し軌道を逸らした。

そこに、刃太が最速のタイミングで踏み込む。

不安定な姿勢の紫稲妻に魔剣を振るうのではなく点として突き出した。

力強く突かれた魔剣に、紫稲妻は大量の髪を螺旋状に絡みつかせて運動エネルギーを受け止める。そのまま髪でぎっちり魔剣を固定し、拘束した。

「ドウリンダナ！」

武器を捕らえられた刃太に、紫稲妻は貫手を槍のように突き出した。その攻撃は素手で防げるような代物ではない。

『させはしない！』

瞬間、魔剣状態のドウリンダナが髪の間から閃光をほとばしらせた。同時に髪が捉えていたはずの魔剣が忽然と姿を消した。

否、消えはしない。ただ別のものに置き換わっただけだ。

ドウリンダナは人間状態に変化する際髪の中から抜け出る。

人間状態になった時には右腕の剣化を済ませ、それで紫稲妻の貫手を受け止めた。

ドウリンダナと罅迫り合う紫稲妻に、ひかりは漆黒の処刑刀を飛ばした。素早い動きで紫稲妻は跳び避ける。それをもってドウリンダナは紫稲妻と分断された。

均衡から解放されたドウリンダナの身体は、また魔剣の状態へと戻る。それを宙で刃太が受け止めると、脳内で声が反響した。

『あの自由自在に稼働する髪をどうにかしなければ。あれはどうにも厄介です』

まったくもって同意見。紫稲妻のトレードマークたるあの思うがままに動作、硬化する機能はどうにも目障りであった。攻撃はほと

んどあれで防がれてしまっている。

攻撃に使えば無限の刃や槍となり、防御に使えば全方位網羅の全身城壁。

しかも同時に体術を扱い、相乗効果で厄介さが増している。手数は四肢を持つ生物の倍近い多さ。紫稻妻の猛攻を総て受けきるには腕を後二本ほど生やす必要があるだろう。

「うん、あれを使えなく出来ないかな……」

『その方法があります』

「そうなの？」

『ええ。紫稻妻の攻守の要はあれです。単純にあれさえも受け止めきれない攻撃を繰り返せば、その両方を同時に潰すことができます』

「でもそれが難しいんだろう？」

簡単に切ろうと思ってそれが出来ていたら、こんなにも苦労はさせられてはいない。

『通常の一撃ならば、無理です。ですが、”魔器解放”をすればわたしの力を限定的に上昇させ一撃に乗せられます』

「魔器解放？——つと、花川さん！」

名前にぴんと来るものの、援護が邪魔と判断したのか後方のひかりに向かおうとしている紫稻妻の存在で、深く考えることも出来ずに足を動かした。身体を割り込ませて紫稻妻の前に立ちふさがる。

身体に覚えさせた知識で魔剣を振るい、紫稻妻を足止めする。白

兵戦が苦手な魔術師に接近を許してはならない。関節や筋肉が悲鳴を上げながらも構わず全力で斬撃を打ち込む――。

ひかりの魔法攻撃による支援を受けながら戦う刃太が返答出来ないのを悟り、ドウリンダナは主が疑問に思っているだろうことを説明する。

『魔器解放の情報は主の記憶にも吸収されているかと思います。この能力は魔器、つまりとてつもない力の限定的に解放するものです。現状、主が使える攻撃で最も威力が高い』

確かに、記憶の片隅にだが魔器解放についての情報があった。内容はドウリンダナが話したものと遜色はない。

剣を振るい原始的な戦いばかりを繰り返していたから喪失していたが、刃太もウィザードである。ひかりが使用する魔法のような常識外の力を使用することができるのだ。

基本遠距離攻撃に終始する魔法とは違う、白兵戦を担うウィザードの強力な必殺技。

刃太の場合、それは魔器解放だった。

『やり方は分かっているはずです。……後は、思い切り叩きつけてください』

やることは単純にして明快。勝機を掴むため成すべきことは定まった。

そんな時、刃太は自分の内から湧き上がり、巨大な水流となる力を感じた。違和感も感じはせず、刃太はそれを紫稲妻に放出する。

「――ウォータープレッシャー！」

片腕を引き絞り、拳を突き出す。そこから大量の水が柱となり、

紫稻妻を強襲した。

「……………！」

近距離からの水流を避けること叶わず、紫稻妻は押し飛ばされた。ぎやりぎやりと地面を足が引つ掻いても水の勢いは衰えることなくメートルも刃太との距離は離れていく。

その途中、紫稻妻は重力弾ヴォーテックスを作り出し水流にぶち当てた。水柱は重力に押しつぶされてその力を失う。

四散する水の中立ち直った紫稻妻は、駆けてくる刃太の姿を目撃した。

「魔器、解放ッ！」

距離は既に目と鼻の先。お互いの間合い。

刃太の言葉に呼応して魔剣ドゥリンダナの鏢に刻まれるルーン文字が輝いた。刀身にその輝きが乗り移り神々しく荘厳な光の衣を羽織い、眼前の敵を断つ剣となる。

「それでも、喰らえええ——ッ」

攻撃不能。紫稻妻は硬質化された総ての長髪を前面に展開する。防御を固めて自身最大の守りで攻撃を迎え、

——閃。

魔剣が、振り抜かれた。

紫稻妻と刃太が交錯する。

刃太の手には痺れを含む痛みが残響のように残っていた。

紫稻妻は、未だ健在。

特筆すべき傷もなく、刃太の全力の力を受けてなおそこに存在した。

肉体に、傷はない。

だが、

紫稻妻の長髪が花びらのような様相で地面に落ちた。それも一本ではない。舞い落ちるそれは数えることも出来ぬほど、無数に落ちていった。

紫稻妻の長髪は、今や短髪に切りそろえられていた。

「やりましたっ！」

ひかりが箒を揺らして歓声を上げる。

鉄壁の防御は刃太の一撃で崩れ去った。

ガッツポーズをしたかったが、刃太は喜ぶのはまだ早いと緒を締め直す。まだ攻撃力と防御能力を低下させただけで、斃したわけではない。

刃太が踏み込み互いに背を向けるようになっていた体勢から、後ろを振り返り様に薙ぎ払う。

紫稻妻は背を向けたまま、その斬撃を硬くなった手で受け止めた。刀身を掴まれる前に後方へ飛び退く。油断なく剣を構えて、背中を見据える。

やけにゆったりした動作で——いや、刃太の脳が過剰に働き世界がスローモーションに見えているのだろう——紫稻妻は振り返った。目が合った時と、まったく同じ感覚。

心臓が掴まれて押し潰されようとしていた。無論、ただの比喩であるのに——紫稻妻を見た瞬間、本当に胸が潰れると錯覚した。

それほどまでに衝撃。

相変わらず黄金比のプロポーション。キチン質で覆われただけの際どい格好。風貌も何も変わりはない。

なのに、

髪が短くなっただけで、

——その顔が奈々子とダブってしまうのは何故だろうか？

「——えっ？」

なん、で？

訳が分からなかった。奈々子は、姉は紫稲妻に殺されたはずだ。無関係な人間なのに偶々捕食されてしまった被害者のはずだ。

それなのに、何故紫稲妻は奈々子と同じ顔を持っているのだろう。童顔ではない。その造形は刃太が知る姉のものではなかった。身体は似ても似着かない。

それでも、奈々子の面影があつた。長年兄弟として暮らしてきた人間だけが分かる独特の感覚。

「……姉、ちゃん？」

ぼつりと洩れた呟きにひかりが動揺を露わにするが、刃太はもう紫稲妻しか目に入っていなかった。

刃太の問いかけには答えず、紫稲妻は無造作に足を振るう。反射的に魔剣で受けようとしたら力が入らずに刃太の手から弾き飛ばされた。すぐ近くに音を起てて地面に横たわる。刃太はそれを拾いにいく戦意も喪失していた。

武器を失った敵にトドメを差そうと腕を振りかぶり、紫稲妻が一步前に踏み出す。

「……姉ちゃん？　姉ちゃんなんだろ！」

そんなものも眼中には入らず、ただ刃太は叫んでいた。

「刃太くん、何を――」

「答えてよ、姉ちゃん！」

ぴたりと歩が止まり、突き出そうとしていた腕が停止する。明らかに刃太の言葉に反応していた。それに気づいて刃太は畳み掛ける。

「あんた、姉ちゃんなんだろう!? 俺が分かるよね? なら何か答えてよッ」

必死に訴える刃太の声に、紫稲妻が頭痛をこらえるように頭を抑えた。

両手で頭を抱えて、喉の奥から苦悶の声を洩らした。そのまま膝を地について、背を震わせる。

「うつ、く……あ……ああッ」

「姉ちゃん！」

駆け寄って刃太も膝を折った。それが畏だとか、恐れる感情は少しも刃太には浮かなくてこない。相手の双肩に手を掛けるその姿は、目の前で苦しむ姉を心配そうに見つめる弟のものだった。

「は、あ……っ、刃、太……?」

虚ろな瞳で紫稲妻――奈々子が、なんとか聞き取れるほどの小さな声で刃太の名を呼んだ。

「やっぱり、姉ちゃん……なんだよね?」

改めて確認するまでもない。この声は確かに姉のものだった。今まで気づかなかったのが不思議なくらいだ。

なんで奈々子が紫稲妻の姿をしていてしかも襲って来たのかは分からない。それでも、死んだと思っていた姉が生きていたことに心の底から安堵した。

「……刃太」

「な、何？　姉ちゃ——」

ずぷりと、

刃太の左肩に奈々子の手刀が食い込んだ。

「——あ？」

奈々子が手を引き抜く。肩の傷口から血液が溢れ出た。そこから激痛が走り、刃太は傷口を抑える。それでも指の間から紅い物が滲み出て、深紅の地面に落ちた。

「姉ちゃん……？」

その痛みよりも奈々子に刺されたことに驚いて、刃太は呆然と相手を見た。

奈々子の顔は苦悶に歪んでいて、額から脂汗が滲み出ていた。酸素を肺に送るだけで辛いのか、呼吸が荒い。虚ろな瞳で奈々子は刃太を突き飛ばした。

「逃げて……あたしに、近寄らないで……っ！」

「なんでだよ！　なんでそんなこと——」

訳も分からず叫んで、刃太は奈々子に駆け寄ろうと立ち上がりかける。

「来るなアツ！」

今まで訊いた事がない怒声に、刃太は足を止めた。血を吐き出すように奈々子が言葉を口にする。

「駄目……来ちゃ……っ、ああ……！」

自分の身体を抱いて奈々子は身を震わせた。堪え、堪え、何かを抑えつける。かつてインフルエンザに掛かって四〇度の熱を出してしまった時よりも奈々子の苦しみ方は異常だった。

瞬間、奈々子の背から黒い霧状の物体が噴き出した。それは奈々子と繋がったまま、宙で広がらずに止まる。

なんだ、と刃太が思うと、霧に三つの横線が入った。それらが縦にぐわりと開いたことで、それが目と口なのだと言うことが理解できた。

「余計ナコトを言ウナ、人形風情が」

一際大きな裂け目――口が動いて、見下すように奈々子を罵った。それをきっかけに奈々子の震えが大きくなる。

「くう……っ」

「姉ちゃん！」

短髪になった髪を額に張り付かせた奈々子は、息も絶え絶えに刃

太を見上げた。

「刃、太……あたしを、殺して……！」

文字通り、刃太は言葉を失った。

奈々子はいきなり何を言い出すのか。

殺せ？ 刃太が奈々子を？ 何故そんなことをしなければなら
ない。

せつかく生きていたと分かったのに。それなのにいきなり自分を
殺せなどと。

姉の真意が刃太には理解出来なかった。

ただ奈々子の背後に浮かぶ黒い影は分かっているのか、都合が悪
そうに顔を歪ませた。

「才前は黙ッテイロ。ゴ布林精製の為にスリ減ラサレタプラーナ
シ力持タナイ才前にモウ用はナイ。イイ加減消エテシマエ」

黒い霧が奈々子に纏わりつく。それはまるで包容をしているよう
だった。雷に打たれたように、奈々子の身体が跳ねた。

唯でさえ虚ろな瞳から理性の色が失せていく。その様子に刃太は
堪らなく恐怖し、狼狽した。

「お、おい！ 止める！」

地面に転がったドウリンダナを掴み、訳も分からないまま黒い霧
に振るった。

霧に接触する、と思われた魔剣は下から伸びてきた腕に掴まれ
る。女性的なそれに驚き、刃太は剣を引いて後ずさる。

剣を防いだのは他でもない。奈々子だった。

奈々子を苦しめているはずの霧を庇うという行為に刃太は動揺す

る。

「良イコトを教エテヤロウ」

刃太を見て面白そうに霧が嗤った。

「コノ女のコトダ。ナンデコイツがコンナコトをシテイルト思ウ？」

「え……？」

「ワカラナイカ？」

からかう霧に死角から光の針が放たれた。飛来するそれをまたしても奈々子が叩き落とす。

「そんなのアナタが憑いているからでしょう、エミュレイター」

簾を突き付けて、ひかりは奈々子――頭上の霧を睨みつけた。

「刃太くん、どうやら奈々子さんを助けることが出来るようですよ。奈々子さんは死んでいなかった。ただ乗っ取られていただけです」

『刃太、貴方の中にその記録があるはずですよ』

ふたりの言葉で刃太の記憶が反応する。ドウリンダナと繋がった時に流れてきたモノの一つだった。

エミュレイターは人間や生物に寄生することが出来る。寄生された生物は常識外の身体能力を得るものの、肉体の主導権をエミュレイターに奪われ意志も剥奪される。

こうなれば宿主と共にエミュレイターを斃すしかない。が、例外

はある。寄生されてからの日数が少ないと外的要因——つまり攻撃などによる衝撃で引き剥がすことが出来るのだ。

奈々子がこのエミュレーターに憑かれてからまだ二日と経っていない。

つまり、まだ引き剥がして助けることが可能だと言うこと。

それが分かると、刃太の身体に力が湧いてきた。まだ助けられる。やっぱり姉ちゃん死んでなんかない。暗澹と立ち込めていた絶望を刃太は振り払った。

そうと決まれば、と活力が戻ってくる身体で魔剣を構えた。

黒い霧は——ウィザードの様子に呆れているようだった。目らしき二つの穴と口のような裂け目しかなくても、雰囲気からそれが窺えた。

「……人間と言ウノハ、ヤハリ愚カダ。自ラのタメとは言エコヤツラを助ケル同族の気が知レン。オ前ラは都合の良イ解釈シカ出来ナイノカ？」

「……なに？」

「情ケナイ貴様ラに現実を単刀直入に言ッテヤロウ。」　コノ女は既に死ンデイルガ故に助ケルコトはデキナイ”」

「……っ！　はったり、ですか？」

「ソナナ事をワタシが言ウメリットは？」

メリットは、見当たらぬ。むしろデメリットの方が目立った。

このまま奈々子を助けられると刃太達が思っていれば、攻撃は必然的に手加減が加わる。しかし助けることは出来ないと宣告してしまつたら、攻撃の手は緩まない。

「動揺を誘うのなら効果的なはったりでは？」

「マダ目を背ケルカ？　コノ女は四年前既に死ンデイル。誰ニモ知ラレズ事故デナ。チヨウドワタシが使イ易イ素体ダツタノデ、蘇生サセテ使ワセテモラツタヨ。副作用ナノカ肉体的に成長シナクナリ、自意識マデ残ツテイル大変稀ナモノにナツタガナ。シカシソノオカゲデ、ドンナウイザードもワタシを疑イハシナカッタ。誰モ”陽が沈ンダラエミユレイターに身体を乗ツトラレル人間”がイルナンテ思イモシナイダロウ？」

四年前に、死んでいる？　それで成長が止まった？

その単語に刃太は硬直した。姉は童顔である。”まるで中学生”と見違えるほどのそれは、妹と間違えられるほどだった。

刃太は思い返す。昔は姉を童顔と思っていたか思い出す。

違う。刃太が中学生に上がったばかりの頃、奈々子を見て大人びてると思った。年上なんだと意識させられた。それがいつからだろう。元からのだった身長だけではなく、様々なモノで姉を追い越し始めたのは。

四年前からだ。四年前から姉は成長の歩みを止めた。何もかもが変わらなくなった。だから周りにはみんな童顔だと思い込んだ。別に変な病気は見つからなかったから。

その時には死んでいて、このエミユレイターに寄生されていたというのか？

「そんな、ことが……」

「アル。ダカラコソワタシは生き長ラエテイル。第一才前もコレが紫稲妻ナドとは夢ニモ思ワナカッタダロウ？」

紫稻妻は奈々子が襲われる前から存在している。ならエミュレターは寄生元を変えてはいない。最初から紫稻妻は”奈々子”で固定されている。

「もう駄目……刃太、逃げ……て」

奈々子の口が弱々しく動いた。目の焦点はあっておらず、気力だけでなんとか今の言葉を紡いだのだろう。声にも力はなく平坦だった。

それを鬱陶しげに見下ろして、黒い霧はボヤク。

「唯一の欠点は、貴様達——特に魔剣の主に手加減をスルコトダナ。オカゲでナカナカ殺セン。利用スルタメニ残シテイタプラーナも無クナツタト言ウノニナ。ダガソレモモウ終ワリとナル。コノ女の自意識は虫の息——直、コノ意識も消工去ル」

黒い霧が徐々に薄くなる。消えているのではない。奈々子の身体に完全な融合を果たそうとしていた。

「やめ……姉ちゃ——」

黒い霧が、消える。

それを合図に奈々子が立ち上がった。——いや、もう奈々子ではない。それは紫稻妻、エミュレター。

生命力に溢れた自分の身体を見て、紫稻妻は嗤う。

「ようやく枷が外れたか。いや、まだ完全ではないな。それでも少しずつ力が漲る——素晴らしい」

止める。

奈々子の身体でそんなことを言うな、するな、行うな。

刃太の願いは、紫稲妻によって踏みにじられる。

紫稲妻が剣を握り締める刃太を見て、指の関節を鳴らした。それは、獲物を前に舌なめずりをする獣に似ていた。

「最初は、お前だ」

紫稲妻が地面を蹴り刃太に手刀を突き出す。身体が無意識に動きそれを防いだ。

一撃を受け止めた次の瞬間、紫稲妻の膝が腹部に喰い込んでいた。大槌をぶち込まれたような衝撃に、刃太は数メートルも吹き飛ばされ地面に転がる。鈍痛と言うには鋭すぎる痛みに臓器が破裂したのではないかと思った。

追い討ちを掛けようとする紫稲妻にひかりが魔法を放つ。

「刃太くん！ 早く立ち上がってください！」

釣瓶撃ちされる魔法を紫稲妻は踊るように躲していく。

ひかりだけに戦わせるわけにはいかない。そう思いつつも刃太は動けなかった。肉体的なこともある。だが一番動きを邪魔している奈々子のことだった。

「……ドウリンダナ、姉ちゃんを助けることは出来る？」

『無理、でしょう。……年単位で定着したら、どんなウィザードでも寄生元を助けることは出来ません。それでも助けるたいなら――』

ドウリンダナは彼女にしては珍しく苦しく呻くように。

『お姉様を、殺すしかありません』

——あたしを殺して。

そんな言葉が思い出された。

奈々子は知っていた。自分が化け物に犯されていることを分かっていた。だって自分のことなのだから、分からないはずがない。

それでもこんなことを相談できる相手を知らなくて、奈々子はずっと自分の中に隠していた。

たまに奈々子は夜にいなくなった。その時の奈々子は紫稲妻だったのだろう。紫稲妻としての記憶は辛うじて奈々子も分かっていたのか。きつと夢として見ていただろう。刃太がウィザードとして覚醒していない時に見た夢のように。

今思い返せば、

刃太は奈々子が紫稲妻であると気づかなければならなかった。

数日前の朝、奈々子は行方不明事件と類似している殺人事件があると聞いた。警察も関連性を疑っていると、刃太の周りでも噂されていた。

噂されていた。元は早朝のニュースである。上代家もニュースを見ていた。

でも刃太達が食事している時流れていたのは”天気予報”だった。奈々子の言った物騒な出来事については一言も触れられてはいない。あれは、家族に出したSOSだったのだ。受け取られることがないと分かった。自分はまだニュースに出ていない事件を知っている。犯人は”自分なんだよ”と。

刃太が輝明学園に忘れ物を取りに行こうとした時、奈々子の好きな番組がやっているのにリビングにいなかった。だってその時彼女は輝明学園に向かっていたのだから。

それに、刃太は確実に気づかなければならない異変があった。

それは上代家に”空き部屋なんて一つもない”と言うことだ。

上代家は貧乏と言うわけではないが、一部屋余らせていられるほど裕福なわけでもない。

両親はドウリンダナを泊めると言われた。泊めるからには部屋が必要である。しかしそんな空き部屋はない。そう考えたはずだ。

それがきっかけになり、奈々子の部屋は消えた。プラーナが少なくなっていた奈々子のことを両親は無意識に喪失し、は奈々子に部屋があることを忘れた。奈々子には部屋があつたはずなのに部屋がない、と言う矛盾は生まれない。

何故なら世界結界が常識を守るために奈々子の部屋に存在した総てを消去したから。だが部屋を失った奈々子はその時点では、まだ真の意味で忘れられてはいなかった。

その晩、奈々子は家族に何も告げずどこかで一夜を過ごしたのだろう。

そうして朝にはいつものように食卓についた。自分が何かを言うて日常を壊したくなかったから。

まだ大丈夫。あたしは消えない。そう思った。

なのに学校からの帰宅途中、ドウリンダナのホームステイをきっかけに奈々子の中にあつたアイデンティティが僅かに崩れた。唯でさえ少ないプラーナが減少していたそこに付け込まれ、プラーナを総て喰い尽くされたのだ。

こうして上代奈々子は消失した。

「なんで……」

今まで気付こうとしていなかったのか。

紫稲妻が上代家に直接襲つて来たのだから、刃太の居場所を知っていたからに決まっているじゃないか。

例えドウリンダナから知識を貰い身につけたからと言って刃太は所詮素人ウィザード。それに魔王級がここまで手こずるわけがない。

ヴォーテックス

刃太との戦闘にゴブリンも呼び出さなければ、重力弾すら放たなかった。魔王並の力があるのに空さえ飛ばない。必死に剣を振るう刃太が気付くことは出来なかったが、それは間違いなく手加減だっ

た。

フォートレス

この月匣の中にある風景だって、姉の私物が散乱しているようじゃないか。

「殺す、しかないのか……？」

両親に忘れられてしまっても、プラーナを喰い尽くされても尚刃太を護ってくれていた優しい姉を。

『……はい。人の力では、それしか手段はありません』

悔しさに奥歯を噛み締めると、歯茎が裂けて口の中に血の味が広がった。

そうするしかないのかと、もっと良い方法はないのか、そう思考を逃がしてしまう。

姉をこの手に掛けたくない。

だけど、奈々子を救うにはこれしか方法はなかった。出なければ、寄生された奈々子の身体は延々とこれからあのエミュレイターに使われてしまう。

それは許せない。

絶対に許せない。

なら、もうやるしかない。

緩慢な動作で刃太は立ち上がった。身体の痛みはそれほど酷くはない。それでも身体はコルタルに沈んでいると思うほど鈍かった。

これでは駄目だ。紫稲妻には勝てない。やると決めた。そうすると決心した。

それが奈々子の為だと自らに言い聞かせた。

遠くではひかりが紫稲妻に矢継ぎ早と魔法攻撃を仕掛けていた。しかし状況は芳しくない。まばたきひとつの時間で形成が逆転して

もおかしくはなかった。

息を大きく吸うと、刃太は迷いを断ち切るように絶叫した。

「——ウおおおおおおおおおおおッ——！」

軽快に魔法を躲す紫稲妻へ接近し、刃太は力強く魔剣を振るった。

「おっと」

当たれば大打撃を与えたであろう一薙ぎは虚しく宙を切る。

「当たらないなア」

紫稲妻は唇を釣り上げて嘲笑する。

——姉ちゃんの身体で、随分芸達者になったな。

嗤う紫稲妻に間髪入れず二太刀目を打ち込む。

下方から切り上げられる一撃はまたしても当たることかなわない。

「——ん？」

紫稲妻が柳眉を顰めた。構わず三太刀目、ダイレクトに袈裟と変化し風を切る。それも紫稲妻は躲した。

四太刀、五太刀、六太刀——。

斬線を無数に浮かべる魔剣はひとつたりとも紫稲妻に命中することはない。なのに、紫稲妻の顔から余裕が失せた。舌打ちをして一度距離をとろうとする。

——させるものか。

逃がさんと斬撃を放った。それを紫稲妻は硬化させた腕ではじき、逃げるのを止める。

「小癩なッ」

ヴォーテックス

重力弾を掌が撃ち出す。重力弾に捉えられまいと身を屈めて避け、同時に紫稲妻へ肉薄する。

至近距離で放つ一撃を軽業師のような柔軟な動きで直撃を避け、紫稲妻は刃太を忌々しげに睨んだ。

「貴様、速くなって――」

剣と硬化した手足が打ち合う中、刃太の瞳は真っ直ぐ相手を見ていた。

刃太の動きは剣を振るうことに速くなり、キレを増していく。経験が身体に蓄積されていき、恐ろしい速度で刃太の剣筋は進化していた。

――ただ、まだ足りない。

こんなものじゃまだ届かない。髪と言うアドバンテージを失っている紫稲妻さえ斃せはしない。

もっと、

もっともっともっともっともっともっともっと、

力がある。知識がある。経験がある。

——リードオン
——読込開始。

ドウリンダナと身体が接続される。剣を振るい経験を得ることと平行して刃太は知識を取り込んでいく。

「そう簡単に殺られるとでも！」

怒声が発せられた瞬間、刃太の視界から紫稲妻が消えた。圧倒的速度による高速移動。

頭上からプレッシャーを感じて刃太は見上げる。数メートル上空、

そこで紫稻妻が腕を突き出していた。

「ヴォーテックス！」

今度は重力弾を避けることは出来なかった。それは命中した途端に膨張し、刃太を重力で拘束する。身体に掛かる重圧で身動きがとれなくなった。

足を止める刃太へ、紫稻妻は足を振り上げ落下と共に踵かかとを叩き付けようとする。

「私を忘れられては困りますッ」

ひかりが漆黒を塗り固めた刃を生み出し紫稻妻に向け撃ちだした。振り下ろそうとしていた足の軌道を変更させて迎撃する。

刃は拮抗することもなく叩き折られたが、その隙に刃太は重力を振り払うことに成功する。

解放された刃太を見て紫稻妻は再度ヴォーテックスを撃つものの、それは回避した。

自由落下の着地点を狙おうと魔剣を構える刃太を見て、紫稻妻は近くの壁——のように巨大なオーディオ機器——に指を食い込ませた。そのまま腕の力だけで天高く飛翔する。

それを刃太も地を蹴りさらに壁の出っ張りを踏みだいに追いつく。ウィザードであるからこそ出来る芸当。

「逃がすか！」

「うるちよると——もう沈めッ」

空中で幾重にも幾重にも幾重にも剣が舞い拳が舞い身体が舞う。火花を散らす刃金と拳。

紫稻妻の蹴りを剣で受けとめた刃太が吹き飛ばされる。進行先にあった何かにぶつかり、それが砕けた。

激痛に耐えながら巨大な破片を踏み台に、刃太は空で君臨する紫稻妻へ襲いかかる。剣が拳に受け止められると、刃太の身体が淡く発光した。

プラーナ解放。

ウィザードは一般人には操作出来ないプラーナをコントロールし、一時的に自分の力にすることが出来る。

増幅された力で紫稻妻を押し切りよろめかせ、お返しとばかりに踵で腹部を穿った。相手は真紅の床に叩き付けられる。

手応えは、軽い。

寸前でもう片方の手で受けられた。たいしたダメージは与えられていない。少なくとも今刃太の身体を蝕む痛みの半分もないだろう。飛行能力を持たない刃太が自由落下を始めると、俊敏な獣のように紫稻妻は地面から飛びだした。

「人間風情が舐めた真似を！」

弾丸を連想させる凶悪さで拳が打たれる。刃太は魔剣の腹で受け流した。また吹き飛ばされると言った愚は犯さない。

上手く防いだと思う間もなく、紫稻妻の回し蹴りが脇腹にめり込んだ。ミシリと肋骨が軋む。

脚力で吹き飛ばされそうになると紫稻妻に刃太は頭を掴まれ地面に叩き落とされた。

衝撃で真っ白になる視界。白濁に染められ消えかける意識。

――届かない。

この程度ではまだ足りなさ過ぎる。

紫稻妻の力は完全ではない。だが時間が経過する度に強くなっている。つい今飛行が可能になり、拳一発の威力も増加していた。

いったい、どれだけ紫稻妻は手加減をしていたのか。

これでは勝てない。勝たねば意味がない。奴に立ち向かえる力が欲しい。

腕を通じて染み着いていく知識にさえ、刃太は満足出来なくなっていた。

紫稻妻の追い討ちを躲し、痛む身体を酷使して立ち上がり剣戟を繰り返す。

その最中、刃太はドウリンダナに叫ぶ。

「ドウリンダナ！ もっと力が欲しい。一時的で良い。一瞬でも良い。それだけの間で——勝てる攻撃をッ」

あるはずだろうと思った。ドウリンダナには魔器解放のさらに上位の力があるはずだ。この魔剣はこんな程度の代物ではない。今流れてくる知識もドウリンダナは意図的にセーブしている。

きっと、それ以上は刃太の身体に多大な不可がかかる。

『ですが——』

「そうでもしないと勝てないんだ、ドウリンダナッ！」

「何をこそこそと！」

殴りかかってくる紫稻妻をひかりに援護されながらいなした。

猶予はないとドウリンダナも悟り、

『……良いでしょう。今から二つだけ技を送ります。これが刃太の限界です。これで、片を付けてください』

「——充分！」

心臓の鼓動に合わせ、血流に乗ったかのように身体へ知識が流れ込んできた。

魔器解放を超える真の意味での必殺技。

もうひとつは――

刃太は再度プラーナを解放させ切り込む。強化された切っ先が硬い紫稲妻の腕を浅く裂いた。それが辛うじて保っていた紫稲妻の堪忍袋の緒を切断した。

「いい加減飽き飽きだッ！」

声を荒げて紫稲妻が上空に飛び上がる。プラーナを解放をすれば追いつかれるであろうが、そう何度も軽々しく使えるものではない。数十メートルの高見から紫稲妻は刃太を睥睨した。

「力も戻った。これで汗臭い戦いも終わりにしてやれる――」

紫稲妻が両手を突き出した。その先で漆黒の塊が形作られていく。収縮しているのは重力。それは先程のヴォーテクスとは比べ物にならない破壊力を内包していた。照準は刃太に合わせり、破壊の化身は暴力性を上昇させていく。

「刃太くん、逃げて！」

切羽詰まったひかりの悲鳴が聞こえた。それでも刃太は逃げようとしなかった。

無理なのだ。あれの射程から逃れることは出来ないと、ドウリンダナからの知識が告げていた。撃たれた後に避けようとしても、あれが巻き込む範囲は広い。とてもじゃないが避けられない。

それにもし下手に動いたら矛先をひかりに変える可能性がある。自分だけ助かってひかりが重傷――下手をすれば死ぬ――を負うな

んて許せない。

だから、刃太は動かなかった。冷や汗を流しながら強く紫稻妻を睨みつけた。

その視線が殊更紫稻妻の神経を逆撫でした。

そして、

「……失せる。——ヴォーテックススクエア」

暴虐の弾丸は解き放たれる。

収縮していた重力弾は途端に膨張し巨大な重力の塊となる。それはもはや弾丸ではなく重力の波だった。

それが刃太を押し潰そうと迫り——

紫稻妻は目撃する。刃太の目がまだ諦めていないことを。魔剣が光り輝いていることを。

魔剣の刀身にルーン文字が浮かび上がる。それは鐔に刻まれたものとは似て非なる存在。魔剣自身の所持していた魔力がそのルーンの力を呼び起こす。

『この剣、担い手を襲う災厄を切り裂かん——！』

刃太は重力破に縦一閃と魔剣を振り下ろした。

「——ああああああああああああっ——！」

面を描いていた重力破が二叉に斬り裂かれ刃太の左右を通り過ぎていく。圧倒的な圧力に押し返されそうになるのをこらえ、刃太は魔剣で重力破を両断した。

ふっ——と言う僅か静寂。

それは刃太の後方で巻き起こる爆音に弾き飛ばされた。大地が鳴動するほどの衝撃が巻き起こり、紫稻妻はその様子を驚

きながら見下ろしていた。

「な、んだと……っ!？」

それが紫稲妻の犯した最大にして最後の過ち。

刃太は乱雑に放置された障害物を飛び越え、紫稲妻に接近していた。一際巨大でマンションと同サイズのそれを蹴る。身体は宙に投げ出され、落下先には紫稲妻の姿があった。

ワンテンポ遅れて刃太に気づき、紫稲妻は瞠目した。

「——ッ、人間如きがアアアアアアアアア！」

紫稲妻が凝固した貫手を繰り出し、

「封印、解放——ッ！」

魔剣の鏝に刻まれたルーン文字が目を焼くような極光の光を発した。それは眩く魔剣を包み込み——

——光の剣となり紫稲妻の身体を切り裂いた。

鮮血が舞った。紅い血液が花弁のように空に散った。

「そん、な……」

そう呻いて、紫稲妻の身体は落下した。続いて刃太の身体も地に落ち始める。思わず魔剣^{ドゥリンダナ}を投げ捨てて紫稲妻を抱き止めた。

そのままなんとか着地すると、全身に激痛が走った。それでも紫稲妻——否、奈々子は落とさず、刃太はゆっくりと地面に下ろした。奈々子の身体から流れた血液が地に広がっていくに連れて、顔か

ら血の気が引いていった。姉の命がなくなっていくのを刃太は無力に見ているしかなかった。

姉の死を見届けようとしている刃太を、ひかりと人化したドウリンダナが伏目がちに見つめていた。

「姉ちゃん……」

喉の奥から絞り出された声が洩れる。奈々子の手を掴むと、驚くほど冷たかった。本当にこれが人間の体温なのだろうか。

「……今にも死にそうな声出さない」

奈々子がうつすらと目を開いていた。その瞳に力はなく、きつと出血のせいで目はほとんど見えていないだろう。

「馬鹿……死にかけてるのは、姉ちゃんじゃないか」

刃太の軽口にも覇気はない。

手が震える。今は辛うじて生きている姉が後数分で死んでしまうと思っただけで、どうしようもなく恐ろしかった。

しかもそれを自分が執行してしまったと言うのが、その感情に拍車をかけていた。

「あ、ははは……そう、だよ。あたし、死んじゃうんだよね……」

「………うん、俺の、せいで」

「あたしが、頼んだんだよ。……こんなこと、させてごめんね。刃太は、よくやったよ」

そう言つて励ますように奈々子は笑つた。

——なんでだよ、と洩らしそうになつた。なんで自分が死に掛けているのに他人を氣遣えるんだよ。

最後まで、死ぬその瞬間まで、こんな情けない弟を守ってくれるんだよ。

姉ちゃんのメッセージに気付きもしなかったのに。良くも殺したなと恨み言を吐き出してくれてもいいのに。

お調子者で、子供っぽくて、悪戯好きな姉。

けて死んでいい人間なんかじゃない。家族にさえ忘れられて消えていい人なんかじゃない。

それなのに奈々子の手は氷のように冷たくなり、脈拍も無くなつていく。

「……ごめん、もうお迎えが来たみたい」

冗談めかして呟き、奈々子は弱々しい力で刃太の手を握り返した。まるで産まれたばかりの赤子が自らの存在を確かめるように。

「ねえ、刃太……そこに、いる？」

「……うん、いるよ。ここにいる」

もう目が見えていない奈々子の手を握り返した。

ここにいる。ずっといる。

姉に迷惑をかけ続けていた駄目な弟だけれど、死ぬとき位は安心させてやりたかつた。

「良かった……刃太はそこ、に、いるんだね……」

刃太の言葉に、奈々子は顔を綻ばせた。

それを合図に、刃太の両手から奈々子の手が滑り落ちた。

血の海に落ちた手を刃太はもう一度握り締める。握り返してくる力はない。体温も、鼓動も、僅かにあった息遣いも、今ではまったく感じとれなかった。

人の死に顔は、もつと苦しげだと思っていた。でも、世界にさえ忘れさられた姉の死に顔は、
眠るように、酷く穏やかだった。

「――っあ」

もう我慢をすることが出来なかった。心配を掛けまいとしていて堪えていた涙はついに決壊した。

「あああああああああつ！！」

滂沱の涙、なんて生涯流すことがあるなんて思わなかった。あんなの架空の物語でしかないものだと思っていた。

止まらない。流れ出す涙は我慢することが出来ない。

胸が引き裂かれたような痛みがあった。ウィザードとして覚醒してから受けた痛みさえも、これに比べれば些末なものだと思った。

姉を手に掛けたのは紛れもなく自分だ。泣く権利なんてないのかもしれない。

でも、彼女のために泣ける人間はもうこの世にはいなくなってしまった。

だから――。

溢れる涙は止まらず、奈々子の頬を暖かく濡らした。

ひかりもドウリンダナも、刃太に声を掛けることは出来なかった。ただ、奈々子が息を引き取るのも黙って見ていた。

ひかりが俯いて、無念そうに呟く。

「私に、もつと治癒の力があれば……奈々子さんを助けられました」

「そう……かもしれません。でも、そんな仮定に意味はない。ひかりが自分を責める必要ありません」

淀みがほとんどない言葉。けれどドウリンダナの所作しよさにも暗い霧囲気が漂っていた。

「神様は、やっぱりいないんですね」

ひかりは箸を握り締めた。

刃太の嗚咽は途絶える気配も見せない。

涙で歪み、魚眼レンズを通して見ているような視界で息絶えた姉の表情を見た。

もう一度、

もう一度、奈々子の笑顔が見たかった。

また一緒に食事をしたかった。

また一緒にたわいもない会話したかった。喧嘩もしたい。好きなアーティストの話題だってなんでもいい。この際さつきまで行っていた殺し合いでさえ良かった。また姉と一緒に何かをすることができるだけで嬉しかった。

無念しか浮かんで来なくて、嬉しい思い出さえ残酷な刃に変わってしまつて。

辛くて悲しくて、

今はただもう一度。

この人の笑顔が見たかった――。

「――そんなに泣かなくなつて、良いじゃない。男の子でしょ？」

そんな声が、またどこからか聞こえてくる気がした。

下から伸びてきた手が、隻眼だけ碧眼になっていた刃太の目に浮かぶ涙を拭った。片目だけ晴れた視界で、刃太はぼんやりと目を開く奈々子の姿を見た。

「……大丈夫？」

泣き止まない弟を困った風に奈々子は見つめた。

信じられない。そう夢でも見ているように刃太は奈々子を見て、
譫言^{うわごと}みたい^{こと}に呟いた。

「……姉、ちゃん？」

「……うん、そうだよ。あたしね、閻魔様に門前払いされちゃったみたい」

とぼけた風に言うそれは、間違いなく長年見てきた姉のものだった。

刃太は無言で姉の身体を抱き締めた。

腕の中の姉は暖かくて、無くなったはずの血液の脈動も息遣いもあつて――。

刃太は恥も外聞もなく、再び涙を流した。悲しみではなく、世界最高の奇跡に感謝して。

まさしく神が引き起こしたとしか言いようがないに奇跡に、ひかりは驚きのあまり呆然としていた。

ひかりは知っている。これが神に寄りもたらされた奇跡であることを知っている。かつて神であった者が起こせる一握りの奇跡であることを。

「……リンさんは、知っていたんですか？」

「……………」

ドウリンダナは黙して語らない。ただ喜びあう姉弟の姿を見つめていた。

ひかりも二人——刃太の丸まった背を見ながら、もう一度。

「刃太くんが、”大いなる者”であると知って、貴女は契約したんですか？」

考えてみればおかしな話だった。魔剣使いは魔剣に選ばれ初めてウィザードとなる。それまで魔剣使いは所詮ただの人間であり、月匣の中で活動出来るはずがない。

当然魔剣に見込まれる存在はウィザードとして資質も高く、月匣内に入れる可能性はなくてもない。

だが他の部分——成長速度ひとつとっても刃太のそれは常軌を逸していた。

いくらドウリンダナの知識と言う支援を受けたとは言え、人間はそう簡単に記憶を身体に覚えさせることはできない。百の知識を送った所で、だいたい半分覚えるかどうかだ。何せドウリンダナに蓄積された記録は過去に彼女を振るつた人間のものである。例えば同じ剣術でも使用者が違うだけで動きは変わってくる。骨格から筋肉の繊維まで似通っている人間はそういうものではない。そんなの一卵性双生児くらいだろう。

なのに刃太は百をほぼ欠落なく百として吸収し、戦闘中にそれを使いこなした。これは一介のウィザードに出来ることではない。

大いなる者——”古代神の生まれ変わり”ならば、可能であるのだろうか。

刃太は最初からウィザードであった。けれどそれに気付くような

出来事はなく、月衣も自分が月匣内で活動できる程度しか展開させられていなかった。それがドウリンダナと契約を交わした瞬間に覚醒したのだろう。

ドウリンダナは姉弟を見ながら、どこか遠くを見ているように目を細めた。

「わたしが選んだ主が、最初からウィザードだった――。ただそれだけのことです。……主のお姉様は助かった。今はこれだけで良いでしょう？」

何百、もしかしたら何千年と生きているのかもしれない魔剣を見て、ひかりはふと考えつく。

もしかしたら、彼女は昔――それに蓄積されている知識は、まさか――。

そう思ったが、ひかりは口に出すことはなかった。確かに、今はどうでもいい。そんな真相なんて些細なことだ。

今は、この小さな奇跡に感謝しよう。

10 - b : 幕間

燃え滓のような黒い残滓が風に吹かれてもいないのに浮遊していた。

その黒い霧は、人気のない場所で肉体を作り上げる。不定形のそれが形作ったのは、あどけない少女の姿だ。

その少女は息を切らせながら月匣内の壁を叩き、口汚く言葉を吐き連ねた。

「クソクソクソクソツ！ 最悪なんでどうして！？ 何年も潜伏してたって言うのになんで失敗するわけ！」

黒い霧——紫稲妻、またの名をティスⅡロンダ。裏界では名さえも知られていない低級の魔王である。

フアー・ジ・アース

人間界へ訪れ人間に寄生しプラーナを集めたのは良かった。最近では焦って1ヶ月に何十人も殺してプラーナを収集していたが、それもどうでもいい。別に人間がどうなろうと知ったことではない。問題はそんな豚畜生のような生物に敗北したことだった。

せっかく集めたプラーナは泡沫と消えた。何年も掛けて行ったモノが人間のせいではなかったことにされるのは、許し難きことであった。彼女らにとって数年なんてまばたきの時間でしかなかったとしても、だ。

「もう最低、ムカつくウザイウザイあもう！ 復讐してやるわ。必ず地の底からでも追い掛けて喉笛に噛み付き八つ裂きにしてやるわ。……この”追跡の獵犬”の名に掛けてねっ！」

ティスⅡロンダの鋭い牙と爪に凶悪な光が反射する。

魔王の脳裏には何百と言う復讐パターンが浮かんでいた。どれが

一番苦しめられる。どれが一番愉しい？ いや総て飛びきりに愉しい。ならばどれを実行する。腕をもぐ？ 頭皮を剥がす？ それとも目の前で友人を殺していく？

どれもこれも最高だ。いつそ総て行おう。最後にウィザードのプラーナを喰らえばもう最高に達しない。今からその日が待ち遠しい。

「ふあははははっ！ 月夜ばかりと思わないことね、ウィザード！ 精々背中には気をつけなさい。このティスⅡロンダに殺されないようにねッ」

月匣に響き渡るは狂気の入り混じった哄笑。見るものを総毛立たせる壮絶な嗤い。確かに”ソレ”は人と異なるモノだった。

「——ああ、それは怖い。おちおち寝てもいられない。安心するには元凶は断つしかないな」

「……………え？」

ティスⅡロンダは突然の声に背後を振り返った。
飾り気のない無骨な砲身が目の前に突きつけられていた。

「謝らんど。俺は寝るときくらいぐっすりと安眠しないんでね」

「アンタは——」

それが、ティスⅡロンダの残した最後の台詞だった。
フォールンエンパイアから放たれた弾丸は魔王の頭を吹き飛ばし、
この世界から抹消させた。

愛箒を肩に担いで、トレイターは消えかかった月匣を見上げた。

「――さて、帰るか」

こうして、世間を騒がせた大量行方不明事件はその幕を閉じた。

終：そして、みんな

花川ひかりと境多恵はふたりで通学路を歩いていた。空から朝の暖かい日差しが差し込んで、ふたりを優しく包み込んでいる。談笑を交わしながらの通学路。別にどこも変わらぬ風景だった。それでもひかりにはとても貴重に思える。

あれから既に一ヶ月近い月日が経ち、季節も移り変わりを始めていた。

それでもなお、あの事件は鮮明な記憶として脳裏に刻まれている。でも、既に遠く過ぎ去った出来事のようにも感じていた。

「んん？ ひかり、どうかした？ なーんか遠くの方見てない？」

多恵が身体を寄せてぱちりと開いた両目でひかりの顔を覗き込んでくる。

「え？ そうかな？」

「うん、なんか隠居したお爺さんみたいな顔になってたよ」

まだ私は高校生だよ、と口をとがらせる。うら若き乙女にそんなこと言わないで欲しいものであった。ひかりが隠居する年齢になるのは、まだ半世紀ほど時間がある。

でも、遠くを見ていたのは事実かもしれない。

ひかりがウィザードになったのは何年も昔であるし、家庭環境からこの世の真実はもつと前から知っていた。それでも魔王クラスと戦ったのはあれが初めてで、正直あの時は生きた心地がしなかった。そんな修羅場をくぐり抜けてまたいつもの日常に戻ってこれたことが、今でも少し信じられない。そのせいか安心感や慈しみの感情

がそんな視線になったのだろう。

そういえば、と漆黒の外套をはためかせる青年を思い出した。あのウィザード——トレイターは果たしてどうなっただろうか。月匣が消失した後探してみたものの、見つけることはできなかった。

だが不安には思わない。そう簡単にトレイターは負けるようなウィザードではないだろう。きっと任務が終わって、絶滅社に帰っていったのだ。今頃別の何処かでその強力な力を存分に振るっているに違いない。

輝明学園の制服を着た生徒が通学路にちらほらと見あたり始める。自然と辺りは雑然とした会話で騒がしくなる。

輝明学園の正門は遠目でもはっきりと確認出来た。阿吽の仁王像と大鳥居。こんな物がある学校をひかりは他に知らない。しかも異常なはずの光景が年月を経て街の景観に馴染んでしまっているものは。

おっ、と校門の辺りを見て多恵は声を上げた。横にいるひかりの肩を突つつく。

「ひかりひかり、あれ上代じゃない？」

多恵が指差す方を見て、ふたりの人間の背中を見つけた。両方とも輝明学園生徒の証である制服を着ていた。

片方の少年の背中、少し頼りなく見えてしまふ。けど実際は、そんなに弱くないことをひかりは知っていた。

その隣を歩く長身の女性はまだ見慣れない。隣の彼は背が取り立てて高いわけではないけれども、男性である少年の身長よりも頭が上にあった。

「おはようございます——」

そのふたりに手を振って、ひかりは声を張り上げた。

＊

ここ最近の上代家は騒がしい。同居人がひとり増えたからか。いや、その女性は寡黙でうるさくはない。

ただ元から上代家に住んでいた約一名が実に騒がしかった。騒がしいうえに、その約一名の周りは色々と起伏に富んでいた。

見た目も中身も行動も。

そんなわけでベットで寝ていた刃太は早朝からボディープレスを喰らうことになったのも、件の約一名のせいであつた。

「げふう！？」

別にボディープレスをかましてくれた奴が重いわけではないのだけど、加速や落下で速度を付けられたそれは非常に強烈な衝撃を与えてくれた。

上代刃太は安眠を妨げられ、痛みに身悶えた。

その真上でのしかかったまま、女性が無駄に元気のよい挨拶をする。

「おはよー刃太！ ほらほら早く起きないとお姉ちゃんがお仕置きしちゃうぞ？」

「……警告より先に刑罰を下すな！ 姉ちゃんは鏡の国の住人かよっ」

さすがに刃太も怒るものの、上代奈々子は特に気にした風もないいや、女性にのしかかられて怒ってる少年の図なんて怖くもなんともないわけであるが。

「えー、これはスキンシップよ、スキンシップ。姉弟の肉体的な愛情表現」

「そんなの俺は求めてないの！　これが違うなら罰はいつたいたいなんなのさ！」

「それは――」

脱力して刃太の上でだらーんと奈々子が手足を放り出す。罰を今更考えてるらしい。刃太としては時間が掛かるのなら退いてほしい所存である。

数秒の間を開けて、奈々子がベットから降りた。次に刃太の下半身の方に移動して掛け布団をめくった。

「……朝から元気な弟をうしろの娘に見せる、とか？」

刃太が奈々子のうしろに目を向けると、立っているだけで絵になる銀髪の麗人がそこにいた。

「おはようございます、主」

いつもながら平然としてドウリンダナは頭^{ヘッド}を垂れた。

「わたしはもう少し優しく起こすべきだと申したのですが……」

「――っ、おお！？」

即座に下半身を奈々子から奪還した掛け布団で隠し、刃太は飛びずさった。その反応を見て奈々子にはやにやと面白そうに笑っている。この忌々しいバカ姉め、と刃太は奈々子を呪った。

「着替えたら行くからふたりとも先に下行って！」

羞恥に顔を染めながら上擦った声でふたりを追い払う。ドウリンダナは刃太の慌てぶりに首を傾げていた。朝から息を切らしていると、まるで休んだ気になれないから不思議である。

寝間着から制服に着替えて鞆を持つと、刃太も遅れて階下に向かった。途中、隣の部屋に目をやる。

その部屋の扉には、『奈々子とリンちゃんのお部屋』とぶら下がる木板に可愛い字で記されていた。

——奈々子は無事に生存し、個を取り戻した。理由はよく分らない。刃太自身がそれを行ったのだと訊かされはしたけど、実感はなかった。

それでも奈々子は確かに生き返ったのだから、細かいことは所詮些事である。

プラーナも取り戻した奈々子はこの世界に再び存在を確立することが出来た。両親や学校の人間の記憶に蘇り、今までと同じ生活を営んでいる。でも、そこには奈々子を蝕む病原体はもういない。エミューレクター

そうなってから、既に一ヶ月。幾つか変化していることがあった。まずひとつ、ドウリンダナと奈々子は同じ部屋で過ごしていた。

奈々子不在中にそこで寝泊まりをさせてもらっていたためか、部屋の持ち主が復活した時に辻褄合わせでこうなったらしい。

欠伸あくびをしながら刃太はリビングの敷居を跨ぐ。

「おはよう……」

ふたつ目。

「おはようー、刃太っ」

姉の急速な成長。

食卓に着く奈々子の姿は、一ヶ月前とまるで異なる。

黒い髪はショートからセミロングになり、顔付きは大人っぽい女性のものへと変わっていた。身長も上がり、刃太まで追い越してしまった。長身でモデルのような身体付きからは、元童顔少女なのが嘘みたいである。ここ一ヶ月で一気に垢抜けてしまった。

原因は、今まで停止していた成長のリバウンド。それは時間の空白を埋めるように奈々子を成長させた。

刃太と奈々子に母とドウリンダナは食卓について朝餉を頂き始める。

母親や周りの人間は奈々子の急速な成長を不思議がることはなかった。これも世界結界の力と言うことなのか。

奈々子の顔を刃太は盗み見る。血縁者であることを差し引いても奈々子は美人だった。それも一級の。実の姉がこんな女優顔負けに成長するなんて思いもよらなかった。

視線に気づいて、奈々子がテレビと食事を行ったり来たりさせていた目を刃太に向けた。

「なあに？」

「なんでもないよ」

「はーん、さてはお姉ちゃんの美貌に見惚れてた？」

「寝言は寝て言え」

「ひどうい！」

そんな姉から視線を逸らして刃太は食事を口にする。
姉が成長してくれたのは嬉しい。それでも背を追い抜かれてしま

ったのは男として悲しかったりするのだ。それに未だに奈々子の容姿に少し慣れなかった。

何せ、奈々子の姿は宿敵であつた紫稻妻と酷似——ほとんど同一であるのだから。紫稻妻が力を使う時には、奈々子の身体にも力が廻される。それで戦闘時は、止められていた奈々子の時間が本来まで進んでいたようだった。今の奈々子と紫稻妻が違うのは髪の毛と漂う雰囲気だけである。これだけでも、女性の印象はがらりと変わっていたけど。

朝食を食べ終わるとちょうどよい時刻になっていた。ふたりは鞆を持って玄關へ行つた。

「うーん、この靴イマイチ履き慣れないんだよねえ」

新しいローファアを履いて奈々子は不満を零す。

「姉ちゃんの足がデカいからだろ」

からかうように軽口を叩くと、奈々子は半眼で刃太を睨む。

「失礼な！ なに、刃太今朝のこと根に持つてるの？」

「持つてないよ。ただ最近は何で起こしにくるのかと思つてるだけ」

「なんでって、せっかく見た目がお姉ちゃんらしくなつたんだよ？ 弟起こさないと勿体無いでしょ」

「……姉ちゃん、バカでしょ」

なにおう、と横で何事か喚いている姉を無視して刃太は靴を履く

と、外に足を踏み出した。

早朝の日差しに目が眩む。思わず手で日除けを作った。立ち止まる刃太を押しどけて、奈々子が先に飛び出した。身体をよろめかせながら不服そうにしてみるが、奈々子に効果はない。見た目は変わっても中身は変わらないんだな、と溜息を吐いた。姉を追って足を踏み出し――数歩進んでから刃太は不思議と背後を振り返った。

「主、刃太」

そこには西洋衣装を纏ったドウリンダナが立っていた。美しい顔で、彼女は刃太を見ている。今から大切なことを言おうとしているのが分かった。

綺麗な唇を開いて、彼女は静かに問う。

「――あなたは、幸せですか？」

いったい何を訊いてくるのかと一瞬目を瞬く。まったくもって予想外の言葉だった。こんなこといきなり訊かれても返答に困ってしまう。

だから刃太は深く考えもせず、思ったことを口にした。

「うん、幸せだよ」

とてもとても、今は幸せだった。姉もいる。家族もいる。友人もいる。ドウリンダナだっている。これが幸せじゃなくて何が幸せなのか。

「とっても、幸せだ」

唐突な問いには、曇りひとつない純粹な言葉が返ってくる。それを訊いて、ドウリンダナは童女のような笑顔を見せた。満足げでもあり、誇らしさをも感じる。

いつもなら頬が紅くなりそうなほど可愛い笑顔。でもそうはならず、何故か穏やかな気持ちで見守っていられた。

「刃太ーっ、ほら、早く来なさいよー」

姉の呼び声で、この言い表し辛い空気は霧散無消した。くすりと笑い、ドウリンダナが手を小さく振った。

「行つてらっしゃいませ、主」

「うん——行ってくるよ」

刃太はドウリンダナに背を向けて、姉の元に走り出した。自分達の手で勝ち取ったこの日常の下で——。

輝明学園校門前で、ひかりとその友人に声をかけられた。あの一件でひかりとは懇意こんいにさせてもらっていた。

ひかりと多恵に姉と自分。正面玄関にたどり着き別れるまでの間の短い会話。それは特に何があるわけでもなく、取り留めたこともない。

ただ、それが楽しくて。

今一度、刃太は断言した。

——とても幸せだ、と。

f i n . . .

EX：あとがき

はい、というわけでナイトウィザード2nd 人化の剣は無事完結いたしました。いや正直戦闘面とか無駄に冗長で泣きたいですOTL久しぶりの二次創作だったので、少々気をくれしてしまいました。おかげで序盤の無駄な説明！あそこは思い切って全部分からないまま進めて、ひかり&トレイターの説明で全部会話させるよみたいな我ながら大失敗。月匣の解釈もなんだかなー。まあTRPGは人の数だけ解釈はあるジャンルなんですけどね。TRPGを最近になって好きになった人間の台詞じゃない（爆）

紫稲妻の月匣は防御機能が常に稼働していて介入は通常不可能、という考え方で。

正直ルルプで『知覚できれば侵入は容易』とか書かれてビビったんだぜwまあ知っててもトレイターに結界徹甲弾使わせたかったのでやりましたけどね。

なんかダメな部分ばっか自分で露出してる（え

原作のナイトウィザードを知らない人には『小さな奇跡？ 古代の神？ なんじゃそりゃ』とか思われるEDでした。捻ってみたのが失敗か……。

後悔も多々ありますが、基本的に面白く書けたので満足ですけどね。小ネタも色々仕込ませてもらいました。気付いた人はニヤリとして頂けたら。何故か英魔様混ざってますしw

それでは、皆さんの感想存分にお待ちしております。わっほう！

……最後に作中登場キャラクター達のデータを掲載して終わります。
ちなみに紫稻妻のデータは作っておりません。おかげで攻撃が適当
になってたり。敵エネミーはなんか作り辛いのですよ。
そんなわけで、作中キャラはこんな風に作られました。興味がある
方は暇つぶしにどうぞ。

e x : キャラデータ

上代刃太

ウィザードクラス 大いなる者

スタイルクラス アタッカー

属性 地/水

筋力 10

器用 5

敏捷 7

精神 12

知力 7

信仰 7

知覚 7

幸運 6

未装備 最終値

命中 14 12

回避 9 8

攻撃 18 17

防御 10 15

魔導 12

抵抗 8

魔攻 12

魔防 8

耐久力 25

魔法力 30

行動値 12

移動力 ベース/未装備/最終値 2

特殊能力

月衣

月匣

物理攻撃UP（修正済）

ウェポンマスタリー：剣（修正済）

カリスマ！

隻眼の魔力（修正済）

小さな奇跡

陰の気

魔法

ウォータープレッシャー

武装・魔装

バスタードソード

鎖帷子（なんて作中では装備してないので制服／鎖帷子相当と言うことで）

CF修正値2

プラーナ内包値8

解放力2

所持品

HPポーション

MPポーション

幸運の宝石

ライフパス

足が臭い

波瀾万丈

コネクション

柊蓮司

性格

つくしんぼうだけど頼りない。

花川ひかり

ウィザードクラス 魔術師

スタイルクラス キャスター

属性 水/冥

筋力 6

器用 7

敏捷 8

精神 10

知力 13

信仰 8

知覚 5

幸運 6

未装備 最終値

命中 6 4

回避 6

攻撃 6 9

防御 7 8

魔導 17 19

抵抗 12 13

魔攻 22 25

魔防 14 16

耐久力 17

魔法力 27 25

行動値 13 9

移動力 ベース／未装備／最終値2

特殊能力

月衣

月匣

魔法攻撃UP（修正済）

マジックマスター：水（修正済）

伝家の宝刀：ウィザースワンド

マジックサークル

魔力感知

見切り：魔導

魔法

フォースブレイド

ヒール

キュアウォーター

ニードルシユート

武装・魔装

ウィザースワンド

普通の服

アクレイル

CF修正値2

プラーナ内包値8

解放力2

所持品

MPポーション

幸運の宝石

MUGEN-KUN
0 - P h o n e

ライフパス
かわいい家族

○○○○○○○（秘密）

コネクション

性格
上品でいてつつましい。

トレイター
ウィザードクラス 落とし子
スタイルクラス デイフェンダー

属性 火／天

筋力 1 2

器用 8

敏捷 8

精神 7

知力 5

信仰 7

知覚 7

幸運 9

未装備 最終値

命中 1 4 1 2 / 1 0

回避 1 0 1 1

攻撃 1 5 3 0 / 2 7

防御 1 6 1 9

魔導 1 3

抵抗	1	1
魔攻	9	
魔防	1	2
耐久力	2	8 (29)
魔法力	1	6 (17)
行動値	1	1 (10)
移動力	ベース / 未装備 / 最終値	2
特殊能力		
月衣		
月匣		
伝家の宝刀：フォールンエンパイア		
カバリング		
物魔防御力UP (修正済)		
アヴオイドマスター (修正済)		
カースドウェポン (修正済)		
侵魔の血 (修正済)		
魔法		
無し。		
武装・魔装		
フォールンエンパイア		
絶滅社製特殊戦闘服		
CF修正値	3	
プラーナ内包値	7	
解放力	3	
所持品		
幸運の宝石		

MUGEN - KUN
0 - P h o n e

ライフパス

魔の仇敵（修正済）

○○○○○（秘密）

コネクション

性格

冷徹な性格だと思っているけれど、実は素直じゃなくて色々と請け負ってしまう。

秘密の部分はもしかたこのキャラクターを使う時の小ネタですw
修正済と書いてないものも数値に影響しています。

正直、数値が全部合ってるか不安だけど気にしない。そんな壊滅的な失敗はないはずです。

このキャラクターデータはレベル1で作成しています。トレイターの『惑乱の渦』などは修得していません。

刃太はレベルUP時に魔剣使いへクラスチェンジさせてくださいな。

というか刃太の目が隻眼になったのは後半戦だけと言う。

そして魔剣使いスキルは軒並み覚えていない主人公w作中では護法剣から封印解放まで使ってたのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4243d/>

ナイトウィザード2nd 人化の剣

2010年10月10日16時15分発行